

二-35

応用心理学論文集

第2集

第15・16回大会発表研究抄録

第15回大会（昭和28年7月4—5日 埼玉大学会場）

第16回大会（昭和28年11月22—23日 茨城大学会場）



日本応用心理学会

140.4
N77
V.15=16

緒言

本論文集は本学会第一五回大会（昭和二八年七月 会場埼玉大学）および第一六回大会（昭和二八年十一月 会場茨城大学）において発表された研究の概要を集録したものである。

印刷経費の関係上一篇の長さを八〇〇字以内に止める必要があつたので、発表者提出の原稿のうちこの限度を超えたものについてはやむなく短縮改稿を敢てした。このような措置をとることについては第二〇回大会（昭和三〇年一〇月 会場広島大学）における総会においても承認を得たことではあるが、改めてここに執筆各位のご諒承を乞う次第である。

論文掲載の順序については、大会次第書に掲げられた順序に従い、発表室別に一括して類別名称を付けておいた。但し中にはその名称に相応しくない論文も含まれている。

紙面の都合上、詳細な目次を掲げることができないので、類別名称を整理して掲げることにした。ページ順は前後するけれども、繙読上便利であろうと考へてかようにして見た。

目次不備を補うため、巻末の人名索引と大会開催当時の次第書とを利用して頂きたい。

発刊の推進については特に運営委員小保内虎夫氏、印刷については会員妻倉昌太郎氏から多大のご尽力を賜り、原稿短縮の作業および校正については本会事務局員および日本大学心理学専攻大学院学生諸君の協力を得た。ここに記して感謝の意を表する次第である。

昭和三一年六月三〇日

日本応用心理学会事務局において

長谷川 貢

第一五回大会発表研究抄録

第一五回大会発表研究抄録

目録

一、學習	三
二、發達	六
三、社會 I	七
四、社會 II	九
五、檢査	三
六、教育 I	五
七、教育 II	三
八、臨床 I	一
九、臨床 II	三
一〇、職業指導 I	二
一一、職業指導 II	三
一二、異常	九
人名索引	九

臨床 I

第一日 第一室 午前の部

(1) フラストレーションのセラピーに関する一実験

主としてろう幼児について

東京教育大学 小川 再治

目的 授業中フラストレーションして授業の場から脱逸するろう児を直ちに治療して、授業場面にもどすことを目的とした実験である。

方法 破壊的行動によるセラピーを用いた。

実験 フラストレーションした子を実験室へつれ込み次の三種のセラピーの一つを実施させた。一、ゴム粘土で作った物を棒で潰させる。二、ボールを天井から吊しておき、これを殴らせたり蹴らせたりする。三、積木構成物を破壊させる。

結果 一、殆ど又は全くフラストレーションが回復した場合七。二、ややフラストレーションの程度は軽くなつたが、一部解消されずに残つた場合(やや不機嫌の様にはあるが授業の場にもどつた場合)二五。三、効果のみえなかつた場合〇。一般に子供がセラピーを熱心に行つた場合の方がセラピーの効果が大きい様に思われる。又、子供の性格とセラピーの効果との間に、何らかの関連が存在することが示唆された。なお、しばしばセラピーを受けた一部の子は、フラストレーションすると自分で破壊行動をしてセラピーを試みる様になつた。かかる「セラピー中毒」を生じさせない様にする対策が必要である。根本対策として学級全体のフラストレーションの原因を少くすることを考えねばならぬ。しかし問題を「セラピー」と云うネガティブなサイドに限定させるならば、セ

ラピーに伴なう破壊性を次第に少くし、段々、有意義な行動がセラピーとしての価値を持つ様になるよう訓練してみたい。そして最後には、ろう者が自分で「サブプライム」によるセラピーを行える様にしてやれたらよいと思う。

(2) カウンセラーの性格に関する問題点

東京教育大学 井坂 行男

① わが国の中学、高校に専任のカウンセラーを設置し、法制的財政的措置と養成計画を実施することは切実な問題である。

② そこでわが国のカウンセラーはいかなる問題を持つか、従つていかなる性格を持つべきかを調査及びカウンセラーとの面接により把握しようとした。事実まだ法制的基礎を持たないのに昭和二七年一月の調査によると中学高校とも平均一校に一名強のカウンセラー活動をしている教師(大半は兼任)がいる。これらを全国の中・高校の学校数、教師数、生徒数と対比してみた。一例をあげれば中学では一名のカウンセラーで一、六二三名の生徒を高校では同じく二、〇三二名の生徒をカウンセラーしていることになる。

③ 右の如き状況のもとに活動しているカウンセラーは次の諸問題点に突当つている。すなわち、ホームルーム担任教師との関係、訓育の機能と訓育担当教師との関係、校内職員組織上の問題、専任か兼任かの問題、生活指導と職業指導との関係、社会関係特に家庭的背景社会的経済的背景により生じた問題を持つ生徒に対するカウンセリングの問題などである。

④ 右の如き実情並びに問題点からみて、わが国におけるカウンセラー設置・養成およびその性格として、現

在および今後にかなる問題を持つかについての分析を試みたものである。

(3) カウンセリングにあらわれたる不適応行動について

東京大学 中村 弘道

東大学生相談所は二月九日から開設され現在に至つているが現在まで取扱つた事例や種類は次の通りである。

一、個人適応のカウンセリング五七(七六%) 個人不適応二四、健康一八、経済問題家庭問題一二、その他三
二、学業上のカウンセリング一四(一八・七%)
三、職業上のカウンセリング四(五・三%)、計七五(一〇〇%)

これらの事例を通じ次の事が考えられる。

一、個人適応のカウンセリング。(一)家庭からの影響が大きい。(二)身体障害、経済的問題が不適応の原因となり易い。(三)学年の能力と学業の負担とが一致する事が望ましい。(四)社会の不安状態が学生の心に不安感を与える。
二、学業上のカウンセリング。(一)大学入学前のカウンセリングが必要である。(二)大学に入学した最初適切なオリエンテーションの機会を与えてやり得る丈早く大学生活に適応させる事が望ましい。(三)日本の大学では定員制の制約が学業上職業の不適応を増加させる原因の一つとなつて居る。(四)アンダーアチーブの学生に対してはその原因を探求する必要がある。即ち知的に大学教育の目標を達成しながら社会的情緒的身体的に成熟が鈍つて居る事が多い。

三、職業上のカウンセリング。職業上のカウンセリングは(一)学生が自己の能力に適応した職業の選択をなし、(二)その職業についての実際的な訓練を施し、(三)学生が訓

練を受けた職業分野に於て適当な職業を見出し、(四)その職場に正しく適応しているかどうかを追求せねばならぬ。この四つの段階は緊密に連絡している事が必要である。職業教育と職業上のカウンセリングを混同してはならない。またわが国の大学では職業指導と就職斡旋とを混同している。学生が職に就く訓練を与える他に自己の能力に応じた職業分野を賢明に選び、その選択した職業分野と進出するための準備を適切にするための専門的カウンセリングを行う必要がある。

(4) Sibling Rivalry の検出に

しよう

群馬大学 内山喜久雄

sibling rivalry とは特に兄弟間で、或事物や状態をうるために直接の conflict なしに互に競争することをいう。臨床的所見によると問題児の多くはこの sibling rivalry を持つが、直接の質問に対し明瞭にこれを露呈することは少い。かかる rivalry を検出するため Gerald S. Blum の The Blacky Pictures を用いてみる。 sibling では現実場面はかなり直結した問題を取上げている。これ sibling rivalry をもっていると思われる群と、それぞれの同胞との間に果して反応上の差があるかをみた。従って sibling では一応 C. 8 (Cartoon VIII, sibling rivalry) に範囲を限定した。これは C. 9 の絵だけで sibling rivalry の検出が十分だというものではなく、ただこれに最も関係が深いものを選んだというにすぎない。

被験者として臨床的に考察した多くの児童から次の条件を充ち選んだ。条件は両親自から本人以外の同胞を偏愛することを認めた者、同性同胞をもつもの(条件を単一にするため)、何らかの不適應徴候を示すものである。

この四名の他に、かれらの同胞計五名を統制群として選んだ。

C. 8 につきえられた spontaneous story と五つの質問に対する反応をみると、spontaneous story、質問(こうしているのを見てクロはどんな気持ちがあるか)、質問(クロはシロがほめられる価値があると思っているか)、質問(クロが怒っているとしたら誰にか、また何故か)、質問(クロが怒っているとしたら誰にか、また何故か)、質問(クロが怒っているとしたら誰にか、また何故か)、質問(クロが怒っているとしたら誰にか、また何故か) に対しは実験群で明かに sibling に対する rivalry ないし hostility が認められた。

他の二質問についてみると実験群は統制群に比して自分以外の同胞により親切にしてやるのは父か母かのいずれか片親だとするものが多いこと、およびかかる情景を見たとする回数がやや多いが、これだけで結論を出すことは危険で、更に今後検討を要するであろう。

(5) プロジエクティブ・クエッション

による一つの試み

愛知学芸大学 森田清

プロジェクトタイプ・テクニクに基づく質問法により既に計画的に設置されてある中学二年級の共学別学二集団の一般的態度を比較した。

質問項目は a 不愉快不安な気持はどんな時か、b どんな欲望が抑えられないか、c どんな偉人を尊敬するか、d どんなことに気が狂いそうになるか、e 人間の犯す最悪の罪は何か、f 最も困った経験はどんな場合か、g 最後の六カ月をいかに暮すか、h どんな事に最も強い感動を起すか、である。対象は A 統制群(別学組) 附属中二年九七名、B 実験群(共学組) 同二年九九名、共別両組編成入学の後約一年目に調査(無記名、組と番号は記入)

整理は L 自我葛藤、創造、表現等創造的価値実現の態度に関する答、H 自我混乱、分裂等慣習的価値実現の態度

に関する答、N 中間的態度に関する答とに分けて行つた。

その結果① A B 両群共通の傾向(五〇%以上の答)。a 学業成績劣、友からの悪口、教師からの叱責。e 戦争、殺人等の罪悪。以上は学校雰囲気、慣習的社會意識の影響によるのさう。② A B 群に有意差あるもの。A 群 H に関し a 仲間はずれ、悪口をいわれる。b 喧嘩、食欲、物欲。d 神経症の徴候、愛情喪失。f 大勢の前で発表。以上慣習的価値の妨害による自我の混乱。B 群 L に関し c 物理生物、医学者、自由合理主義者の偉人の尊敬。d 失敗感、自責、無力感。f 大勢の前での失敗に対する自責、葛藤。g 養育、愛情、社会奉仕。以上自己葛藤。創造、愛情等の創造的価値実現への態度。次に B 群では、b d f g の無答にみられる自己否定、c (力と統制力の代表者の尊敬) にみられる自己同一視、g (人のため世のため最善を尽くすという表現) にみられる合理化の態度等で自己分裂的である。しかも B 群には L の答で有意なもののみられない。

(6) しつけ方調査に於ける記名無記名の問題

野間教育研究所 ○藤原喜悦
名古屋大学 石黒大義

研究の目的

しつけ方調査において、記名式および無記名式の質問紙を用いたばあい、調査結果がどのような差異を示すかを、実証的に明かにする。

研究方法

群馬県の勢多郡を中心とした農村および町とを選び、

その小学校または中学校の児童・生徒の父兄について研究を行った。

予備調査においては、しつけのそれぞれの型が、父母その他によりどのように評価されているかを明らかにした。(被調査者一九三名)

本調査はつぎの方法により行つた。

I II III IV

第一回目調査 記名 記名 無記名 無記名

第二回目調査 無記名 記名 記名 無記名

第一回と第二回との時間間隔は一カ月。

調査はすべて担任教師が、教育の必要上行うものであるとして、實際教育の事態に近ずけた。

第一回目調査と第二回目調査とに記入した人が同一人であるばあいは二一人、異なる人のばあいは五九人、総計二七三人について研究した。

研究結果

一、予備調査で、しつけの型に対する評価の平均は、かなりの差異があることが分つた。すべての問題領域において、民主型はつねによく評価されており、放任型は多く望ましくないものとされていた。溺愛型と専制型とは前述の二つの型のほぼ中間に位置しており、やや望ましいと評価されている。

二、第一回目調査において、無記名群が記名群よりより望ましいとされる反応をしているのは手伝、衛生、習慣、礼儀の領域で、これは統計的にも有意であった。その他の領域では両群の間に有意な差が見られなかつた。

三、二回行つた調査の結果の変動に対して記名要因は殆んど積極的な働きかけを示していない。

☆☆☆☆

☆☆☆☆

(7) 児童相談における一つの

試み I

——透視鏡の活用について——

静岡大学 ○勝 井 晃
静岡大学 大石 昭 司
静岡大学 塩川 武 雄

従来の児童相談でとかく陥り勝ちであつた主観的色彩の濃い「主訴」のみによる資料と、簡単なテスト結果のみによる安易な診断の弊害をできるだけ排除し、問題児の発見と診断の適正とを計るため、資料の蒐集について特に多角的な立場からこれを集め、特に児童自身の測定分析のため客観的な児童観察結果をうるように、次の如き児童観察場面を設定し、それによつてえられた児童の行動的特徴、性格、パーソナリティを以て診断、助言、指導の的確化を試みた。

透視鏡による児童観察。①テスト中の観察によるテストの客観性の確立、テストとの関係。②テスト中児童の全行動を通じての児童の身体的特徴、行動的特徴、言語、情緒的安定度、忍耐力等の把握。③独り遊びの場面における児童の行動特徴、特に遊びにおける思考的態度、知的態度、情緒的表出、被抑圧的要求、場への適応度、興味および作業の持続力などについての観察。④更に必要な場合には母と子、児童とその友人、兄弟などの遊び場面における人間関係の把握、社会性特に父兄の養育態度、友人との指導性、模倣性などについて観察する。以上の観察結果からえられた諸検査の結果、行動観察結果、性格特徴、以上の結果からみられた児童の問題行動の潜在的エネルギーとしてのコンプレックス、要求の発見等を児童直接の資料として有力な手懸とする。次に主訴その他調査による生育史、家庭環境調査、教育歴、身

体的問題点調査等を児童生活史資料とし更に主訴による

現在の問題点、父兄の児童に対する希望類型または指導類型を審議し、特に最後の目的としての不適応児童の児童自身による「洞察と自己理解」を計画し、そのための父兄の治療的態度の育成を助言し指導することを目的とし、その第一段階としての確な診断の確立を計りたいと思ふ。又特に父兄自身の観察参加による助言の効果も実際には無視できない点である。

(8) 児童相談への一つの試み II

——透視鏡による児童観察——

静岡大学 大石 昭 司
静岡大学 ○勝 井 晃
静岡大学 塩川 武 雄

一、透視鏡による行動観察の結果。A児(六歳一カ月の男)は過庇護児で知能は高いと判断され、フラストレーションコントロールは観察されない。B児(五歳一カ月の男)も知的能力は高いが感情充進が強く、家庭では暴君的存在か、或は逆の内向的存在である環境性異常児ないし性格異常児と考えられる。A B二児を個別に遊ばせた場合と一緒に遊ばせた場合とを観察した所、A児は一人遊びでは遊びに集中するが、B児は転々と遊びを変え、二人遊びではB児はこの新しい友にすぐ話しかけ、遊びを始めるが、A児は警戒的で一人遊びを固執しようとする。しかしコミュニケーションが積極的に両者から行われるようになるとAが遊びの主体となり、Bは従属的にAの遊びを模倣するようになる。

二、父兄の透視鏡観察参加の治療上の効果。

透視鏡観察に参加したA B二児の母親は、傍ら行動について説明されるので、客観的に眺めた自分の子の態度に反省の眼をもつており、相当のショックを受けたと考

える。B児の母親は「こんなにひどいとは思いませんでした」と述懐していたが環境性の異常児の場合にはかかる観察は有効であると考ええる。

(9) 教育相談にあらわれた児童の実態

国立国府台病院 加藤 正明
済美教育研究所 ○山本 敏雄

済美研究所で最近二カ月間に取扱った相談件数は男一〇四、女五〇、計一五四(その大半が小学一〜六年)で、これらを①精薄、②癲癇性疾患、③身体障害、④行動異常に四区分すると(重複あり)①八二・四%①以外は僅か一九名、①のみは八〇例で他の半数は②③④を併有している。四区分の性差は有意でない。(危険率5%以下)精神衛生研究所児童部の相談例と比較すると精研より特に①が多く④や神経症が少い。精薄を正確な知能検査でみると、痴愚四一、愚鈍三五でIQ二〇以下の白痴は甚だ少い。血族結婚による精薄一四例(一一%)は日本のその平均率三・二〜四・八%より高く、血縁異常二五例も多い。胎児期障害二八例、梅毒十反応者なし。難産は調査九〇例中八、鉗子分娩六、仮死六、早期破水一、保温器三。乳幼児障害五二例中ひきつけ意識障害を伴う熱病が多い(三二)。乳幼児期脳障害、出産時障害、無外因に分け、IQ五〇以上と以下とで見たが有意差なし。モンゴリズム一例以外生理的条件による精薄なし。①②併合は一九例で乳幼児期の高度の脳障害が関係する者は一三例、脳波は二一例中一四が異常。②で知能停滞二一中一九が特に顕著。③で知能障害を伴う者二四、②を伴う者八、④を伴う者四、麻痺が多く難聴言語障害もある。言語障害六三例は①③に半数が認められ、遅滞三七、不明瞭二三、吃言二、啞に近い者二、その他一〇である。一

次の行動異常四例中、落着かぬ子二、盜癖一、緘黙一で、いずれも家庭に問題あり。特殊学級の担任による相談で大変であったが、教育部を完全に独立させるべきである。相談も資料もより完備し完成したい。

(10) 児童期における Status の安定性について (第一報告)

福島大学 古旗 安好

この研究はクラス内と子供の Social acceptance および mutual friendship に関して status の安定性を調べると同時に、知能学力などの相関関係も逐年的に調査しようとするものである。

資料は昭和二七年春入学の小学生二二〇名につき継続的に五〜六月毎に調査した Sociometric Score に基づいている。Social acceptance は一定個人が級友から好きな友として選択されたものの総評点で示した。一位として選ばれた時五点を配し、順に五位およびそれ以下を一点としてその合計をもつて Social acceptance score を表わした。mutual friendship score は相互に誘引し合う程度によつて三、二、一の配点、すなわち相互に二位以内で好きな友として指示し合っている時は三点を四位以内で指示し合う時は二点を、五位以内の時は一点を、五位以内で誘引関係のない時は〇点を与え、個人の相友点とした。

Social acceptance と同じ一年の一学期と二学期との相関 $r = .556 \pm .04$ 、二学期と二年の一学期では $r = .791 \pm .02$ ($Pr [0.71 \leq P \leq 0.85] = 0.95$)。しかし mutual friendship では $r = .3 \sim .4$ であるから一般的な social acceptance はかなり恒常性があるが mutual friendship では不安定である。しかし social acceptance の上位、下位の各四分の一における相関関係につきみると、平均

の差は〇・〇一の水準で有意。そこでの資料からは児童のクラス内での social acceptance status は一年後期から二年前期にかけて安定してゆくようである。

social acceptance と知能とは決定的関係はないが算数以外の社会国語理科の標準検査成績との間に有意な相関がある。(一般に $r = 0.3$ 以下) social acceptance の上位群と下位群との社会の平均差は〇・〇一水準で有意。国語理科では〇・〇五水準で有意。算数では有意差なし。児童の家庭の社会的経済的地位と social acceptance との相関は不明であるが、上位群と下位群との平均差では5%水準で有意である。

(11) 家庭生活質問表と調査の一結果

金沢大学 大平 勝馬

教師は受持児童のよりよい人格性形成に関し父母の協力を得、また父母により教育的提案をするために児童の家庭的背景特に父母の指導態度や教育的関心を知る必要がある。本研究は教師がこれらの点を知ろうとする際に児童と父母とに与える質問表の作成およびその妥当性に関し考察したものである。

まず父母の指導態度を肯定的消極的態度(服従的、寛大、受容的)、否定的消極的態度(支配的、厳格、拒否的)、及び中庸の三類型とし、教育的関心を肯定的積極的関心(保護心配愛情)、否定的消極的関心(無視無関心冷淡)、及び中庸の三類型とした。そして児童父母間に予想される具体的家庭生活関係を内容とし、態度、関心各一〇問を作成。更に父母向け児童向けの二種にしたが、これは同一内容で質問形式のみ異なる。

結果は項目別に内容的に考察すると共に数量化して全体的傾向をみる。この場合の父母における数値(評点)

はいずれも一〇～三〇の範囲に分散する。全被験児童（小学四～中学三）七四三名が感じている父母の指導態度、教育的関心の評点段階別人員は評点四〇を中心としてほぼ正常分布を示す。このMとS・Dとをみると態度では男 39.6±4.52、女39.8±4.64、関心では男 41.7±5.76、女44.3±6.04。父母の答えた結果と児童の感じている父母の態度関心との評点上の相関は $r = .62 \sim .79$ の間でかなり高い。本質問表の結果と児童の家庭生活に対する感情調査結果間にも明らかに関連があり、父母が否定的積極的態度、否定的消極的関心を示す家庭の児童には家庭生活を楽しむからずと思つてゐる者の多いことが認められる。

著者作成家庭生活質問表私案の結果からみて、十分工夫した適当な質問紙を作成することにより、児童の人格形成に影響を与えつつある父母の指導態度、教育的関心につき教育上有益な資料がえられるものと考えられる。

(12) Client-Centered Therapy に

おける Transference について

国学院大学 友田不二男

transference は本来精神分析用語で、厳密な意味ではこれに対応する事態を Client-Centered Therapy に求められない。それは多分 Client-Centered Therapist のユニークな行動により Client-Centered Therapeutic Situation が Psychoanalytic Situation とその特質構造を異にするためである。しかし Transference を広義に解し Therapist、か Counselor に向けられる Client の愛情または敵意を含ませると、Transference に対応する事態は Client-Centered Therapy でも殆ど常に見受られる。そしてそれは極めて大ざかみな意味で次の如き過程を辿るようである。① Therapist または Counselor に対する好感、②ま

たは不満③または愛情もしくは敵意。

第一段階での好感は面接継続の言語的表明から、次回面接の非拒否まで種々の形式で表現される。しかし精神病患者や精薄以外は殆んど確実にこれを表明する。従来経験では積極的意志表示が強ければ第二段階も強く表明され、弱ければ面接は早期に終結する。（通常二～三回の面接で終結し以後の経過も良好）

第二段階は Therapist Counselor の意見感情の無表明に対する攻撃的依存の形をとる。これは通常第三～七回目の面接で現われ強化される。一般にその遅くかつ弱い者程期間短く、速くかつ強い者程長くと推定される。前者は第三段階で好感的依存へ、後者は愛情的依存または敵意へと発展するようである。

第三段階では愛情または好感を示す形は漸次その度合を減じ面接は終結する。後者の形は著しく面接回数を増すか、または急速に面接場面を破壊している。破壊した Client には手紙で働きかけるが、再度来談するとは限らず、目下の所ではその理由は不明である。ただし再度来談したい者が常にその後も敵意を持ちつづけているとは限らないのは興味がある。この事実から推すと、面接場面を破壊する最大原因は Therapist または Counselor の技術的貧困によるといつてよからう。

教育 I

第一日 第一室 午後の部

(13) 小学校低学年の限界

山梨県立教育研修所 川村 章

児童の生活態度、興味関心、思考の発達状態から低学年児童の特質は、①未分化である。②自己中心である。

③行動的である。従つて興味の持続が短いことによつておさえたわたくしは、低学年の限界を三年の中にとらえている。この推定は次の調査によるものである。

(一) 作文の表現にみる現実性

「私は〇〇になりたい」の課題作をみると、未分化な表現を脱却しきれない過渡的な態度をあらわしている。

(昭和二七・六調査)

(二) 道徳的判断にみる仲間関係

道徳判断にとらえた仲間関係である。仲間に関与されることは、自己中心的な生活態度から、他へ関心をもつ傾向への転換で、教師との関係は母親の延長とみたい。

(昭和二七・九調査)

(三) 作文の題材にみる関心の方向

「私は〇〇になりたい」の課題作によると、興味関心の方向は、三年にも行動的なものが多い。だが「なりたいたいの」について、将来への見透しをかまえているものは二年は三%で、三年は三五%である。（昭和二七・六調査）

(四) 他を認める態度と科学的態度

自己中心的と他を認める態度を、抽象語の定義作用にひそめて、解答を求めた。

現実的な見方から科学的見方への予想をもつて二つの態度を拾う。（共に昭和二六・一二・二七。二調査検査人員同じ）

(五) 思考の発達検査から総括して

二年は自己中心的で主観的行動的であり観念生活が分化しないのに、三年は客観的理解が浮び上つてやや論理的な態度がうかがわれる。だが、四年に比して極めて幼稚であり未分化の思考方式は混沌たる残滓をみせている。

(14) 幼稚園児の疲労について

愛育研究所 石川英夫

幼児が幼稚園で力の結抗した多くの同輩とたのしくあそび、かなり緊張をもった幼稚園での生活を送つて、帰宅してから、しばしば不機嫌になつたり、食欲減退を来したりというような疲労の徴候を示すことがある。それ故に幼稚園でカリキュラムにこの疲労の問題が考慮されねばならないであろう。今日産業界には早くからこの問題が研究されて来ているが未だ本態は充分解明されていないのが現状である。その測定法は、様々あるが今日甲論乙駁の状態である。そして幼児を対象とするとなると自ら制限されてくるが、その中から次の五種目を選択して五、六歳児七名に実施した。

- 一、色名呼称検査
 - 二、星数え
 - 三、触二点弁別閾
 - 四、抹消検査
 - 五、瞬間頻度
- 以上五種目につき六日間、保育開始前と終了後に測定した。測定は昭和二八年三月上旬、午前九時四五分から一〇時三〇分まで、午後一時から一時四五分までの間である。その結果は次の通りである。
- 一、色名呼称の所要時間は七名中五名は保育後の測定値が増し、誤数と訂正数の合計はいずれも保育後に増加し、所要時間が減少した者二名の中一名に誤数訂正数の方で三倍に及ぶ最大の増加量を示していた。
 - 二、星数えは七名中六名まで誤差値が増大しているが刺戟数が少なかつたので、誤差値が僅少になり結果はなともいえない。
 - 三、触二点弁別閾の測定にはかなりの技術を必要とする

るが、大体幼児にも可能であつた。一名は弁別がでたためであつたので除外したが、閾値は六〜一〇ミリで幼児の感度はきわめて鋭い。保育後の閾値は一名を除き何れも増大し、著しき者は十三・四の値を示した。増大しない一部の幼児の動揺値もかなり大きい。

- 四、抹消検査は保育が不十分なため、検査に入つてからもかなり保育効果がみられ、疲労による成績の低下は求められなかつた。一種抹消は容易にすぎる感がある。
- 五、瞬間頻度では個人差がかなり著しく、同一個人でも相当の動揺が見られる。一名を除き他は何れも測定値が増加している。

以上の如く色名呼称、二点弁別閾、瞬間頻度においては殆んどV・Pが疲労の徴候を示しているが、統計的有意な差を示すものは僅少である。

(15) 保育態度の実験的考察 (第一報)

愛育研究所 平井信義
東京大学 ○石井哲夫

実験目的 幼児期における親子関係の研究は、幼児の発表力の不確実な理由によつて分析が難かしいこととされてきている。そこで、我々は親の方からの分析を試みることに着手し、親の子供に対する保育態度の問題を分析することにした。今回は親が子供の行動場面について、どの位の範囲に於いて規制を与えているか、特に不安感ほどの範囲に拡がっているか、又それが如何なる条件によつて成立するかを調べる事を本研究の目的とした。

実験手続 実際の問題場面を撮影した写真一六枚(危険度の段階を設定したもの)を幼稚園の親七〇名と、未婚女子(女子大生)五〇名にみせてその反応を記録した。その際他に対してその態度を規制する様な発言をしない様注意した。

結果の処理 被験者の中、母親を次の三群に分類して結果を比較した。

- A 最初の男児が幼稚園にいる母親二六名
- B 現に幼稚園にいる子供の上に男児を育てている母親二一名
- C 女兒のみ有する母親二三名

結果の処理法は、不安度の測定と、反応の分類との二項目に止めた。

- 一、不安度の測定
評価基準は、五段階とし、各写真の基準値の差をなくするため、当行動の頻度を別に親から求め、ウェイトをつけた。
- 二、反応の分類

A 叙事的反応、B 批判的反応、C 情緒的反応に分け、此れもやはり前述の三群と女子大生との両群において、各個人の反応を出して比較した。

結果の考察

- 一、不安度
前述A群を基準にして、他の三群の比較を行うと、C女兒のみの母の不安度が次いで高く、B育児経験ある母親及びD未婚者がほぼ同率で一番低かつた。これを考える時に未婚者、女兒の親は現実度の条件からB群は育児経験によつて不安度が低くなつたという理由も出て来ると思う。

二、反応の分類

A、B、C群(母親)間の反応の傾向は殆んど差はなかつた。D群とA、B、C群との間においては、D群の反応は情緒的・批判的反応が少く、叙事的反応が多くなつていた。これは未婚者が各写真における児童の行動を身近かに考えられなかつたためと思う。要するに、今回は、統計的な処理においてもランダムサンプリングが行えなかつたために、一応問題提出の形で第一報告したのである。

(16) 児童の学習指導法に関する比較研究

東北大学 小室 庄 八

二学級を混成して二つの等質集団をつくり一方の組には児童中心の学習指導法、他の組には教師中心の指導法を社会科に於いて行つた。その結果つぎのような事実が言える。

- (1) 児童中心の方法は児童の社会的行動を促進する。
 - (2) 成績を比較して見ると児童中心の指導法は教師中心の方法に比して成績は低下しない。
 - (3) グループ学習に於いては知能の低い児童にとつて成績の上で不利になる傾向が見られる。
 - (4) 児童中心の指導法を行うことによつて自主的に行動するような特性が形成される。
- 教師中心の方法では消極的律的傾向が助長される。

(17) 戦後における児童生徒の国語・数学学力推移

横浜市立教育研究所 宮 部 勇

- 一、本調査の目的
- (a) 戦後における学童の国語・数学の学力の変化を知る。
 - (b) 地域性や民度差より見てその地域の学童の学力はいかに変化しているか。
 - (c) 国語・数学の評価項目における分析結果その間の関係及びいかなる方面に教育効果が見出されるか。

等の検討によつてその原因を探究し教育的方途を考察したい。この調査の副次的な産物としてテストの標準

化の再吟味をも考慮したい。

二、本調査のために使用した標準学力テストの信頼性

- (a) 問題構成のために各問は横浜市と同じ環境の都市を選択し予備テストをして、その小問はG・P分析の結果、九七%以上の弁別力のあるものを選んで構成した。構成方法は直線的段階法でなく、正常曲線の累積曲線によつて配列構成した。
- (b) 本調査のための標本抽出は群団副次抽出法によつた。
- (c) テストの信頼度は(キエダー・リチャードソン公式による)充分信頼し得ると思われる。
- (d) 追試方法 小・中学校とも満二カ年後の教育効果を見ようとして次のように実施した。中学校は
 - 第一回テスト 昭和二五年一月一五日、一六日
 - 第二回テスト 昭和二八年一月三〇日 小学校は
 - 第一回テスト 昭和二六年二月一六日
 - 第二回テスト 昭和二八年二月一八日に実施した。

三、結果の考察

小・中学校何れも昭和二七年度の成績の方が昭和二五年度の成績より有意の差をもつて優る。即ち学力は上昇している。地域別の調査では民度の高い所より低い方が都心より近い。農村地域が成績が上昇したこと顯著である。評価項目別から見ると国語は書字能力がよくなり、数学では数に関する教育的効果が上つていといえよう。

(18) 漢字に於ける鏡映的誤りに

ついて

玉川大学 須藤 泰 男

目的 鏡映的に書誤られ易い字はどういう特徴をもっているかを見る。

材料と手続 小・中学生に書取りさせた漢字の中で鏡映的誤りのなされた字七五種について、その特徴を調べて見た。それにはまず字の特徴というものを、垂直性、閉合性、単純性、相称性、安定性などに分析し、これらの特徴をもつた字を選び出して見て、それらの各特徴と鏡映的誤りの生起状態との間の関係を調べる。

考察 漢字の鏡映的誤りというものは「ヘン」と「ツクリ」とが、各々それぞれ自身多少とも独立性乃至統一性に於て優れ、いわば二つの独立部分から成る様に見える字に於て、現われ得るものと考えられるが、この結果から見ると、この両者の中、鏡映的誤りに第一義的意味をもつのは、どれかといえば「ツクリ」の性質であることがわかる。しかも「ツクリ」の性質の中では、閉合性、次いで垂直性を示す字が、一番鏡映的誤りを起し易く、安定、単純、相称などの要因は、単純では影響するところが少い。

この想像を裏づける様に思われるのは「サンズイ」のある字に、鏡映的誤りが見られないことである。これは「サンズイ」ヘンの独立性が弱く、そのために、字全体が、いわばひとつだからであると思われる。

「ヘン」の性質は「ツクリ」に較べれば遙かに影響が少いが、その中では、やはり閉合、垂直の要因をもつ「ヘン」の字が、他の性質の字よりは比較的多く鏡映的誤りのなされる機会をもつことがわかる。また多くの要因が一緒に働く字の方が、鏡映的誤りのなされる率が高い傾向が見られた。

☆ ☆ ☆

☆ ☆ ☆

(19) 書に於ける間架結構法の

一考察

日本大学 妻倉昌太郎

研究の目的及び問題の所在

間架結構法即ち文字の形の整え方については古来一六法、歐陽詢の三六法、李諱の作と伝えられる八四法その他があるが、いずれも十分科学的であるとは言えない。唐時代の孔子廟堂碑、九成宮醴泉銘、孟法師碑の三法帖からウ冠と一とを採り上げて中央の点から左右の両端に至る距離を実測するといずれの法帖によつても常にウ冠の方が一に比較して右辺が長い。これはミューラー・リヤ一図形の錯視の要因が、この場合にも働くのではないか。かかる錯視という立場から間架結構法に対して一つの解明を加えようとするものが本研究の目的である。

実験

(a) ミューラー・リヤ一錯視、(b) 縦分割錯視、(c) 横分割錯視、(d) 角度の錯視が働くであろうと予想せられる、(a) 宮、玄、六、(b) 呂、里、昌、書、(c) 冊、刷、(d) 糸、以、水、春の一三文字の手本を与えて鉛筆で臨書せしめた。被験者は小学校二、四、六年児童各五名ずつ計一五名である。

結果

- (1) ウ冠の右側は一に較べて過小視されて表れる。これはミューラー・リヤ一錯視の影響を考慮して書写しない結果である。
- (2) 多数の横画または縦画によつて縦または横に分割されている文字は、分割された方向に伸びる傾向がある。即ち分割錯視と同様の現象が見られる。
- (3) 糸、以、水、春などについてみると鋭角は過大視され鈍角は過小視されて書かれる傾向がある。これも錯

視の理論と一致する。

考察

- (1) 漢字書写の際には錯視と同様の要因が働くが、この原因が正に錯視によつて起るか否かは猶検討を必要とするであろう。
- (2) 書写の上達の要因の一つはこうした錯視の影響と見られるものの影響を除くことである。
- (3) 従つて書を鑑賞する場合の態度と、書写する場合の態度とは違わなければならないことは指導者の留意すべき点である。
- (4) 一般に右側が過大に書かれる傾向がある。
- (5) 学年的発達については明かにされなかつた。

(20) 学年末における授賞の問題

静岡大学 塩川武雄

- (1) 学年末における授賞を如何にするかという問題には伝統的慣習の形態をそのまま継続しているものと進歩的革進的形態を採用しているものとの二形態が考えられる。前者は学業、操行、出席の三点より機械的に決定するもので主観的評価が可成り多く見受けられ、後者は主観性を排除して一年間の成長発達の過程を重視して客観的に力学的に見てゆこうとするものである。伝統的立場における被授賞者は、大体定常化の傾向から個個の子供の進歩努力の跡をみてゆき、これを表彰する様に変化してきている。
- (2) 実際には授賞形式を採用しているところと全然採用していない所がある。伝統的保守的傾向の強い所では昔ながらの形態をとるが、その他のところでは子供達の一年間の業績はそのまま蓄積されており、その都度指導が加えられているのであるから別にこれを表彰する必要がないという立場をとつて授賞しないところでは

無授賞に子供が適応化するので問題がないという立場と、授賞により子供が将来奮起努力するという批判があるように見える。

- (3) 授賞の形式には物的を裏づける場合と単に賞状のみを与える場合と通信簿に記入する場合が考えられる。学用品は安価の場合は多人数の子供に分配できるので授賞の場合には有効である。
- (4) 要するに学年末の授賞の問題は優秀者のみに与える可きか、夫々の能力才能等の段階に対応して与える可きか、あるいは授賞が教育的に効果があるかどうかの問題となつてくる。授賞の形式は時空の限定において考えられなければならない。何れにしても評価判定する人の態度は最も重要で客観的科学的な立場より年間の記録を克明にしてなされる可きものである。(未完)

(21) 児童生徒の行動問題に対する教師の態度

熊本大学 藤野藤俊

研究目的

本研究は教師が児童生徒にみられる行動問題をどのような観点から評定しているかを明らかにしようとした試みの一部である。教師に Wickman の五〇項目の行動問題を呈示して、一〇段階で評定させたのであるが、Wickman その他の研究にみられる如く特定の評定の観点を規定せずに、教師として児童生徒の行動問題に対する一般的な態度を求め、その時にとられる評定の立場の問題にしたのである。

調査要領

被調査者を卒業直前の熊本大学教育学部の学生(新しい教育上の知識を豊富にもつが教職未経験者)、現職の教師、教育長講習受講者(校長・校長経験者・指導主事等

で年齢五〇歳以上の者)の三グループに分け、五〇の行動問題を一〇段階で評定させた。各グループ間の一般的な関係をみるためには、(Rho)を求め、個々の行動問題を比較するためには列位間の差を求めた。

結果

(1) 日米の教師の態度を比較すると相互の相関が低く異つた態度で評定することが知られる。個々の内容についてみると、米国の教師は、憂うつ、神経質等の非社会的・退行的な行動を比較的重視しているのに対し、日本の教師はこれらの行動を比較的軽視し、怠惰、ずる休み等の教育指導上直接妨げとなるような行動を重視している。

(2) 三グループ間を比較すると、教師と教育長受講者は比較的接近した評定をなすが、学生はこれらと著しく異つた評定をしている。即ち学生は非社会的、興味の欠如、憂うつ等の内的な退行的な行動を比較的重視しているが、教師や教育長受講者等はむしろ子供の将来に対する影響という点ではそれ程重要とは思われないが、教育指導上直接障害となるような社会的道徳的問題を比較的重視している。

(3) 年齢別、性別、学校別(小・中学校)の間には相互の相関も極めて高く、とくに問題とされるような差異は認められない。

異常

第一日 第二室 午前の部

(22) 脳性小児麻ひ者の諸検査の結果について

国立身体障害者更生指導所 中山 茂

脳性小児麻ひ者は身体的精神的に侵されているため、

その障害を克服し、職業的に更生・訓練の可能性があるかを動作的方面及び能力的、性格的方面より検討してみる。厚生省の調査によれば全国に約三万人の脳性小児麻ひ者が推定される。かれらが他の身体障害者に比し、いかなる程度の活動をしているかその実態の統計資料を概観する。

(1) 脳性小児麻ひ者は未就学数が二二%を示し、義務教育以上は三%に過ぎない。

(2) 就業状況は就業中は約一五%、就業不能一七%、残り六八%は未就業である。

(3) 就業内容については、約八一%が非労働者であり就業者では農業、単純作業などが一番多い。

(4) 疾患部位別においては、各種複合が八七%を示しているのは身体的にも重度であることを示している。

以上の諸調査により、かれらは他の疾患者に比し、職業能力的に劣っているようであるが、当所入所生に対し運動能力、心理学的諸検査を施した結果を次に示す。

(a) 運動能力の平均記録は非常に低く(特に下肢使用の場合)上肢も両側使用種目は低い。

(b) 知能は桐原式検査でIQ80を示し、他の障害者に比し約一〇低い。

(c) 作業素質についてクレペリン検査結果は他の障害者と有意差はない。

(d) 適応性検査では情緒不安定、劣等感、環境関係の不適応が見られ、向性はやや外向が多く、ロールシャツク検査は解剖反応が比較的多い。

(e) 職適検査では、適職群は三〇%に過ぎない。性能検査においてはベグボード、糸さし、書記その他行つたが大部分巧緻性に乏しく他の障害者との差異が認められる。ただし練習効果は少いが認められる。以上、かれらは一見精薄者と誤まられるがそうでない。むしろ動作的制約を受けている面が大きく、今後心理学的検査方法に

よる特殊補導教育を施し、職業的更生を計りたいと思ふ。

(23) 社会環境に反映した精神分裂病及び躁うつ病の妄想内容

国立国府台病院 青木 義治

今次戦争中戦地で発病した将兵の精神分裂病に認められた幻覚及び妄想と、一般平時のそれとどんな差異が見られるかについて前回の本学会で報告したが、今回は引き続き同じ内因性精神病の一つと考えられる躁うつ病をも含めて、戦時將兵の妄想、終戦以来講和発効迄の発病したもの及び講和発効から最近迄に発病したものの三者にどんな相違が見られるかを検索した。これは環境や社会条件が精神障害、症状にどんな影響を与えるかを知る試みである。統計的結果は省き要約すれば、(1)妄想は戦時戦後に比し、戦時將兵が両疾患ともその発現率が高かつた。(2)妄想内容は戦時戦後に比して、前者の場合両疾患とも環境を反映したものが多く、軍規違反危惧を中核とする罪業妄想の発現率も高かつた。(3)環境反映を見せた妄想内容中、具体的内容の傾向は戦時、戦後を通じて両疾患の間に特別な差違は見られなかつた。しかし戦時には戦場の生活環境に直接反映するもの、戦後では敗戦に伴う占領軍政下の政治思想に関するもの、米ソからの影響、インフレ生活の影響など、講和発効後では民主化の促進、個人的特殊な対人関係などに関するものが多く、社会環境の変化を鋭敏に反映していることが示された。(4)分裂病の場合、戦時將兵に発現したもののうち、入隊以前の発病に比し入隊後俄に発病した新鮮例には環境反映が多く、躁うつ病でも同様に立証され躁うつ病の寛解に対して一つの問題を与えられた。(5)而して妄想にいかにかかる環境を反映した内容を示したか、これら内

因性精神病の基礎的疾患を中核とした精神医学的研究が当然行われるべきで、妄想のみを単に問題としてとりあげ、心理的または特に深層分析的解釈を軽々しく下すべきではないことを特に強調したい。

(24) 現今法令に規定されている
心理学者の職場について

日本大学 渡 辺 徹

昭和二五年心・心第九回大会「新しい諸法規に書かれている心理学者の職場について」(第一報)以後四箇年間に終戦後の一特徴新法令に基づく心理学者大量進出。児童福祉法(公布昭二二)、身体障害者福祉法(昭二四)、少年院法(昭二三)、職業安定法(昭二二)、国家公務員法(昭二二)、学校教育法(昭二二)、と関連。厚・法・労省人事院管下の需要源は供給しきれず、心理学者養成の大学の教育課程に大改訂必要。法務省関係進出の縁は「仮釈放審査規程」(昭六)や「行刑累進処遇令」(昭八)など心理学的な訓令・省令を見れば判る。初、寺田精一が渠鴨監獄に就職、犯罪心理学の研究着手(明四二)、出版大一五。大正末から昭和初に刑務所に心理学者進出、昭一三年厚生省新設職業技師に吸収のため司法省は昭一六年から嘱託をやめて少年考査官として迎えた。昭二八年調査では矯正局・矯正管区・刑務所・少年院・少年鑑別所に九〇名余活躍。法令規定程度分類 一、法令直接規定、(一)大学心理学科卒—児童福祉法、児童福祉司・児童相談所長・判定員、(二)心理学専門知識活用—(イ)簡単—身体障害者福祉法、福祉司、判定員、(ロ)精密—家裁調査官、同補(ハ)厳密—少年院教官技官、少年鑑別所員など、二、法令間接規定—学校教育法令、心理学教授・助教授・講師助手、三、専門的職務示唆—職業安定法・職業安定局、

本省・地方事務官・技官、四、職場適合—国家・地方公務員法、中央・地方人事事務官・技官、五、法令欠如・不備、(一)不備—教育職員免許法对学校教育法、職業指導教育教諭、(二)欠如—前記全部の諸法令、諸臨床心理学者、六法令上禁止—医師法、臨床心理学者など。「心理学講座」第七回配本参照。

(25) 行動異常児 Behavior Problem
Children の精神測定と臨床鑑別

金沢大学医学部 精神医学教室 佐 竹 隆 三

本研究は本年五月東北大学において第五〇回日本精神神経学会総会で発表した成人受刑者に関する研究と関連するもので、同時に青少年及び成人の犯罪を個体的側面より究明して、矯正保護の實際に寄与しようとするものである。被験者は中等少年院の湖南学院に収容中の少年犯罪者九五名で、対照群としては成人受刑者五四二名、諸種精神疾患患者二九八名、正常人二五一名、計一一八六名を用い、選択ロールシャハ法(Multiple Choice Rorschach Test)及びゾンディテスト(Szondi Test)の二種の精神測定を施行した。

(1) 選択ロールシャハ法 不良貧困応答(NA)及び総計点(TS)から総合判定を行った結果と臨床所見との一致度を求めたところ、八四・四%の適中率が得られ本法の信頼性を確認した。

(2) ゾンディテスト 本法は未だ充分に本邦学界に紹介されていないので実例により簡単な解説を試みた後、成人受刑者の所見と比較しつつ因子分析、Vector 分析を行う、Szondi 及び Deri の主張する反社会行動症状群ないし、犯罪者徴候と呼ばれるものが高率に発見さ

れるとともに、両者の所見が注目すべき一致を見せた。なお衝動分類、衝動構造式及び犯罪者類型等の考察は時間の関係でふれなかつた。本法の信頼性に関し未だ確言できぬが日本版の完成とともに追求したい。試作ではあるが、われわれが最近作つた日本版を紹介し今後の研究に対し関心を喚起した。以上、選択ロールシャハ法は犯罪傾向の重篤さを知る Psychopathological Screening の役目を果し、ゾンディテストは一層詳細に犯行形式、原因の個体的側面をなす人格欠陥を検出する目的のこまかなふるいであると考えられる。

本研究は現在調査続行中であつて、さらに症例を増加して犯罪予後の課題を究明したいと考える。

(26) 異常児の絵画 (第一報)

てんかん児の絵画

国立国府台病院 菅野 重道
精神科児童部 梅津 寛海
国立国府台病院 渡 辺 位
精神科児童部

当院児童部入院中の臨床的に明確にてんかんと診断された児童五名に対しロールシャハテストを施行し、同時に描画をさせた。さらにこの五名を臨床的行動観察から、いわゆるてんかん性格を明瞭に示すもの(B群二名)とそうでないもの(A群三名)の二群に分ち、両群間のロールシャハテスト結果および描画の特徴を比較検討し、いわゆるてんかん性格との関連性を考察した。これらの児童の生活年齢は八・三から二〇・二までで、知能年齢は四・六から一〇・八にわたつており、種々の程度の知能障害を併有している。

描画は画題、材料、時間等全く制限せず、自力で創作した作品は激励し、出来るだけ成人の絵画概念を除去す

ることに努め創作意欲の発展を促した。ロールシャッハテストの結果としてはB群の一例は全体反応を全く欠きまた間隙反応はB群には二例とも見られなかつた。色彩反応はB群は情緒的不安定、自己中心性の傾向が強い。動物反応についてはA群に比しB群に多い。把握様式ではA群に比しB群は秩序的反応の傾向がありA群では散漫であつた。一方絵画についてはA群に比しB群は創造性に乏しく、描形が神経質で用心深い。描画後の自分の画に対する解釈および連想に乏しく、完成した画の提出にためらいがちである。また描画材料の要求は少く、描画時間は長く、中断して再描画する場合に機械的に単調な態度をとる。

以上総括して、B群はA群に比べ、想像力、連想力に乏しく精神強直性が強く創造性に乏しいというような傾向が認められるように思われた。すなわち両テストの何れの場合もB群はA群よりリジッドで弾力性に乏しい傾向があるように思われた。

(27) 保護少年の再犯予後について

東京医療少年院 樋口 幸吉

昭和二三年から二四年まで多摩少年院を出院した無選択の二二〇名について、昭和二七年までの間の再犯状況を追究した。その結果予後の状況により次の三群に分け考察を進めた。

- I群 再犯なく予後の良好な場合……二一・三%
 - II群 再犯は確認されないが、再犯の危険性濃厚か、非行生活を続けている場合……一七・七%
 - III群 再犯のため矯正施設(少年鑑別所、少年院、刑務所等)に収容された場合……六一・〇%
- これら各群について、年齢構成、保護環境、非行類型、非行動機、少年院内成績、知能検査成績、精神医学的診

断結果などを比較し再犯の要因を求めた。それらを要約すると、(1)年齢ではIII群に年少者多く、(2)保護環境では明かに欠損家庭の出身者が高率である。(3)非行類型として、I群は機会性非行性多く、III群では習慣性非行が圧倒的に多い。(4)動機類型もI群は困窮が多く、III群は傾向によるものが多い。(5)院内成績はIII群が不良でII群はI群よりIII群の方に接近した成績である。(6)脳研式知能検査とのIQ分布では特に差はない。(7)精神医学的診断ではI群に正常五五%、II群で二〇・二%を示し、精神病質か、その傾向ある者はI群で二七・七%、III群五七・七%を示している。II群はIII群に極めて近い。精神医学的類型について再犯率を見ると正常者四六・六%、精薄者五七・二%で全体の再犯率六一・〇%より低く、他方、精神病質では、七六・九%、その傾向あるもの六六・一%となつている。

次に再犯率を高める危険徴候を吉益に倣い七つ選挙。(1)欠損家庭 五歳以前に片親を失うか一二歳以前に両親を失う。(2)就学不全 小学未了者。(3)頻回転職 三種以上の転職。(4)非行反復 五回以上。(5)早発犯罪 一二歳以前。(6)二回以上の施設経歴。(7)精神病質。これら徴候出現頻度と、各徴候の再犯率を求め、再犯因子としての意義を検討した。次に徴候一つを所有する場合を一点とし、三群における得点分布と得点別の再犯率を求めた。その結果II群が潜在再犯群として重要な意味を持っていることが実証的に明かにされた。

(28) 保護少年に行いたるクレペ

リン検査

東京少年鑑別所 佐伯 克

昭和二七年七月一日より同年一〇月末日迄に収容鑑別したる男子保護少年一、一四二名について、クレペリン

内田作業検査を行い、作業素質並びに作業量と学歴との関係を見た。

その結果、同一年齢に於ては学歴の高いものほど作業量が大で、学歴の低いものは其の学歴に応じて作業量が少ない。又作業素質として一般に優、良、可、不可、異常の如く分類してみると、異常の部類をのぞいては学歴と比例しているが、異常の部類は必ずしもそうではない。従つて臨床検査として量的分類を主としない、質的分類に重点をおいた判定法により判定しないと被験者の学歴に左右されて、真の作業素質を判定しがたいと考えられる。

(29) アミタール面接に於る酩酊

状態

慶大医学部 塩入 円祐
慶大医学部 原 俊夫
慶大医学部 蔵原 惟人

アミタールソーダ溶液の静脈内注射によつて、情緒開発・疎通性換起・暗示性充進などが生じることは既に知られている所であるが、今回は、アルコール中毒性精神疾患に於て、アミタール面接により、事態誤認を示し、現在酒を飲んでいよう言語的(例えば、もう一杯と酒を所望する)並に運動的錯誤(例えば、盃を口に運ぶ等)が認められたのでこれを報告する。

結論的に云えば、この様な酩酊状態を示す反応は、アルコール精神疾患に於て、一四例中八例の高率で認められたこと。これに反し、主として神経症よりなる約一五〇例の、非アルコール性精神疾患では唯一例に認められたのみであること。第二には、アルコール性精神疾患の中、震顫譫妄(四例)と渴酒症(三例)では全例にこれが著明に見られたのに反し急性幻覚症と病的酩酊(共に

二例)では総てこれが陰性であつたことである。かかる事態誤認は暗示性充進を示すという震顛せん妄に於て著明に認められたので、暗示性につき一実験を試みたがこれは見るべき相関を得られなかつた。

(30) 少年非行者の人格と環境に 関する諸問題

① 問題と方法

東北大学 大協義一
東北大学 ○安部淳吉

次述は、昭和二七年度科学試験費研究であり、この研究題目は社会心理班の発表である。扱て私共は非行をその行為者が所属する集団の規律に対する抵触行動であると考え。その場合、問題は規律を道徳規準或は法と取るかと云う事であり、両規準の同時的或は単一的侵犯を非行と考えたい。勿論、道徳と法規準は一致するものではない。一方の規準に沿い他の規準に非行とされ統制を受ける場合もあり得る。また同一集団内の属僚間の文化階層の相異による両規準の対立から非行が形成される場合もあり、それ自体非行問題の追及と重要な意味を持つ。今回は両規準の重要な非行領域、社会等を支配する道徳規準により非行としてのみならず国家にとつても少年法、刑法等に基き対処される様な非行領域に限定して出発したい。何故なら両規準は民族学的に、特に現民主社会に於ては本来一体的なものである。今回は非行の中心領域のうち青少年期に限定。これは成人と少年非行者の関連を除くのでなく、成人期、老人期だけに発生した非行形成を切り捨てる事である。青少年期を心身の成熟期として限定せず、社会的人格の形成期と考える。従つて反社会的及び社会的価値の方向へ成熟せしめる経路

の対応局面として非行形成条件を追求すべきである。特にこの年齢層から出発する理由は単に社会問題として重要だからでなく二〇歳代は非行の *Crimes* をなし、三〇歳以上の犯行者の多数を占める再犯者の九〇%はこの年齢層に出発点を持ちこの層が非行の中心的年齢層といえる。そしてこれに社会心理学的接近を試みた。というのは人、社会、文化、の主體的、客體的事態の動的関連こそ、非行形成の本質的形態であり、非行は本質的に社会心理学的課題だからである。非行は社会心理学に關連して始めて社会的、純心理学的に説明される。以上の観点から仙台、盛岡に於ける收容者、取扱者五、六七〇名を調査し、原型的把握に主力を注いで述べた。典型的なものについては次回の報告に譲る。

(31) ② 環境要因としての非行 集団の機能について

仙台家庭裁判所 鈴木 一二

少年の非行形成過程の環境要因中、一次的なものとして家族集団が、二次的なものとして非行集団があげられる。正常家族集団からの落伍者は受動、能動、攻撃の三種の入り方で非行集団に参加する。即ち受動型は「誘われる型」であるが、無抵抗的消極状態でなく、内的には集団への誘いを期待する積極性があり、英雄的少年に依存し勇らしさを求める。第二の能動型は「誘い出す」型で、積極性に富み他の者を配下にして満足し様とする。第三の攻撃型はその参加に当り一応集団の障壁やケルン間に葛藤を起しその和解を通して成員として認可される者。機会と自我の依存性誘引性はこれ等非行集団への参加を一層条件づける。具体的には盛場等非行への接触機会が温存され、又或程度生活史的に規定された自我の弱さ不安定さが成員としての位置づけに依り十一との依存

性誘引性が相互に規定され均衡が保持される。ケルンの存在が不明な初期の非行集団では遊戯的満足を求める場合が多く、無目的に家庭、学校集団の不満に対する補償を求め様とする。此段階では反社会的役割は不明瞭で類似的、同質的である。非行集団のケルンが明かになる第二次段階では成員の役割が明瞭になり能力、非行体験、非行技術に応じて夫々ポストが与えられ、分業化する場合もある。この役割を通じ非行集団内に資格が復活し、無視された人格性が認められ、社会的息吹を感知する。又利那的快樂に依り集団は緊密化する。ケルン存在が明確に固定化、職能化した集団になると、集団はケルンを中心に強く統制づけられ、成員相互は集団に依存し、それで基本的欲求が充され自我が支えられ、不適応状態に没入する。これは自我の一への発展である。専門的職能に従い非行集団から独立する者、なお愚連隊の名誉的寄生的地位にある者、却つて非行集団への不適応を感じ脱落する者はその人格で異なる。結局非行集団内の支持に依り自我が安定され、環境的要因として益々反社会的態度の進化を促す事になる。

(32) ③ 少年の非行形成に於ける 家族集団の役割

仙台少年鑑別所 桂島真禱雄

家族集団は人格形成の典型的な場であり、非行形成の全過程に於て、少年への一方的影響だけでなく、少年の主体をも含み相互関連の場への家族集団機能の力動的な役割をもつ。家族集団の社会的機能中、特に非行に關連するものとして道徳性附与機能と内的安定機能とが考えられる。これを中心に非行形成の發生的典型を考察すると三つの場合を得る。(1)家族集団の持つ組織が反社会的な場合。(2)少年が内的安定を失い葛藤が生じている場

合。(3)行動が漸次反社会的になる時。この仮説の下にケース・スタディを行い、発生型としてこれらの型が現実の場に妥当する事を発見した。本来、現実の場では顕型的な変化を有し、且かかる純粋な操作的典型で説明されない事が多い。かかる典型に於て単一或は複合的事態としてその非行形成の分析は可能である。此処に以下諸項目に把握される発生型を分析の強力な道具として、非行の形成及びその中心的な面に接近し得る。ケース・スタディを通じての實証的経過に於て、各典型の場面上の乃至人格機制上の特色を述べれば、第一の典型では家族集團自体の統制破綻、資質的低格、少年の内的安定の喪失が、第二の典型では家族集團内の緊張発生に制度的、対人關係的淵源が、直接間接に認められる。又概して知的機能が低く特に実行型の知的機能優位者に急速に逸脱するものが見られる。又単純な、自我の発展としての諸形態のみならず、特に知的に普通なものには抗議の形態に於ける葛藤が認められる。第三の典型では特に家庭文化、社会文化と一般的道徳の強化に特に深く問題が関連しており、巨視的には単に少年期のみならず広く歴史的な大衆的道徳規準乃至文化に展開され得べく、微視的には次のテーマである非行集團に特に強い問題の関連を存しているものと認められる。

(33) ④ 青少年非行集團の發生展開

宮城刑務所 堀内 幸雄

或る成長時期に至ると、少年は保護領域としての家庭から離れ社会人としての独立意識を持つ。其の場合彼等特有の自我の不安定を支えるものは単に正常な社会だけでなく反社会的なもの大いに役割を持つ場合もある。正当な社会の領域が彼等の自我を支えた場合、十の価値組織に沿つて自我は發展し、正しい社会人として成長す

る。一方反社会的領域に依り支えられると、一の価値組織に沿つて自我を展開し、反社会的な人格として成長すると考へ得る。正常な社会が十の価値組織に從属する社会人を育成すると見る場合に学校、職場等は孵化場と云うべき機能を持つ段階として意義づけられるが、それと同様に非行化の深度に從い種々の段階が考へられる。非行化の深度により反社会的な人格の形成過程を次の四発達段階に分けて考へ得る。これ等各段階は種々の集團を含み非行化の深度に從つた特殊性を持つている。第一段階、少年が不安定な自我を正常な社会集團に於て安定せしめ様として怠学、家内窃盜と云う様な行為を發散的に孤立して行ふ段階で、他から積極的に援助されない。第二段階、非行を為す者が互の行為を積極的に援助し合う集團を形成し、其れに依つて支えられ一層非行化の深度も進み、一の領域に於て一応の自我の安定が計られる。(例)不良学生等に依つて代表される初期の愚連隊等である。第三段階、行動の領域を全く正常な社会から逸脱してしまふに至り、集團の目標も一の価値組織に從属し、極めて明確になつた段階である。(例)怠学怠業の域をこえた典型的な愚連隊等。通常第三段階を第二段階と共に非行者が反社会的な人格として完成する菓立の時期と考へる。第四段階、種々雑多な一の目的を持つ成員が次第に專業化し、目的への接近の方法に從い凝集されて来た段階である。(例)故買屋を中心とする窃盜集團等。固定し職業化した非行を相互に支え合う個々の集團を形成するに至るもので、この段階を反社会的な人格が完成される最後の段階と考へる。

以上の考察は發生的に抽象されたもので、此處では一種のcinéの如きものをも集團と云う概念を用い示してある。顯型的には各段階を通じ集團の組織化、成員の數等に種々の程度があり、個々の成員の非行化の度にも錯雜したズレが見られる。

(34) ⑤ 成人累犯者の青少年期

東北大学 鬼沢 貞

前述の如く家族中心集團の状況が少年に道徳的、法的基準に何等かの形で誘惑性を失わせる場合、少年の自我は反社会的な価値へ向つて展開される。又それが少年期と云う特性に依り唯自我が進展するのみならず、社会的な人格の独立と云うchannelも重視すべきである。勿論非行は道徳に対する抵触行動であるから、場に依り自我が一の価値組織に向わなくとも殺人放火窃盜は可能である。少年非行の中心的課題は反社会的な価値組織へ向う自我の確立過程にある。その過程を、現在青少年期にある者について報告したが、更に現在累犯五以上の第四期にある者二六〇名を調査し、青少年期を振り返り検討した結果、青少年期を明治、大正に持つ者も現在辿りつつある者と同様で發生的には前報告の通りである。顯型的側面では明治、大正、昭和に依り又地方差に依つて一般的傾向の相異がある。何故なら第一段階は勿論、第四段階でさえ非行は正常な社会の中のみ展開される抵触行動だからである。非行の対象は一定非行集團外の非行集團か正常集團かであり、嚴格に非行集團内の成員には非行は禁止されている。故に非行は發生過程に於て社会の基本的状況と文化に依つて、發生条件に變動を受けるのみならず、非行が職業化されてもそれ等に敏感に反映する事に依つてのみ安全に非行が出来る。先ず「手口」にそれは反映する。特に詐欺に顯著。また制御体制の變動も当然手口に反映する。(例)電話や巡邏制度の精密化に伴い、明治時代に比し短時間に窃盜するため強奪の手口が増加す。集團自体の防衛機制、統制機制にその反映がある。スリ集團は正業を営み、正常な社会の圧を避け、封

建の親分子分関係から次第に統制機制は自由主義的に変わりつつある。戦後の混乱は第二、第三段階への停留を増加し非行集団成員の個人主義化を誘発するが、社会秩序の恢復は非行集団の凝集を固くし、第二、第三段階の停留を減少せしめる。

(35) ⑥ 少年非行者の社会的態度

—東北式T・A・Tの試作とそれによる結果—

尚綱女学院
短期大学 高橋和年

今迄の報告者が少年行動の領域の力動的变化を客観的側面から捉え様としたが、筆者はかかる生活と行動の領域の移動の内面的反映から、主観的面を捉える。即ち非行へと傾斜して行く少年を包む具体的な社会的場を、社会的態度の側面から問題にする。この際社会的態度を、価値組織の内面化に基き個人の現実の行動を方向づける主観的な枠組として考える。この社会的態度は少年の主なる行動と生活の領域に於て形成され変形される。従つて異なる価値組織への移動は当然個人の社会的態度にその反映を見出さなければならぬ。これに立脚して少年非行者の社会態度を検討する。これを実証的に説明する為に東北T・A・Tを用いる。此れはマレーのそれとは異り主に被験者の社会的態度を投影せしめる様に構成されている。刺戟の多くは家庭学校等の社会集団内部に於ける何等かの対人関係の事態を直接指示しており、他の或物は画面の背後にそれが暗示されており、又他のものは多少社会的な臨界場面に關しては、かかる刺戟に依り得られた資料の解析に當つては、マレー式のT・A・Tに對して行われたやり方に余り重きを置かない。もとより、構成された物語の中に被験者のコンプレックスを発見する事は基本的な意味を持つてはいるが、最終的な解

析のゴールではない。むしろ資料から直接採取される社会的態度を個人を包む具体的な社会的な場に於ける彼の社会活動と対応さす事に依り、その具体的な意味内容を確立する事こそ、この方法の課題でなければならぬ。又この対応を通じ非行形成の客観的側面と主観的側面との力動学に迫る事が出来ると考えられる。事実被験者の現実の生活史に於ける、具体的社会的場と社会活動の主観的対応物を、被験者がこのT・A・Tに示した社会的態度に発見出来た。我々がこのT・A・Tを試みた数一例のデータは我々のこの企図が徒勞でなかつた事を実証している。

(36) ⑦ 女子非行者の特殊性

青葉女子学園 小林えつ子
仙台少年鑑別所 高橋春江

この課題は非行形成に對する家族集団の機能、男子非行青少年の非行集団発生過程及びその機能等について考察した結果の(女子に於ける妥当性及び完成した非行の統制場面に於ける変容の考察を通じ)非行形成と矯正に對する配景を与えることにある。反社会的な人格形成に關する家族集団の役割の発生的三類型は、現象的相違であつても本質的には女子にも共通する。保護領域を逸脱した少年を一つの価値組織へ進ませる事にも、第三及第四報告者の挙げる四段階の発達過程を辿る。尚女子非行集団を特徴づける二三の要因を見出し得た。それは集団の組織、形態或は内部的結合様式及び集団成員の機能に關してである。女子非行集団の形態。(1)男子と全く等質的なもの、(2)既成の男子非行集団成員と個人的關係を持つ者、(3)職業的非行集団の仲介者を核とし、一時的結合をなす者等。以上第一を除き集団の結合様式は稀薄で殊に第三の場合は顯現的組織を持たない様思われる。茲

に女子非行集団の特徴がある。集団成員の役割について、總ての集団及び発展段階を通じて認められる事は、女子は生理的に性的役割を果し、受動的であり乍ら本質的には重要な機能をなすと考えられる。以上を通じ非行形成の環境的要因に關し、少女に認められる特殊性は顯型的なもので、発生的な力学に於ては少年の場合と同一と云い得る。次に非行の統制場面に於ける変容展開は女子少年院に於ける「好」「嫌」及び尊敬する人についてのソシオメトリーを通じて、統制場面の十の価値組織と、収容少女が嘗て有し、現に温存している一の価値組織を廻つて展開される適応の過程を追求し、反社会的な人格の解体、正常な価値組織への同化について家族集団及び非行集団への参加の度が、それ等が非行形成に反したと同程度に關係する事を明白にした。即ち制御機制は非行形成と同様の組織を持ち、十の価値組織へ向つて家族集団、社会的事態、少年の心的機制的力動的な絡み合で達成される。茲から非行矯正の配景を得る事が出来る。(事例省略)

(37) ⑧ 矯正施設に於ける少年非行者の適応の問題

東北少年院 ○橋本洋一
東北少年院 桜井一男

前報告の如く、非行そのものはモーレスの累犯行動である限り、社会により制御されるべきものと認定された行動である。従つて、非行そのものの解明の爲にも統制場面の分析は必然的に要請されねばならぬ。統制は家庭、学校、近隣等に於て勿論対処されるが、それに対する反社会的場の誘引する力との關係に於て、その対処が無力であるか、又は逆に一に追込む力として作用した場合非行深度が深まることになるが、この段階に於ける統

制場面として矯正施設を考へることが出来る。この意味に於いて、男子少年の矯正経路がどの様な力学的影響性を持つかを報告する。

私は少年院の果す力学的な過程を、教官が院生に与える道徳規準と試行価値組織、院児自体の寮生活の人間関係が示す Boys value system、及び特定少年個人がバックに持つ非行段階、この三つの要因の力学によつて考察を進めたい。社会的価値に向つて人格が進展した場合を院生活に対する社会的適応と考へる。ここに於ては適応の場面のみを述べる。少年非行者は少年院に收容された当初は、先行施設等に於て社会的価値組織に対し既に十に向つた者と未だ一のまま入院した者とに區別できる。又両者は十又は一の出発点から、一直線に動揺なしに漸次適応方向に向うものと、過程に於て十又は一の方向に向きを変えて、動揺し乍ら結局は正に定位する者がある。

さて、矯正の経路に於ける適応の場面にて、自我が一への誘引力を喪失、十への動機づけを持つことが前提され、その為には一への誘引力によつて支えられた ego を試行価値組織により対処に成功することである。その意味で ego が発達する基盤を J.V.S に於て持つことが要請される。一方少年非行者は、Boys V.S に対処して moral standard の学習を要請され、その成功による ego の安定と発達がなされ、J.V.S から ego は支えられ、望ましき適応が展開されると思われ。

(38) ⑨ 少年矯正施設に於ける

不適応者

東北少年院 渡部健夫

不適応者の院内生活は(1)入院前の自我がその儘一の方面に進むもの、(2)入院前の自我が院内生活の道徳基準の

十一の間を動揺するが、Ego 形式に留り中心的自我は依然一に留るもの、(3)先行施設又は入院当初に進行が喰い止められ、社会的価値に対し既に十の方向に向つていゝるものが、次第に一に展開している型及びその動揺型である。此の類型に沿ひ行動観察、生活指導記録、少年相互の人間関係に依つて生ずる集団の生成発展のソシオメトリに依る記録及び生育史、精神状況等を資料として考察した結果、(1)は社会的道徳規準に一に認可される度の強いものに多く、且つ院内に於る一の場はテロ集団に集約しているから、テロ集団に入つて自我を支え様とする。

積極的なもの、第四段階の反社会集団にいた者等は体力、知能、性格等の差に依つて集団内の形に差はあれ、巧みに一の集団に入つて行こうとする。又社会生活に逃避的反応を取つていたもの、内閉的なものは孤立して一の儘を持続する。(2)は非行化の強い者には少ない。例えばテロ集団の核の威光に依りテロ的振舞をしていた者が、核の退院後「仲間はずれ」にされ十に向つて来たり、十になり切れず動揺している等の同僚関係に依つて、十に向いて来たり、その逆に矯正の規制力誘引力が極度に強弱のあるため一の集団に向う者もある。(3)は再入院者には稀で十に向つた契機が人格に対して強い刺戟でなかつたり、又常に矯正の力を加えないと生活に馴れるに従ひ一に墮し易い。以上を通じて、本来社会的道徳規準に一に認可される方向に自我が形成されている少年は、院内でも矯正道徳が一の集団に入つて自我を支えようとし易い。そして一の集団は矯正に対しての障壁的作用を持ち、若し放置すれば十の働きをする者を圧迫し拡大する。故に不適応者を生じない様にするため院内矯正作用の規制的影響力誘引力を強める事が必要で、一に結果した集団を分解、且つ力を弱める為、例えばテロ核としての少年の移寮及至は個別指導を徹底する事等、種々考慮する必要がある。

(39) ⑩ 拘禁施設内に於ける

精神身体的な適応の問題

仙台少年鑑別所 黒田正大

現在の拘禁施設では身体変調は殆んどないと云つてよい。然し一般的な身体病理的機制の明らかでない、或は偶発的疾患は発生する。尙他の集団施設では殆んど見られない心因性の身体変調症候が屢々見られる。その特徴は所内生活への非適応状態に基く精神変動がある事。拘禁状態の開始或はその経過中に起り、その状態或はそれに関した精神変動と共に消褪する事。発生要因として身体的要因の他、性格、生活態度等から来る要因、入所前及び所内生活での環境要因がある事。器質的な身体病理的変化は殆ど見られない事である。入所前より持続された神経症、神経衰弱、自律神経不安状態等。又生活条件全般の環境条件変動に依る身体変調、身体病理的、器質的な物が主因や一次的原因となつて居る者は含まない。以上の特徴をもつ者即ち拘禁施設に於る精神身体的な非適応状態を、拘禁性反応なる概念を以つて説明を試みる。唯詐病及び身体病理的、器質的要因に基く病氣でも拘禁状態から来る持続的抑圧感から、高度の拘禁性神経症を合併し続発する場合がある。次に発生傾向として新しい環境に対し、比較的若年者、再入者より新入、男子より女子、内外の刺戟に対し過敏な者、身体虚弱者、低知能者、過去の生活に問題点が多く葛藤劣等感の強い者、拘禁条件の不良者等は適応し難い。その反応型を分ける時、自律神経不安、神経衰弱、病的不安、ヒステリー症、拘禁性精神病の六つになる。結論として、拘禁施設特に少年収容施設内に於ては非適応状態及びそれに関連して起る種々の精神変動が所内での生活場面に於て、行動態度の異常反則として確実に現われる許りでなく、心因性

の身体変調症候として現われる場合のある事。その症候が強い程環境的要因から来る葛藤が根強く内在する事。逆に軽ければ葛藤が介在せず、症状発生の前兆としての情緒不安、感情興奮等の精神変動が極く軽いか少なくなる事。精神変動が極く軽い場合は、外面的な行動態度の面には現われず、自律神経系統の障壁として現われる事等である。

(40) ⑪ 総括と検討

仙台少年鑑別所 阿部 満洲
仙台少年鑑別所 牧野 勝

上述の如く、非行発生の中心的過程を家庭及び反社会的集団にとらえ、これを十の社会的領域から一に認可された行動であると同時に、自我が青少年と云う成長期に於て一の方向に支えられ発展したものととして発生的、発達の促え発生の類型的に分類し、それ等が非行にはたす役割を論じた。更に場に於ける価値組織を社会的態度として捉え、又成人累犯者は青少年期に如何なる非行形成過程を辿つたかを検証した。以上は非行発生の場を中心に考へたが、又統制の場からこれを見、矯正施設に於てどんな適応を示すかを施設と少年自体の価値感と集団の価値感及び精神身体医学面より考へて見た。この様な非行の発形成過程、及び施設の状況が女子非行者に就いても男子非行者と同様と云えるかどうか、そこに何等かの差別性があるならば如何なる特殊性があるかを検討し、社会心理学的観点から動的な理解の基に考察したのである。此度の非行問題の捉え方乃至表現は一つの方法にか過ぎず、これがあらゆる探究の態度に代るものとは考へない。我々の研究は序説的意味を持つ第一課題として出発している。今後また、(1)考察の範囲を青少年期の非行発形成過程に限定せず、成人、老人期の非行の問題。(2)

青少年非行の領域に法規準と道徳規準と重り合つた面だけを取上げず、喰違つた面に於ける非行の問題。(3)集団内の微視的關係、権威、価値の關係把握についての問題。(4)発達の観点について今回は一に向う経路を見たが、十に向つて発展する経路とのより積極的な対応の問題。(5)非行発形成過程に於ける社会様相と人格機制との關係の問題。(6)整理方法について数量的展望に於ける大きさの問題。等が残されている。以上の問題より、発生的類型に於ける非行形成者に対する矯正の方法を導き出し、更に反社会的人格の形成される過程を把握する事に依り、その予防的処置の計画が行われること等が今後研究されるべき問題として残されている。

発達

第一日 第三室 午前の部

(41) 乳児の運動機能発達の類型

愛育研究所 平井 信義

乳幼児期に於ける運動機能の発達についての個人的傾向とその意味、即ち子供達が何故平均より早い発達を示し、遅い発達を示すか、その意味が何であるかを明らかにするために子供の発達の類型を求め他の諸因子との關係を究めるのを目的とする。

研究方法 昭和一三年以来昭和二七年までの一五年間に愛育研究所附属保育室で、特に運動を妨げ或は助長することのない保育環境に於て保育された乳児二二名中八カ月以上保育した乳児一二名と、更に総ての発達段階を観察し得る一〇カ月以上の保育をうけた男児三五名、女児三一名、合計六六名を対象とし、行動の始つた時期の記録は医師及び看護婦の記録に基いた。

先ず八カ月以上保育し得た乳児一二名について、平均値並びに最も早くその運動の始まつているものと遅いものとの差を出し、更に体重、身長等の身体発育が終戦前後で差のあるところから、運動機能にもかかる差異が認められるかという事を知るため、戦前戦後に分けて考察した。しかしこれは偏差が大きく比較は困難であり、小さいものをつつても差を認めることは不可能であつた。

次に個々の乳児についての発育の類型であるが、これは極めて個人差の大きいものであり平均に近い発育の状態を示す子供の他に、寝返りに先行してえんこの始まるもの、はいはいがえんこに先行する場合、或る僅かな期間で三・四の運動機能が俄かに始まる例、又二・三の運動機能が始まつて、三・四カ月次の運動機能の始まらない場合等いろいろであるが、現在調査中であるため例数を重ねて類型を結論する。

次に身体発育との關係であるが、これは身体発育の良好な乳児が必ずしも運動機能の発達がよいとはいえない。最後に知能と運動機能との關係であるが、普通児に於て個々の指導を行う場合、運動機能の発達がおくれていることを以て、予後をいうことは危険であることが考察される。

以上例数が少いたため確然とした類型は求め得ないが、個人差の問題については遺伝關係等をも考慮し、確かな類型を求めたいと思う。

☆ ☆ ☆

☆ ☆ ☆

(42) 幼児の道德性に関する実験的研究

東京学芸大学 田中熊次郎

一、実験計画及び実施 五歳六歳の幼児にも道德性の萌芽が実験的に研究出来るか。それは課題場面によつて異なるであろうし生活環境によつても異なるであろう。かかる仮定から以下の実験を試みた。第一実験—キャラメル五個を玩具の犬に与え、それを玩具の猫に分配させる。第二実験—キャラメル五個を被験児に与え、それを友人に分配すること。被験児は、A群—S学園の施設児四八名。B群—M大学の附属幼稚園児一〇九名。

二、実験結果及びその考察 各実験共に(a)分配行為前の判断、(b)分配行為の結果、(c)分配行為後の判断につき吟味し、その(a)(b)(c)の系列についても研究した。それによれば、(1)課題場面による比較では五歳児も六歳児も、A群もB群も第二実験の方が第一実験よりもより利他的行為をする。(2)幻想(Phantasy)を働かす第一実験では利他的行為の発達は著しく表われなかつたが、第二実験の現実場面では両群とも五歳児より六歳児の方がより利他的行為をする。(3)生活環境による比較。第一実験の分配結果では両群の間に差はみられないが、行為前の不承認判断ではB群の方が頻数が多い。分配行為後の判断ではB群の方に分配の多少について不満な者が多く生活環境の恵まれた幼児の方が Phantasy の豊かなことが示された。第二実験では行為前の決断については有意な差は認められない。分配行為の結果ではみかけの頻数はB群の方が利己的になつてゐるがその差は有意でない。従つて富める家庭の子供の方が貧しい家庭の子供よりも利己的であるとはわかに結論しがたい。(4)分配行為の結果と行為後の判断との系列について両群を比較すると(a)利

己的に分配しておいて不満を示すものはB群に多く(有意)利他的に分配しておいて不満を示す者はA群に多い(有意)。即ちB群の子供は利己的行為を反省する傾向を示しA群の子供は不満ながら利他的行為をすることも考えられる。(5)両群共に実験者によりキャラメルが平等に分配されると満足した。(6)幼児の生活環境が行動様式に及ぼす影響の差は道德性の差を生成するのではなく、道德性発達の一要因となる性格の差を生成すると考えた。

(43) 幼児の異常行動とその類型

お茶の水女子大学 平井信義
お茶の水女子大学 ○西本美枝子

Personality の形成に関する一環として、幼児期に於ける子供の問題行動を知り、それが如何なる契機により起るかを知らねば興味深い問題である。この子供の問題行動は家庭あるいは幼稚園などにおける問題等様々であるが、今回は後者の問題即ち、より広い集団の中に於ける子供の問題行動の調査を行い、その原因をつきとめ様として東京都内の幼稚園四五、保育園六七に依頼して実際保育を担当している先生に「保育をしにくい子供」について、質問紙法で調査を行った。

その結果調査実数六一園中三八九名が問題のある子供として報告された。しかしこの際保育をしにくいということの grade に関しては決定的条件を出さず Case work を行つて後、決定することにしたため、今回は直接幼児の保育に當つてゐる者が、どの様な問題行動について困難を感じてゐるかを知り、それらの行動の型の分類及び成因に就ての考察を試みた。(一)問題児として取上げられた事例のうち特に目立つ行動としては、①保育を破壊する行動をとるもの、②行動が非常に消極的で保育に入ら

ないもの、③すねたり、じれたりして先生の行動に影響を及ぼすもの、④他人の関心を集めるため特異な行動をとるもの、⑤その他特殊な行動として、盗癖、オナニー、指しやぶり、おもらし等があるが、これら異常行動の分類については今後の研究により帰結されるべきであるので今回は便宜上の分類とする。(二)次にこうした問題児の成因に就ては一つは兄弟姉妹関係即ち独り子の場合、二児三児の場合はその組合せ、多子家庭の場合は長子、中間子末子等に分け、どういふところに問題が起りやすいか、即ち兄弟間の組合せにより Tension が多く働く子供、要求不満を多く生ずる子供に異常行動が多く出るのでないかという点と、第二としては、家庭環境の問題を上げて考察を行った。

尚特殊な問題として、盗癖、オナニー、どもり、咬指、おもらし等 Case work をもつて目下調査を続けているため、これらによつて更に問題児の成因についての深い考察を試みようと思つてゐる。

(44) 幼児の優勢行動を規定する

諸要因について

東京教育大学 松井三雄
北海道学芸大学 須見芳紀

研究の目的 幼児の集団において、支配—従属、優位—劣位というような社会的関係が、如何なる条件によつて構成されていくかを解明しようとするのが、この研究の目標とするところである。

実験— まず幼児が日常生活において得てゐる遊びに対する経験の種類及びその多少が、新しい集団での遊びの場における彼等の社会関係を、如何に規定するかを検討するために、第一実験を行った。この実験では、遊びに対する経験の異なる幼稚園児四人を一グループにして

実験場面にいれて観察する方法をとった。

次にその結果を概括すると、(1)日常ブランコ遊びを多く行っているものがブランコの実験場面で優勢行動を示すことが多いとは認められない。(2)日常いろいろな遊びを行つているものに優勢行動を示すものが多い。(3)優勢行動を示すものは日常遊動円木を多く行つているもの、どの遊びも余り参加しないものに最も多い。(4)一般に優勢行動を示すものは外向的であり、劣勢行動を示すものには内向的なものが多い。(5)グループ内の優勢・劣勢と身長とは関係がないが、運動能力検査の成績とは積極的な関係がある。(6)一般に優勢行動者は劣勢行動者に比し高い知能指数の値を示している。

実験Ⅱ 劣勢行動を示した幼児の経験に加工することによつて、彼等を社会的劣勢から脱却させ或は進んで優勢行動をとらせるように改変することが可能であるかどうかを確かめるために第二実験を行つた。加工の方法としては、その遊びについての技術的指導を行つた。

その結果によると、ブランコ、ボール遊びにおいては加工の効果はほとんどみられない。積木遊びにおいては加工の効果が或る程度示された。これは積木遊びではブランコやボール遊びにおけるよりも成績の優劣が明瞭に且つ容易に認められるためであると思われる。

(45) 幼児の運動機能

—— 縄とびとまりつき ——

愛育研究所 竹 田 俊 雄

目的 幼児の運動機能の内、縄とびとまりつきが何歳から可能かという発達水準を見出そうとする。

方法 幼児にとび縄(長さ一五〇釐)或いはゴムまり(直径一三・五釐)を与えて「縄とび(まりつき)をし

ましよう」と促す。継続してとび、或いはつく間を一系列とし、三系列続いで行わせ、各系列のとび、或いはつく回数及び態度を考察する。

被験者 愛育研究所附属幼稚園児九六名(四歳児男二名女二〇名、五歳児男三〇名女二〇名、六歳児男二名女三名)。外に特別保育室児(精神薄弱児四歳一〇歳、I・Q・三〇一七六)二三名。

実験日時 昭和二八年六月、午前中自由遊びの間。

結果 縄とび 一、可能な幼児数を二回以上連続してとぶものにとれば、四歳前半は〇であるが漸次上昇して六歳前半男児五〇・〇%、同女児六六・七%となる。二、とび得ないものは全体を通じて男児四七・二%、女児三〇・二%あり、とぶことを拒否したものは男児四三・四%女児三四・九%あつた。三、一系列にとび得る平均回数は四歳前半男〇・〇(女〇・三)、五歳前半男〇・一(女〇・四)、六歳前半男一・八(女六・七)である。四、精神薄弱児の場合は特に優れた一名(三・三回)を除けば平均回数は〇・一である。

まりつき 一、可能な幼児数は、二回以上連続してつくるもので四歳前半男〇(女八七・五%)、五歳後半男五〇・〇%、六歳前半男女共一〇〇%である。二、つき得ないものは全体を通じて男児二四・五%、女児四・七%、つくことを拒否したものは男児七五・〇%、女児七・〇%あつた。三、一系列につきうる平均回数は四歳前半男〇・一(女一三・三)、五歳前半男〇・八(女三二・五)六歳前半男一三・一(女五七・八)である。四、精神薄弱児の場合は特に優れた一名(六〇・三回)を除けば、平均回数は一・五回である。

結論 一、両者とも性差が著しい。(この条件の研究を進めることが必要) 二、保育内容としてのまりつき、殊に縄とびについては Readiness の問題が厳しく省みられなければならない。

(46) 児童における家族品等と

ロールシャッハ反応

東京都立大学 辻 正 三
東京都立大学 〇三 木 清 子

子供に家族を好き嫌いの順に品等させ、父母を第一、第二位におく者を両親と子供の心理的距離の相対的に近い群と規定し、父母の中何れかを第三位以下におく者を両親と子供の心理的距離の相対的に遠い群と規定し、両親においてロールシャッハテストにおける相違を観察したところ、反応総数が両親と子供の心理的距離が遠いと規定された群の方が、有意味に少かつた。このことは、我々の操作による知能、向性、性的要因の差は両親に認められないので、両親における反応意欲の相違を仮定し説明するより他ない。この推察の妥当か否かは今後実験的に吟味されねばならないが、とにかく少くともここでは、両親と子供との心理的距離が子供のパーソナリティに及ぼす影響について示唆深いものを得たように思える。

被験者は学業成績中等度の小学校五学年の男児各群八名づつ。

使用したロールシャッハ図版及び手続きは早稲田式。

向性検査は 田中寛一 小学生用
山本 稔 新制向性検査 自己評定用。

(47) 就学児の知能の発達と概念

形成に対する一考察

東京学芸大学 湯 本 信 夫

就学児の就学レディネスの都会と田舎の発達上の相違(特に知能的要因の相違)の根本原因を追求する為と現

在問題とされている保育を受けた就学児と受けない就学児との知能の発達の相違の根本原因を追求するため、知能的要因の中で最も重要な概念の発達を都会と田舎、保育を受けたものと受けないものについてどのような相違が見られるかを知能の発達との関連に於いて就学児一九二人について調査した。

調査対象並びに調査法

対象

東京都下新島(本村と若郷村)の就学児 七一人
静岡県下賀茂郡南崎村の保育園児 三四人
東京都世田谷区世田谷保育園児 三二人
東京都世田谷区家庭の就学児 二五人
東京都北多摩郡小金井町保育園児 三〇人

調査法 田中びねー式個別知能検査を実施し、その後、後に学校、山、海、町の各言葉について「学校はどんな所ですか」というように質問しその答を記録した。

結論 (イ)就学児が直接に体験することの出来る対象の概念の発達は一般に良好で、知能の発達の良否に関係しないが、直接体験出来ない対象の概念の発達は不良で、特に知能の発達の悪い者は貧弱である。(ロ)就学児が直接体験出来る対象に対しても出来ない対象に対しても、その概念の抽象化の程度は知能の発達に関係が深い。(ハ)就学児が直接体験することの出来る対象でも出来ない対象でも、その概念の抽象化の程度は保育園で適切な指導によつて豊富に学習したかしないかによつて異なり、学習した方がしない方より概念の抽象化が著しい。

今後の研究方向 この調査では山、海、町の三つの概念の発達につき調査したのであるが今後もこの三つの言葉のように生活環境に密接なものとしていないもの、抽象化の高いもの(抽象語)を選んでそれらが生活環境によつても、或いは又保育によつてどのような発達に異なるかを研究したい。そして都会と田舎、保育を受けたもの

のと受けないものとの概念の発達の相違を究明し、両者の知能の発達の相違の根本原因を追求したい。

(48) 青年の好むメロディーの分析

共立女子大学 玉岡 忍

前三回これに類した発表を行ったが今回はそれらとの比較並に新しい特徴を見出そうとして本調査を行った。被験者(中央大学学生一三四名、共立女子大学学生一五六名)に対し、好きな曲と流行歌各々一つを書くよう命じた。調査時期は六月初旬である。

結果

一、純音楽では運命、未完成、白鳥の湖、別れの曲、乙女の祈り、トロイメライ、月光、トルコマーチ、悲愴が優位で以前と大差なく、一、二年では動かない青年の共通する好きな曲と思われる。

二、作曲家ではベートヴェン、シューベルト、ショパン、チャイコフスキー、シニョラウス、モツァルト、シューマン、バグチユースカ、メンデルスゾーン、バッハの順で愛好され、いつに変わらないがバグチユースカは今度進出し、女子青年愛好の「乙女の祈り」のみで知られている。

三、曲別にみると最高がピアノで、次にシンフォニーオーケストラ、声楽、コンチェルト、ヴァイオリン、オペラ、クワルテット、セロの順である。かりにシンフォニーとオーケストラを同一分類にするとこれが第一位となり、又ピアノ曲でもオーケストラに変曲されたものが多く選ばれている点からもオーケストラによる演奏曲が愛好されるようだ。

四、長調短調の好まれ方に差はなく、いずれを問わず彼らの勇猛心、喜び、人生の悩み、哀愁、悲哀、あこがれ等の心に訴えるようなメロディーが好まれるようである。

る。

五、わずかに男子はベートーヴェン、女子はシューベルトが優位を占めている。

六、舞踊組曲が多くなつたのは最近のバレエの流行によるものと思われる。

七、流行歌については、十分ではないが、(イ)映画の影響……火の接吻。ラ・クンパルシータ。第三の男。パリ祭。ゴンドラの歌等。(ロ)来朝歌手の影響……人の気も知らないで。黒人霊歌等。(ハ)その他ラジオの影響が強く見られる。類型的なメロディーは少くなりロマンティックなものが多くなつて来たようである。

(49) 青年の人生観についての

一考察

静岡大学 石川 透

目的 青年の人生観の形成についてその一般的傾向の手がかりを得ようとする試み。

対象 大学一年の男子六一名、女子一二三名(一八一九歳)及び夜間部男子七一名(二〇・七歳と二四・四歳)

時期 昭和二八年六月

方法 無記名、質問紙法。問題は(1)人生について何かを感じ、または漠然と考えるようになった時期、動機、その内容。(2)真剣に考えるようになった時期、動機、内容。(3)人生観を作りあげるためにつけてきた方法。(4)これからも人生について考えたいか、その理由。(5)、(6)は省略。

結果 問(1)の時期は小学校一年より高校卒業後にまで及ぶが、大体中学校時代が多く、男四五%女五六%で、特に中学三年頃である。動機は男子では社会的問題が一位で、交友関係、自己の問題(特に将来の方針)学校開

係等が略同数ある。女子では自己の問題が一位で家庭関係が第二位、次いで読書、死、交友関係である。感じ或いは漠然と考えた内容に関しては男女共に自己の将来の方針が最も多く、他は様々である。問(2)の時期は小学五年頃より見られ、男女共高校時代特に高校三年が最も多い。動機は男女共自己の問題が第一位、次いで男子では交友、社会、読書。女子では交友、学校、読書。考察内容は自己の生活態度、生活目標、将来の方針等が最も多く、人生の目的、価値に関する客観的普遍的問題がこれに次ぐ。問(3)の方法は他人との話し合い、読書、自分で諸経験を積むという順で男女ともあげている。問(4)に於いては男子は七〇%以上女子は八〇%以上が積極的態度を示している。その理由として有意義な価値ある生活を送りたいという理想主義が男女共第一位にあり、その比率は女子の方が高い。その他の性的差異として男子には社会的、知的理由が多く、女子には結婚、幸福というような個人的必要が多くあげられている。

(50) 青少年の心理の研究 (四)

——自己評価と友人評価の問題——

日本女子大学 児 玉 省
日本女子大学 清 安 津 子

友人関係の構造の研究に当つて先ず予備調査で親友関係にある同性友人二名ずつを小学一、三、五、六年、中学一、三年及び高校二年の各段階で一五組(男女半々)計一〇五組二一〇名を見出し各人に質問紙法及び臨床法による面接調査をした。取上げた角度は(1)友人関係が積極性対消極性、支配対服従などの関係につきいかなる自己評価をするか、(2)親友達は相互の影響力についていかなる意識を持つているか、(3)親友間の愛好と尊敬の関係はどうかの三つであつた。質問は三又は五段階の評価尺

度に編成したものの二二問その他一二問それを更に臨床法によつて補足した。本発表の課題は上の第一の問題である。

親友相互の自己評価の問題は、積極性対消極性、支配対服従、さちようめん対おおまか、忍耐力、敏感さ、卒直性、協調の観点から(1)自分自身及び相手をいかに評価するか。その尺度上の差はどうか、(2)自己評価と他人の自分に対する評価の尺度上の差はどうかの角度から分析しようとした。尺度問題の数は一三、五段階の中央を0、自己を高く評価する場合を+1、+2、逆の場合を-1、-2とした。結果をいうと、(1)の点については男子では0が最大だが、+1即ち自己を友人より積極的、優越、指導的、卒直、敏感と評価するものの方がその逆-1より多い。小一から小六へと自己評価は低下し、再び中三、高二へと上昇しているように見える。女子では0と-1が殆ど同一率を示している。即ち男子に比してより消極的に評価する傾向がある。又発達の差は見られない。(2)の点についてみると、男子は自己評価と他人の自己評価が同等なものが最多であるが、自己評価の方が他人の自分に対する評価より高いものの方がその逆の場合を凌いでいる。女子の場合も同等なものが多く+1と-1が殆ど同率を示していることから、女子の場合には自己評価と友人の自分に対する評価とは平均的には殆ど同等であるといえる。

(51) 青少年心理の研究 (五)

——友人相互間の影響力意識——

日本女子大学 児 玉 省
日本女子大学 中 村 則 子
日本女子大学 田 中 君 枝

青少年心理の研究(四)と同一対象を用いて、親友相互が

いかなる影響を与え又は受けていると意識しているかを検討しようとした。その友人とつきあうようになってから自分がどう変化したか、又友人はどう変化したか、自分がどんな利益を得たかを三又は五段階尺度に編成して質問を行い、又それを補足する臨床法的質問を行った。

第一の問題については、友人から影響を受けたかも知れず受けないかも知れないという中間的な立場が最も多く、その次に影響を受けないというものが多くの%を示した。

第二の問題についても自分が友人に影響を与えたかも知れず与えなかつたかも知れぬという仲間の立場が最大だつたが、同時に自分が影響を与えたというより受けたというものが男女を問わず多かつたことは注目される。又よい影響を受けたとするものが極めて多かつたけれども中には悪い影響を受けたといつているものも少しはあつた。

第三の問題で友人から利益を得ているというものは多かつたが、年齢的には高学年に進むほどその%が上昇している。いかなる点で良い影響を受けて利益になつているかについては、氣質的な面というのが男女通じて極めて高く、次いで勉強や成績に関する事、第三に物の考え方という面になつている。氣質的な面とは明朗、親切、従順、寛大などの項目を含み氣質的に自分も明朗になるとか親切な気持がおきるとかいうものである。これは小学六年頃から著しく増大している。考え方や思想の面については、友人のおかげで物事を深く考えるようになったとか人の良い点を学べるようになったなどで中学一年頃からこの反応が現われ始めている。勉強や成績は小学一年頃から高校二年までかなり多い。われわれの対象は小学一年から高校二年までの同性間の極めて平凡な親友関係であり、ギャングや不良などの

親友関係には勿論適用することはできないものである。

(52) 青少年心理の研究 (六)

友人間の尊敬と愛好の問題

日本女子大学 児 玉 省
日本女子大学 駒田 恵津子

児童の相互友人関係に於いて尊敬と愛好の態度と感情が如何に存在し如何に働き合っているかの問題について、以下の様な臨床的質問法による考察を試みた。即ち仲好しとして選ばれた二人組の友人個々に就いて

① 尊敬及び愛好する友人の名を一〇人位まで順に云わせ友人に対する尊敬及び愛好の順位をとり上げて両者の順位相関を求める。

② 尊敬する面、愛好する面を調査し、児童は尊敬と愛好の何れを以て友人関係を結んでいるのかをみようとした。結果をのべると、

(1) 尊敬、愛好の順位に就いて

一人の児童が相手に対して、尊敬順位第何位と愛好順位第何位の気持を持つて居るかは、尊敬一位と愛好一位の組合せが約二五%で最高を示し、以下の高率順序は尊敬二、三位と愛好一位の一五%、尊敬一位と愛好一位一四・八%という割合で weight は全く愛好の第一位に掛つて居るが、然も見逃せないのは、尊敬一位との組合せである。尚男女性の差、学年の差は余り見られない。

次に相互間に於いて尊敬第何位と第何位とで結び合ひ又愛好第何位と何位で結び合ひているかに就いては、尊敬位では一位と一位の一九%がトップ、一位と二、三位の一六%が二番、愛好位では一位と一位の四五・七%が断然トップ、一位と二、三位が二番で尊敬位のそれ

とよい対照をなしている。以上からこれらの青少年は一般的に言つて尊敬よりも愛好の点で結び合ひているように思える。

(2) 尊敬する面、愛好する面に就いて

自由表現によつて求めた児童の答えを二一項目づつにまとめた。比率の高いものを挙げると尊敬面は①勉強が出来る、②親切、③努力家、愛好面は①親切でやさしい、②気が合う、③明朗、④依頼出来る、の順となつていてこの点から見ても尊敬面と愛好面の相違を汲みとることが出来る。以下の項目は此処に略すが、これらは男女、学年的に多少の差違を示している。

(53) 青少年心理の研究 (七)

青年期に於ける親子間の衝突の問題

日本女子大学 児 玉 省
日本女子大学 鹿股 寿美江

I 研究目的

青少年が親に対して日頃抱いて居る反抗、衝突の原因になるような親の側の行動を見出してその項目種類と、反抗衝突をひき起す程度と年齢的変動の傾向を見ると共に、親の側に於いてこれらの青少年の親に対する反抗に對しての理解的態度を考察し、親子間のずれを見ようとしたものである。

II 研究方法

対象は中学一年、高校一、三年各男女。学校は私立の男子だけ或は女子だけ、公立の男女共学、郡部の男女共学の三種類を選び、大学では公立の女子短大二年及び国立大学の二年(男子のみ)を対象とした。人数は各一〇〇〜一五〇名総数二、五四三名。親の側は全ゆる職業分野に於いて子供を持つて居る四〇乃至五〇歳代のものが多く、父親三二三、母親四二二、総計七四四名である。先

ず青年に對して一〇〇項目の質問を示してこれに各自があてはまる場合、あてはまらない場合、無関心の場合の反応をとり、同様に一〇〇項目を親に示して青年の訴えに對する反応を求め、子供の親に對する反抗指数と親の子供に對する理解指数を次の公式によつて算出した。

(子供の場合) 反抗指数 = $\frac{\text{同意数} - \text{反対数}}{\text{同意数} + \text{反対数}} \times 100$

III 研究結果

① 子供の親に對する反抗指数は子供自身に關する「勉強」「あそび」「日曜日の朝寝」「叱られるのがしやく」等に高く「化粧、服装」「親が子に無関心」等に低い。親の人間の弱さに對する批判はきびしく「親がくだい」「誠意がない」「母がぐちづかい」等の項目は指数が高い。② 同一項目例えば「経済的事業」に於いて「必要な金をしづられるのはいやだ」は高位だが、低い小項目もある。③ 年令的には高一高三が高い指数。④ 男女共学の学生の方がより低位、郡部は都会より低位。反抗度總計の相関は、女子だけの学校で高一・高三が〇・五一九、高三・女子大が〇・三六四、高一・女子大が〇・三五二、男子では中一・高三が〇・六六三で他はいずれも相関が認められなかつた。

(54) 青年心理の研究 (八)

青年期親友の發生的考察

日本女子大学 児 玉 省
日本女子大学 田 上 京子
日本女子大学 増 田 昭子
日本女子大学 鈴木 裕子

この研究は男女約四〇〇名の調査で親友がいかに発生したかを、(1) 友人の発生年齢、(2) 友人の継続年限、(3) 友

情の確立に到る迄の年限、(4)友人の消滅の有無、の観点から考察しようとしたものである。

被調査者に書入用紙を渡して友人を親友、協調友人、及び級知(単に見知り、挨拶する程度)に分けて記憶を辿つて現在迄の発生とその後の経過を図示させた。その結果

(1) 男子は一七歳一八歳に発生している者が最も多く一七歳で一〇・五%、一八歳で九・五%を占め、合せて二〇%を占める。女子は一八歳が最も多く、一七歳で七・三%、一八歳で一・八%で、男子同様合せて約二〇%を占めている。平均発生年齢は女子の方が一年早い。この年齢の頃に青年期の対人関係に於ける一段階がある様である。

(2) 男子は一年から一年以下の継続年限の者が最も高率で一年以内と一年〜二年以内が共に二八%を占め、女子では男子より年限が長く、一年〜二年以内が一九・五%、二年〜三年以内が二二・二%を占めている。平均継続年限はやはり女子の方が一年間長い傾向を示しているが、これはこの調査では男子は大学一、二年、女子は三四年を対象とした為であるかと思われるので、女子の方が長いとは云い切れない。

(3) これは友人関係が発生してそれが単なる友人から親密な友人関係に進む迄の年限である。男女共一年から一年以下が最も多い率で年限が増すに従つてその率がさがる。一年以下で男子三六%女子二七%を占めている。平均年限では女子の方が低い傾向を示しているが、これは女子の方が男子よりも容易に親密な友情関係に入る傾向があるのを暗示するものではないかと思う。

(4) 友情関係の消滅は、男子に於ては総友人数五九七名中八五名で一五%、女子では二二〇名中六一名で二八%を占め、女子の方が男子よりも友人の消滅するものが多い事を示している。

臨床Ⅱ

第一日 第四室 午前部

(55) 思考と知能

お茶の水女子大学 小口 忠彦

思考と知能とのあいだに種々の要因があり、知能が思考過程として現れる際に、それらの要因が種々の効果をあたえているということだけは既に明らか事実であるが、しかし、それらの要因そのものについては余り明らかになつていない現状である。

ここでは、それらの要因の一つとして指摘されるべき「知識過剰」の効果について検討する。この目的のために「知識過剰」を条件的に発生させることにした。

- (1) 断片的になり易い
- (2) りくつっぽくなり易い
- (3) 一貫性がうしなわれ易い
- (4) 被暗示的になり易い

などである。ちなみに、これらの特徴は、ベネディクトが「菊と刀」で指摘した日本人の心理的特徴と殆ど完全に一致している。

なお「知識過剰」という現象は、力動的に把握されるべきであつて、いわゆる Social Survey 式に扱うことに直ちに賛成しがたいことも相当にきりかである。

☆ ☆ ☆ ☆

(56) 課題解決場面による行動観察

横浜少年鑑別所 台 利 夫

I 目的 行動観察は何等かの課題解決の場——特に危機的場面——においておこなわれるのが適当であるがその機会を捉え難い為、何等かの課題を与えてこれを実験的におこなうことが考えられる。その場合その課題によつて日常の社会活動が正しく導き出されなければならぬ。本研究者は課題として「モザイクの構成」をとりあげた。即ちモザイクにより人の行動上の相違が明かにされうるかどうかを検討するのが目的である。

II 方法 研究方法として考えられるものが二つある。

第一方法 或る観点から行動上に顕著な偏りがあると見られる者を、しからざる者と対象させて此のテストにかける。その結果差違が明かにされるならば課題の有効性が明確化されたわけである。

第二方法 課題による結果と、他の観察者が実際の社会的場面で観察した記録とを対象させそれが一致するか否かをしらべる。

III 器具 使用したモザイクは M. Ostankina が中断作業の実験に使用したものと同一である。赤・青・黄に彩られた二八個の切片をつなぎモデルとして与えられた人間の形を作る。

IV 結果

(1) 第一方法による結果……被験者として八六名の非行少年と四〇名の正常少年を選んだがテストをした結果両者の差がかなり明瞭にされた。

(2) 第二方法による結果……これは非行少年についてのみ検討された。統計的には数が少なく意味が薄い、大体一致した傾向が見出された。

V 結論

以上、モザイクは実験的行動観察の材料として或る程度有効なことが明らかになった。

(57) 児童の計算過程について

—二〇以下の繰り下りのある減法—

新潟大学 池上喜八郎

文部省検定済教科書第二学年用「二〇以下の繰り下りのある減法」につきその指導内容が教科書によつて甚だしく異つてゐる。

ここではかかる場合に於ける「減加法」、「減減法」の所謂その優位性問題を五年生児童につき実験した。

刺激条件としてこの課題様式は所謂「運算形式」と「暗算形式」の二種類を用意した。結果は、A1(暗算形式)自然計算態度)は平均一分三九秒、B(運算形式)自然計算態度)は一分五八秒、A3(暗算形式減減法)は二分一九秒、A2(暗算形式減加法)は二分三三秒を要した。依つてこの児童に對しかかる計算様式を採用する時次の結論が得られる。

(一) 暗算形式による計算速度の優位性。これは現在五年次児童にとつては既に機械化されてゐるかかる計算法が、むしろ運算形式より経済的なことを意味してゐると思ふ。

(二) 減加法よりも減減法の有効的なこと。但しこれは一般的に結論するにはまだ不十分である。

(三) 自然的態度の優位性。即ち、一貫してある既定方式に限定された態度よりも固執しない自由なる態度の圧倒的に優つてゐるのは、課題に對する視覚的把握の高度の分節化、即ちより一般化された計算態度の有効性を意味してゐると思はれる。即ち、あらゆる問題に對し一計算方法を固執せしめることはせずに計算態度を一般化する方がよい。「減加法」、「減減法」を単に對象としてではなく一方的方法的手段として問うべきである。

(58) 家庭環境と性格知能に

ついでの一考察

東京教育大学 永沢幸七

家庭環境が自己の知能、性格形成に如何に影響するかを青年と幼児について調べた。幼児は約二五〇名を個別に観察し、予備調査としてその知能指数と家庭の職業、出生順などにより類型をたて如何に相違があるかを見た。青年の場合は、自己の性格と家庭環境という題名のもとに作文をかかせ、色彩象徴性格検査、クレペリンなどの検査を施行し家庭環境を分類して、三人以上の長子、独子、三人以上の兄弟姉妹を有する末子、五人以上の兄弟姉妹を有するものに分類すると、性度、向性の異常などに於て色々な結果がみられ、さらに一五項目の質問を用いて協同性感情、劣等感情、補充作用感情に分類してみた。その結果幼児の場合は、①職業別にみると知識階級に女の子が多い。②家庭の職業と子供の能力とはあまり関係がない。③子供の能力は家庭的な設備の良悪にはあまり関係がない。④一人子より末子の方が優秀である。⑤一人子の場合、(a)知識階級に於てはあまりよくない。(b)肉体労働階級の方がよりよい結果となつてゐる。⑥出生順からみると、次子の場合は女兒の方がよく、男児の場合は長男と次男がよい。

青年の場合は、片親特に母親一人の手で育てられてゐる子供には協同性格が著しく、また家庭の職業による影響をみると、協同性感情は工業、会社員、農業、無職などの順序であり、劣等感情は家庭の職業が公務員の場合約比較的多く補充作用感情は工業、商業、会社員の順になり、また五人の兄弟姉妹を有するもの三人以上の兄

弟姉妹を有する末子、三人以上の兄弟姉妹を有する長子等は異なる結果がみられた。

(59) 性格評価に於ける判断の

一貫性に就いて

慶応大学 九鬼範子

本実験は個人が行う判断の一貫性という面から判断者の Personality の相違による類型がどの様に現れるかをみたのである。即ち或る意見に對する肯定の度合 A と、その反対意見に對する肯定の度合 A' とを、尺度の上に見盛らせる事によつて判断の型を分類した結果は次のとおりであつた。

一、判断は何時でも大体一貫してゐる。 $A + A' = 1$

(便宜上 Consistent judgement と名附けた。)

二、何時でも大体質問に動かされ勝ちである。

$A + A' > 1$ (同様に Over judgement と名附けた。)

三、何時でも大体疑惑的である。 $A + A' < 1$

(Under judgement)

四、意見のはつきりした $A \neq 1$ or $A' \neq 0$ の場合に比し

意見の曖昧 ($A \neq 0.5$) なものに對してのみ、(イ)特に

Over judge の傾向を示すもの、(エ)特に Under judge

の傾向を示すものと仮定した。

五、判断は一貫性を持つてゐるが誤差が大きい。

等の型が可成はつきりと出て来た。

今度は、同じ意見に對して二度繰返して求めた肯定の

度合、 A_1, A_2 、或いは A_1, A_2 の $(A_1 - A_2)$ 、 $(A_1 -$

$A_2)$ 等誤差の大きさが A_1 、或いは A_2 の値の大小に依存す

るのではないかという予想から、誤差分散 σ^2 を A 或いは

A' に對し Plot したところ、① A 或いは A' の値の如何に

拘らず σ^2 の値が殆ど一定となる。②意見のはつきりして

ゐる A or A' $\neq 1$ or 0 の場合に比し、意見の曖昧な A or A'

0.5の附近で u^2 の値が圧倒的に大きくなるという二つの傾向が現われ同じ判断者でも A_1A_2 では①の型を示し乍ら、 A_1A_2 では顕著に②の型を示す場合もある事が発見された。従つて一般に判断に依つて得たデータを分析して検定する場合には①の型を除き人の判断は何等かの交換を施さずには、分析にかけることは出来ない。

本実験の被験者は七名で、その各々によく知っている人を四人思い浮べて貰い、人の性格を評価するのに普通用いられている質問を提示して、四人のそれぞれにつき判断させたのである。

(60) 質問紙法と Non Directive

Interview

明治大学 小熊虎之助
明治大学 ○堀 淑 昭

質問紙法の信頼性、妥当性をしらべる方法として、従来、大量のデータにより相関をしらべる事が行われていた。

我々は逆に、一つ一つの問題に答える際の被検査者の問題の受けとり方、考え方をこまかく分析的にしらべる事にし、その目的のためノンディレクティブな面接の完全な記録と、三回の re-test を総合する方法を採用した。

材料は長島・山崎案「適応性診断テスト」の検査三の一二問題である。被験者は大学生四名、中学生五名。

結果 (一) ①第一回のグループテストの答、②面接の際の被験者の答、③第二回のグループテストの答、④面接記録から実験者が判定した答と、⑤理解度、の五つから見て、信頼しうる答は、中学生で三〇%、大学生で三三%であった。

(二) 面接の際の供述によつて、被験者の各問題に対する解釈の仕方の具体的なデータが得られた。特に「たい

がい」「少し」「何ごと」の如き分量的副詞は見落されやすく、また「親や先生」「本や持物」「助けたりためになる事」の如く二つの言葉を並べても、その一方しか考えない事が判明した。

(三) 更に、問題文を誤解し不適切、不明瞭な考え方をする原因と思われるものを分類してみた。

この実験に採用した方法、特にノンディレクティブインタビューは被験者の自覚を深めながら、彼自身の論理のままの考えを自発性に基いて知り得る点に長所があると思われるが、時間がかかりすぎる事、必ずしも形式的に明瞭な結果が得られず、適当な整理の方法がない所に欠点があると考えられる。

(61) 要求水準検査による

バーソナリティの研究

横浜少年鑑別所 砂 山 延 雄

前回の発表まで「要求水準」を D-score だけでなく行動観察などを含めた総合的見地から九つの型に分けて考へて来た。その結果、異常な型は問題少年・ヒロポン常習少年などに多く、成功しても成功感が無く、失敗しても失敗感が見られなかつた。今回は前述のような異常な型と更にもうひとつの不安定な型について社会的態度を明らかにしたいと思う。

1、被験者 収容少年八四名。

2、実験手続 I、置換作業 成功・失敗を任意に誘導する統制法。II、マッチボード(Iと同じ) III、マッチ・ボード 成功・失敗に関係なく、時間を一定にする自由法。

なお被験者の生活史については家裁の調査資料を参考にした。

3、実験結果

置換作業とマッチ・ボードとの実験の相関は〇・六八であつた。このことについて諸先輩の研究では課題による規定性が強いが、あるいは個人による規定性が強いか—ということ述べているが、わたくしは Personality の問題であると思う。

① 要求水準に課題による変化の少かつた者は、顕著な Personality 特徴が明らかであつた。

② 前述の変化をしばしば生じた者には、一義的に共通性が見出せなかつた。

③ 特に要求の不安定な者は被暗示性および意志薄弱性が強い。また要求の非常に固い者は、剛情・勝気および仁義を好み、町の不良型が多い。要求の非常に高い者は攻撃性・不平不満・虚栄心および無反省である。要求の非常に低い者は劣等感・無気力・内気および退行性が強い。要求の支離滅裂な者はフラストレーション徴候が強く、興奮・衝動および自暴自棄を示した。

④ 要求水準検査の方法としては、自由法より統制法の方がより多く反応の方向を測定できた。特に臨床的にこれは有意義であつた。

(62) ゾンデイ・テストと性格学

(第一報)

三河病院 ○山田悠紀男

三河病院 海野信義

三河病院 高倉兼蔵

ゾンデイの運命分析及び衝動病理学の体系の中に、衝動性格学の構成を見出し得ないので、ゾンデイの構想に基き実験的、臨床的、精神分析学的性格学としての衝動性格学の樹立を意図した。ゾンデイの体系は衝動多元説に基礎を持ち衝動を四ベクターに分け、それらがそれぞれ対立する二ベクターにより構成されるものと認め、

性(愛情、サド・マゾヒズム)、激発(倫理行為、道徳行為)、自我(自我狹窄、自我拡大)、接触(対象獲得、獲得対象)に分類した。

各フアクターはおのおの指抗する二傾向の合成として成り立つ。さらに各傾向は対立する遺伝子にその生物学的起源を見出す。ゾンデイは対立し合成する衝動傾向及び欲求の弁証的發展としての精神現象一般を認め、それに包摂される發展段階の社会化機能面に、性格を定位する。つまり性格は社会化機制を通して具現する個体の衝動運命の *Personna* に他ならない。

我々は性格学の探求にあたり、方法論的に三方向を提案する。

- (1) 運命分析的方向(広義の精神分析的方向)
 - (2) 相関的方向
 - (3) 臨床診断的方向
- がそれである。具体的には(1)はゾンデイ・テストによる個体の衝動布置とその動力学の解明である。(2)は複合的な本テストの操作面に諸指数を求め、因子分析との関連に於て性格類型の基礎を探索する。(3)の重要性は本テストが一切の病態心理学的知見の上に衝動診断法として創出された点から自明である。
- 我々は本研究に於て二三の具体的例をあげて、本題の基本的な方法論上の *Orientation* を与えた。

(63) ロールシャッハ・テストの色彩応答の研究

第二報(正常者の場合)

三河病院 山田悠紀男
三河病院 ○海野信義
三河病院 高倉兼蔵

ロールシャッハは色彩応答を、形態色彩応答(Frb)

色彩形態応答(Fbf)、純粋色彩応答(Fp)に分類したが、この三つのカテゴリー並にこれらと形態応答との区別は實際上困難である。

そこが我々は原図中の五枚の色彩カードを写真複製により無彩色化し、これを原図中の無彩色カードに加え、無彩色シリーズを作成した。この無彩色シリーズによるテスト(Aテスト)と、その後三日以上の間隔において施行した原図によるテスト(Cテスト)に於ける応答内容を比較検討することによつて、個人の色彩に対する反応度を規定しようとした。異常者については第五回臨床心理学会に発表したから、今回は正常人における結果を示す。

原図中の色彩領域と、無彩色化カードに於けるその対応領域とに与えられた応答内容を各領域別に比較して、変化応答と不変応答とを次の如く規定した。即ち①Aテストでは、何等の応答も与えられなかつた領域にCテストで何等かの応答が与えられる場合。②Aテストで与えられていた応答がCテストで別個の応答に変化する場合。③Aテストで与えられていた応答がCテストで消失する場合、以上三つの場合を変化応答とし、これに対して①両テストに於て対応領域に与えられる応答が全く同一であるか、②応答が変化しても等価値の応答内容である場合を不変応答とし、そして全色彩領域に与えられた応答総数に対する変化応答数と不変応答数との百分率を色彩反応度及び形態安定度と名付けた。この両者の比、即ち色彩反応率とロールシャッハの *Affektive Labilität* との関連のもとにこれがパーソナリティ診断に於て如何なる役割を果し得るかを検討した。

☆☆☆☆
☆☆☆☆
☆☆☆☆

(64) 連想診断の基礎的研究

—反応語類型の診断的意味について—

群馬大学 倉石精一
群馬大学 潮田武彦

従来用いられた連想診断法に於ては、特定の刺激語に対する特定の反応語を通じて個人の特殊の経験を推定する仕方、或いは標準化された反応語群よりの逸脱を通じて個人の異常性質を診断する仕方等が行われているが、これを正常人の個性の診断に及ぼすことは甚だ不確実な手段であると考えられる。実験心理学の教多い連想実験のデーターは、反応語一つ一つの生起の条件を一義的に決定し得ないことを示唆しており、又日常経験から言つても、一つの反応語の生起は、その時々々の条件に支配されるのが常識であるからである。そこで個々の反応語を吟味することを止め、刺激語と反応語の関係を類型化し、それを統計的に処理することにより、個人の傾向性を現わす手段を探究しようとした。

我々は予備調査として、よく実験者が知り会っている大学生二〇名について、一、〇〇〇語の反応を行わしめその中所定の一〇〇語についての反応語類型の個人差と個性との関連について、何等かの仮説を求めんと努力した。

語連想は一種の知的作業であるから、知的個人差が予想されたが有意の結果は得られなかつた。種々の反応語類型を、I群(心情、性状、敘述、動作)、II群(共在、所時、要素、因果)、III群(類概念、同義語、反対概念、添加、例示)下位概念、上位概念)に大別し、あらゆる角度から検討してみた。しかしこれら三群の頻数の個人差は個人の傾向とに信頼し得るものであるが(既報告)如何なる意味をもつか今の所見当がつかない。現在まで

に一つの実験的仮説として考えられることは、Ⅱ群の反応語類型の中、例示反応の多いものは反対概念の反応が少く、例示反応の少ないものは反対概念の反応が多く、前者は後者に比して子供っぽい特徴を持つということである。

(65) 神経質の四因子についての

一考察

日本大学 渡辺 徹
日本大学 安藤 公平
日本大学 ○大村 政 男

問題 Thurstone 夫妻の神経質診断票、原名 Personality Schedule) を改訂し、重因子分析法により四箇の因子を抽出した。その結果は日本心理学会第一七回大会において発表した。ここにおいてはその診断票をさらに四〇箇条に縮少し、表現法などをMMPIにならつて改訂し神経質の次元としての四箇の因子の分散に考慮をばらうことにした。これによつて単なる総点だけからの考察よりもさらに多角的な考察が可能になつたのである。しかしそれぞれの因子についての質問箇条が少いため、診断性に乏しいことはおおいにかくせない。これを補うため再びそれぞれの因子ごとに箇条を増補する必要があると思ふ。

処理 男女学生各二五〇名を全資料のなかから抽出した。これらは？反応が一五%以下のものである。統計的結果はおおむね次のとおりである。ただしM→男、F→女、()内は分散。

総点→M 21.60 (9.05), F 23.44 (6.30), 強迫性→M 7.16 (3.48), F 7.82 (2.14), 過敏性→M 10.93 (4.56), F 12.28 (3.96), 内気性→M 6.71 (2.74) F 7.25 (2.52), 妄想性→M 12.90 (4.50), F 12.70

(4.14)

この資料によつて異常偏倚限界を規定した。それは平均値を中心として、約七〇%のものが含まれる領域以外の上限および下限をとつた。実際にこの限界規定が有効であるかどうかは明かでない。ことに正常領域の弁別をもつと細くする必要があるように思う。

考察 いままでかような診断票においては、上限の脱逸だけが考慮されていたが下限の脱逸もまた考慮されなければならぬ。この下限に属するものは——神経質というものが Allport, G. W. のいうようにJ型分散をとるとすれば——また別の標徴を持つグループかも知れない。Landis, C. は分離性のような標徴を挙げ情緒安定ということを避けているようである。

(66) 神経症的傾向の形成

——ケース分析——(Ⅰ)

宮城県中央児童相談所 佐藤 棟 男

児童に認められた神経症的傾向の形成過程を学習理論の立場から考察を試みた。ここでは特に Neal, E. Miller, John Dollard の仮説を参考とし、第一に神経症は学習の所産であり、学習の法則に従うこと。第二に人間学習の全領域を通じて drive, response, cue, reinforcement の四要因が基本的であること。第三に全く言語化されない動因、手掛り反応は当然無意識であり、更に全くの補強は、直前の反応を直接自動的に強めるので補強の根本の結果は常に無意識であること。この様な基本的仮説に基づいて考察を試みる。

(Ⅰ) 問題的行動。入学式を楽みにしていた男の児が母親につきそわれなければ登校出来ない。それが次第に学校のこととなると反抗し口もきかなくなつて、つきそわなくても登校しない様になつた。

(Ⅱ) 考察の試み。子供ぎらいな祖母、叔父、叔母は

児童の年齢相応な動因や反応に罰を加えていたので、その手掛を恐れることを学び不安反応を生ずる様になつた。更に学習が進むと、手掛りのみでなく、動因や反応それ自体にもリアルでない恐れがともなう様になりこの指抗関係から内的情動的葛藤が導かれた。又その様な手掛りから恐れが動因となつて母親の下に逃避する反応を起し動因を解消するようになった。特に母親の家に閉居する精神外傷があつたので破局を予期して不安反応を生じ尚一層母子の感情固着が補強されるに至つた。この様な学習を経ている時の児童は、言語が未発達なのでその葛藤関係を意識することが少なかつた。且、いたいたしい経験に関する記憶、思考、表象を停止すると不安反応をひき出す手掛りは移動し、恐れが動因が解消するので停止反応が強められ、無意識的葛藤の補強と共に、神経症的傾向を学習するに至つたのである。

(67) 精神薄弱児の鑑別と指導

に関する研究

田中教育研究所

田中 寛 一
塩入 円 祐
四方 実 一
三 吉 正 雄
神 原 清
間 宮 武
茂 木 茂 八
田 崎 仁
田 中 英 彦
辰 見 敏 夫
遠 山 正 雄
品川 不二 郎

① 精神薄弱児の施設および 特殊学級の実情調査

田中教育研究所 鈴木 清

この調査は、田中教育研究所の総合研究「精神薄弱児の鑑別と指導に関する実態的研究」の一環として行われたものである。その目的は、わが国における精神薄弱児施設の教育の実態を明らかにすることによつて、それらの運営や方法を反省するとともに、心理学的に説明すべき問題を探求するところにある。

方法は、教育資料の蒐集、実地調査、質問紙法による。質問紙による調査結果の概要を述べたつぎのようである。調査項目は、(1)児童收容の径路、(2)鑑別の方法、(3)收容児童の知能、(4)とつているカリキュラム、(5)とくに工夫している方法、(6)成功した事例、(7)すでに行い、あるいはとりあげている研究、(8)当面している困難、(9)研究に対する希望、(10)その他、である。

はじめ各都道府県教育委員会から、管内の施設および特殊学級の所在、種類等について報告を求め、それに基つて作成されたリストによつて、前記項目を質問し概要つぎのような方向を知ることができた。

鑑別の方法としては、ある程度まで知能、学力、性格などに関する客観テストが用いられているが、極めて不同である。收容児童の知能は、施設児においてはI・Q四〇―六九が五三・五%を占め、特殊学級においては小・中ともI・Q・七〇以上が七五%を占めている。指導の重点は、生活指導を中心とし、施設では職業その他生活の基礎指導が主となり、特殊学級では学力の補充が主となつている。運営上の困難としては、経費の不足、施設の不満、教師の問題、指導方法、家庭や社会の理解不足などが主である。研究に対する希望としては、精神薄弱

の特質とその解明の方法、鑑別の方法、指導法、進路に
関するもの、教具、その他があげられた。

(68) ② 精神薄弱児の知能の特質に ついて

―A式テストとB式テストとの比較―

田中教育研究所 長谷川 貢

資料 東京都小中学生九、二六一名に対して昭和二七年一〇月に施行した新制田中A式知能検査第一形式と新制田中B式知能検査第二形式との結果。

精神薄弱児 A式とB式とも知能偏差値三四以下の成績を表わしたものを精神薄弱児とし、A式またはB式のいずれか一方においてだけ偏差値三四以下を表わしたものを中間児とする。精神薄弱児一五八名。これは全被験者中の一・七%に当る。中間児数三一六名。全被験者中の三・四%に当る。中間児のうちA式において偏差値三四以下のものは七三%、B式において偏差値三四以下のものは二七%である。

下位検査の成績 精神薄弱児はA式およびB式の下位検査のどれにおいても、一般児および中間児より成績であり、知能点が低い。しかし各下位検査がその知能点に寄与する比重から見るとA式においては置換、数字弁別、推理の比重が一般児のそれよりも大きく、B式検査においては迷路、数比較の比重が一般児のそれより大きい。かれらは抽象的、観念的な問題よりも、具体的、直観的な問題において比較的多くの得点をするものようである。

A式型とB式型 精神薄弱児中の五八%はB式においてA式よりも成績よく、四二%のものはA式においてB式よりも成績がよい。

A式型の精神薄弱児はA式検査の文章完成、命令、類推、

推理およびB式検査の積木数、数字比較に比較的長じ、
B式型のものにはB式検査の迷路、図形分割に比較的長じているようである。

(69) ③ 精神薄弱児の学力の特質につ いて

田中教育研究所 清水 利 信

1、目的 精神薄弱児のうち境界線級児童は、普通児と比べて、学力にどのような欠陥があるかを調べる。

2、実験方法 一般の小・中学校で特別に特殊教育を行う特殊学級児童を対象とし、田研の知能検査、標準学力検査(国語、算数)を、普通児と全く同様な実験条件で行つた。

3、結果 (I) 分析の方法 知能偏差値、学力偏差値を算出して比較検討すると共に、検査問題を構成する各小問(Item)の通過率を普通児と精神薄弱児とで算出し、普通児の通過率を規準として各小問について通過率の有意差を検定し、精神薄弱児の劣つているとみられる学力の特質を見出した。

(II) 分析の結果 (1)精神薄弱児は知能、学力ともに普通児より劣るが、特に知能に比して学力は著しく低い。(2)小学校低学年の学科内容では、学年が進むにつれて普通児程度に理解が可能であるが、高学年の内容は、学年が進んでも普通児程の理解はかなり困難である。(3)小学一・二年の国語の学科内容は、文章理解、文章完成、短文作成等の程度が高い問題は劣つていゝ。平仮名、漢字の読み書きの問題は劣る場合もそうでない場合もあり、現在の資料だけでは劣ると云いきれない。全般的には、劣る問題と差があると云えない問題とがある。しかるにこの問題を一年上の学年の精神薄弱児に課すると、文章完成、

短文作成などの問題は劣り、漢字の読み書きは普通児より優れている場合もある。更に上学年になると劣ると云える問題はなく、簡単な読み書きは普通児より優れている。(4)三～四年の国語の学科内容は、すべての問題が普通児より劣り、その中でも文章理解、文章完成、短文作成などの問題は明らかに劣る。しかるにこの問題を上学年の精薄児に課すると、文章理解、文章完成、短文作成等の問題は、問題によつて劣る場合とそうでない場合とがあり、これらの問題が常に劣るとは云い切れない。しかしその他の問題は劣るとも優るとも云えない。(5)小学六年～中学一年の問題については資料が少なく(3)(4)にみられたような関係が未だ見出されていない。

(70) 精神薄弱児の知能検査 (二)

近畿大学 山田久喜

精薄施設の収容児(四九名)に関して、児童相談所より送られた時のIQが、年を経るに従つて、如何に変化するかを調べた。

検査としては、主に鈴木・ビネー法を、他に住田式幼児検査およびIA団体検査中の検査Iを使用した。

比較した資料は、入所前の児童相談所における鑑別結果と、昭和二十七年六月、昭和二十八年六月に私が測定したものである。

相談所におけるテストのIQ平均と、昭和二十八年六月のIQ平均の差は三・〇六、昭和二十七年と昭和二十八年六月との差は四・四八で、いずれも5%の範囲で有意性が認められ、IQが何らかの理由によつて変化する事が考えられる。また、その分布に於いて比較すれば、IQが六〇以下の児童にあつては余り大きい変化はなく、六〇以上特に七〇以上の者が大きい変化を示しているのが認められた。

次に、三つの時期におけるIQの相関係数は〇・七一(入園前と昭和二十七年)〇・七二六(入園前と昭和二十八年)〇・八六三(昭和二十七年と昭和二十八年)と相当に高い相関を示し、相談所の測定が予後において、或る程度価値がある事を物語っている。しかしながら、個人別にみると10以上の者が20%近くあり、相当変化する事も予想される。

入園後の期間の長短が、IQ変化に関係があるかどうか、という事に関しては顕著な傾向が認められなかつた。

(71) 精神遅滞児の Self Help

Dressing についての一考察

愛育研究所 桜井芳郎

精神遅滞児の着衣行動の発達をみるために、遅滞児七名と、対照群に幼稚、保育園児五二名を調査した。

A「ソックスを引っぱつて脱ぐ」、B「コート・上衣を脱ぐ」、C「コート・上着を着る」、D「コート・上衣のボタンを掛ける」、E「結ぶ以外独りで着る」、F「独りで着る」の六項目を調査した。

両者を生活年齢で比較すると、遅滞児は全項目に正常児よりその発達が遅れており、両者の差は項目の難易度に比例して著しい。また正常児群は各項目にその合格率が年齢と共に高まるに對し遅滞児群は不定である。

両者を精神年齢で比較すると、AB項目は僅かに遅滞児の発達が早い。C項目は三歳児では遅滞児の合格率が正常児より大きく上廻るが四歳児では逆である。DEF項目は三歳児まで遅滞児が上廻り四歳児で大体同じ、五歳児で正常児が上廻る。かように正常児、遅滞児間の差が生活年齢と較べ割合に接近している。

他方この精神年齢で比較するに多くの場合両者間に差

が生じ、特にC項目の四歳児、D項目の五歳児、E項目の三・五歳児、F項目の三・五歳児に、いずれも五ないし一〇%の危険率で有意の差がある。また、場合によっては遅滞児が正常児を上廻る。

そこで遅滞児を、家庭の七二名と収容施設の九〇名に分けて調査すると、施設児が着衣習慣の自立という点で遙かに良い。

更に着衣に要する知能は比較的低い段階で可能である。すなわち遅滞施設児と正常家庭児とを精神年齢から比較して前者施設児が後者家庭児より一歳半早く自立し、また、遅滞家庭児と正常家庭児との合格率を比較すると遅滞児が精神年齢の低い段階で正常児を上廻る。

故に遅滞児の着衣自立の遅滞原因は知能よりもむしろ生活環境に存すると云い得よう。

(72) 精神遅滞児における

視知覚の分節度について

東北大学 大脇園子

H. Werner 等は外因性精神遅滞児に知覚障害のある事を、視覚検査、視覚—触覚検査、視覚—運動検査の結果に基いて報告した。これらの検査に表われた知覚障害の根底をなすものは、場面を図柄と素地に分節する機能の障害である。今回は他の知覚検査によつて遅滞児の視知覚の分節度を検出し、それを対応する知能年齢の常態児から得た結果と比較して、遅滞児の知覚障害を見出すとした。

本実験では視知覚の図柄と素地への分節度を、図形再認に對する枠組の影響の程度によつて測定した。すなわち矩形の枠のある標準図形の大きさを数個の図形の中から再認する時、再認図形に標準図形と同じく枠がある場合と枠が取除かれた時との再認誤差の量、方向、再認時

間を比較して、もしこれらに差があれば標準図形が図柄と素地に分節していたと考えられる。

実験手続 図形は大小の六角形、円、リンゴ形、家形の五種を用いた。標準図形は8cm×10cmの枠の中央に描いた。再認図形は同じ大きさの枠の中に描いたものと枠のないものと二種がある。一度に呈示される再認図形は、標準図形より大きい三個と小さい三個、計六個である。誤差量は標準図形との大きさの差の少い順に一、二、三と計算した。これらは観察者の前方50cmの所の衝立に呈示した。観察者は宮城県立精神薄弱児收容所の精神遅滞児から、選択行動が正常に行えるもの一九名を選んだ。結果の整理に際してこれを第一群（知能年齢四歳台）と第二群（同六、七、八歳台）に分けた。

実験結果 第一群では枠組あり、なし両条件間に誤差量総計、過大・過小の誤差、再認の方向、再認時間に変化がない。差がない点では前に行つた常態児の四歳群と同じであるが、常態児の場合は五、六、七歳と次第に分化する前の段階として理解できたのに対し、遅滞児のそれは異つてゐる。第二群では誤差量全体にも、方向別にした時にも差が現われたが、正常児の六、七歳児の如き規則性がない。再認時間の両条件間の差は測定した三図形の全てに現われたが、その中の一は枠がない時却つて減少している。また常態児にあつた幾何図形と有意味図形との違いも遅滞児には見られない。

職業指導 I

第一日 第五室 午前の部

(73) 作業性格検査 (三)

— 完成作業性格検査について —

東京都職業適性相談所 板倉善高

目的 従来紙筆による作業性格検査は、作業内容が加算や文字が出来又書けなければ使用出来ない問題が多かつた。しかし労働市場の中にはかような能力がなくても出来る職務が多数あり、この人々に対する検査は従来のものでは不可能であつた。ここに考え出されたものが本検査である。

問題 色々の問題が作り得るのであるが、描線と打線を均等に配して各作業の難度を等しくし、視覚的機能と筆記さえ出来れば職種、年齢をとわず容易に作業できるものとして、梅の花弁とおしべ、めしべを各々一カ所を欠いたものを一行一〇〇個並べたものを三五行縦に配列したものである。

作業のやり方 梅の花のかけた所を右の行の上から下へと間違ひなく早く満足して行く。

検査の方法 三〇秒毎に四回練習し、約二分の後本検査第二行より一分毎に行を左へ改めつつ、一五分間連続し五分間休憩の後再び一五分間連続する。

実験 実験Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳと行い、Ⅰは年齢別に結果を研究する。Ⅱは都下六校中三男女一〇〇〇名の曲線型の出現率を調べる。Ⅲ、学年別出現率、Ⅳは完成加算作業の曲線型の一致度をみる。

結果の考察 実験Ⅰ、作業量は資料乏しく明確に言えない。実験Ⅱ、各曲線型の出現度は休憩後正常となるもの

の約半数に達する。実験Ⅲ、中には休憩前上昇型が多いが、中三になると正常型が目立つて増している。実験Ⅳ、完成作業と加算作業を約一カ月の間隔で実施した時の曲線型の一致度は、各型頻数に著しい相違がないわけではない。

(74) 運動適性検査の一試み

東京教育大学 松田岩男
人事院事務局 松井資夫
人事院事務局 小佐治朝生
人事院事務局 安藤寛
人事院事務局 羽場究

I 検査の構成

日本体育学会作成の運動適性検査実施要領のなかから次の検査をえらび運動適性検査を構成した。

- 一、息こらえ
- 二、腕屈伸
- 三、上体そらし
- 四、折返走
- 五、垂直跳
- 六、上体起し

II 被験者

身体力的な要素を必要とするある官職への受験者約九〇〇名（満一八歳〜満三五歳の男子）

III 結果

各検査の平均及び標準偏差は次の通りである。

- 一、息こらえ 三〇・七二秒 (一四・九八)
- 二、腕屈伸 二五・二四回 (六・一四)
- 三、上体そらし 五二・〇六種 (六・二〇)
- 四、折返走 二二・八九秒 (一・〇七)
- 五、垂直跳 四七・二三種 (五・五四)
- 六、上体起し 三四・三四回 (七・八五)

なお各検査間の相関は殆んどなく、息こらえと胸囲、腕屈伸と体重、上体そらしと身長との相関も殆んどなかつた。

IV 今後の問題

- 一、信頼性、妥当性の問題
- 二、標準化の問題

(75) 運動能の発達と同検査法の標準化

労働科学研究所 狩野 広之

運動能というものが何であるかについてはまだ充分な概念規定をもつといえない。従来運動の速度、確度、調節等の検査と称せられるものが、果して何であるかについても疑問がある。このような抽象的な所謂「運動能」を測定することは次の問題としてまず運動形態をそなえた人間行動が幼時からどんな発達をするかを見ようとした。そのため、なるべく児童が日常行なう具体的な運動動作をいくつか各年齢に配当して、一列の運動能発達検査を標準化することにした。原案はオゼレッキーのものに、私自身の考案になる課題をいくつか加えた。テスト形式は全くビネーの知能測定法の形をとっている。尺度は点数式で、各得点に対して運動能発達年齢が与えられ、これと生活年齢との関係から運動能指数を出すことにしている。

年齢四歳から一二歳までの課題数は全部で六七種あり一課題合格は概ね一点を与える。各課題は種々雑多であるが、大体次の四つの群に分けられる。

- A (平衡運動) 身体の平衡機能の発達を見る。
- B (全身運動) 全身の運動共応動作を見る。
- C (手指運動) 手指運動の発達を見る。
- D (模倣、分離運動) 実験者の動作を模倣し、左右、又は上肢と下肢とが別々の運動をするような運動動作の分節度を見る。

標準化の作業は昭和二十一年より開始し、昨二十七年でひ

と先ず三、一〇七名の男女児童、其他学生、労働者等の測定を終了し、一応の標準化の成案を得た。

(76) 事務用機器操作職の適性について

人事院 松浦 健児

事務用機器操作職に対する採用試験計画のうち、I・B・Mマシンオペレーターに関する採用方法を研究するため次の諸検査や方法を使用した。(A)知能検査、(B)適性検査、(C)興味調査、(D)クレペリン作業検査、(E)タッピング、(F)要求水準検査、(G)向性検査、(H)満足度検査、(I)仲間相互評定、(J)ソシオメトリー、(K) Work-sample Test (L) 監督者の評定、(M)勤務評定、以上のうち特に(B)適性検査を中心として述べる。

I、職務分析——I・B・Mマシンオペレーターに関する職務分析は、いまだ系統だつた方法が定められていないが、職務構成要素を明らかにするため職務記述書、職級明細書を参考にし、M会社における実地観察や監督者との面談などによつて職務内容の分析を実施した。

カードをせん孔する繰返し作業を仕事の手順に従つて分析した結果、一、両手の同時的操作、二、手、指先の器用さ、三、目と手の共応、四、数字の記憶、五、タッピング、六、視覚の鋭さなどが必要な特性としてあげられるが、作業には正確さ、注意力、速度が考慮されなければならない。

II、検査の構成及び実施——職務分析の結果と、I. Minnesota Vocational Test 2. Differential Aptitude Test などの Test を参考とし、次の六つのサブテストから適性検査を構成した。

- 1、比較
- 2、速度
- 3、照合
- 4、置換
- 5、探索
- 6、語彙

これら検査の妥当性を検討するため、二八年六月に女子高校三年生 (N=195) 及び Key Punch Operator (N=9) に Pre-test を実施した。この結果は整理中であるが、今後は適性検査の標準化の問題、現在整理中の諸検査との関係を明らかにすると共に、試用試験における課題の一つであるグループの Morale 高揚を阻止する Factor をいかにして除去するかということが問題として残されている。

(77) 採用試験時における自己評定

人事院事務総局 松井 資夫
人事院事務総局 羽 場 究

I 問題

採用試験時における質問紙法に対する受験者の解答は正直に近いものと考えられるか、それとも自分に有利になるように著しく欺瞞されたものであるか。

II 被検者

ある官職への受験者約六〇〇名(満一八歳—二四歳の新制高校卒業程度以上の学力を有し第一次試験に合格したもの)

III 方法

A、B、C三方法で価値的判断も可能な二五項目について三回ずつ行つた。

A法 無記名で正直に解答させる。

B法 記名で正直に解答させる。

C法 無記名で自分に有利になるように解答させる。

被検者約六〇〇名から一〇〇名を抽出し次の方法により結果を整理した。B法とC法による答案を被検者ごとに照合し両法による解答が一致していない項目数を数え五〇名についてその平均値を求める。同様にしてA法とB法による解答の不一致数の平均値を求め両平均値の差を

検討する。

IV 結果

一、B法とC法とは一致度が低い。
二、A法とB法とは一致度が高い。
すなわち、採用試験時における自己評定は自分に有利になるように著しく欺瞞されていたとは考えられない。

(78)

職業的意識の発達に関する 測定規準化の一試み

静岡大学 北 脇 雅 男

目的 学校職業指導の効果の測定が、該運動の歴史四〇余年を経た今日なお試みられておらないことは問題の困難さもさることながら甚だ残念である。職業指導の効果は児童生徒が将来への職業生活に適応し得る素地となる職業意識の発達をみるにより確かめることができると考えている。或いはこの職業意識を Super. D. E. のいう職業的適応性といつてもよい。しかし職業意識の構造はとかく簡単なものでなく複雑にして動的であるからこれを把握することは仲々容易ではない。ここでは職業意識を一、一般知能、二、自己分析、三、職業情報、四、職業態度の四つの位相から知ることに努めた。

方法 これら多面的な四標識を一つのテスト体系で測定するために、テスト一(一般知能)、テスト二(自己分析)、テスト三(職業情報)、テスト四(職業態度)、をサブテストとするA式団体の「職業的適応性検査用紙」を作成して実施した。

被検者は附属中学一年男二一、女二七、計四八名、二年男三一、女一九、計五〇名、三年男二四、女二六、計五〇名、計男七六、女七二、合計一四八名である。

各サブテストの正答数を一点として計算して粗点を求めた。それによるとテスト二、三、四は学年を追って僅

かではあるが増加している。テスト一は知的作業であるが、三年が二年より低い。ただこれについては明瞭な原因がつきとめられていないが、たゞ三年生は選抜試験を経ないで入学したものであることが学校側から報告されている。男女については僅かながら、各テストともその差がある。

次に各テストの成績及び粗点合計点と田中B式の知能検査の知能点との相関をみたところ、テスト一は〇・三九八であるが、その他のテストは著しく低く合計点とは〇・三四〇であった。

(79) Factor Analysis による

知能因子推定について

慶応義塾大学 宇 野 善 康

Factor Analysis によつて identify される知能因子は、個人の知能を I・Q の如く I だけの index によつて評価するのではなく、潜在的な一見しては知り得ない諸能力の各各を量的に示す根拠を持つてゐるが、今迄の知能因子探索の方向は、その大部分が知能テストの触れ得る限りの知能発現の諸領域に限られてゐると云える。知能の諸様相を見渡すと、未開拓の広大な領域がある。

そこでこの実験では、学問的世界と社会的方面での知能因子とを推定する為に、所謂「頭のよさ」の發揮された行動を色々な人に評価して貰い、その得点の相関係数を factoring にかける方法で実施した。ここでは因子探索の領域を一八箇の命題の及ぶ範囲に求め、評価者の階層を新制大学教養学部(の学生、一五五名に限定して、その範囲内でひっかかってくる因子を弾き出すのを目的とした。命題の評価の場合には、一八箇の命題とこれを inverse の形にしたものを用いて、判断の動揺の多い score と評価の仕方に一定傾向のある score は除外出来る

ように工夫した。そのために各命題の相関はそれだけ低く目的に副わぬ不純因子は既にここで除かれた。又学生に縁遠い命題の評価判断は動揺の多いことが知られた。

Factoring については、サーストンの Complete Centroid Method を用い、Oblique simple structure に導いて因子の解釈を行つた。そして人々が知能と考えている aspect の中の四つの面が因子として見出された。即ち、一、対人的行動因子、二、学問的思考因子、三、知的努力因子、四、スマート因子。

そこで次の結論が生ずる。個人の知能の十分な姿を捉えるには、今までの知能テストのみによるものでは不十分であつて、今後の研究には以上の如き方向にも綿密な探索を進めるべきである事を以上の結果は我々に示している。

(80) 知能の変動に関する統計的

考察

労働科学研究所 大須賀哲夫

知能指数(I・Q)の変動性に関して、I・Qの分布構造と、再テストによるI・Qの変動量に関する分布との面より考察した。

一、I・Qの分布はその性質上、正規分布に近づくことが好ましい。従つて従来I・Q分布の正規性が問題とされて来たが、代表的知能テストである鈴木・ビネー式、田中・びねー式についても統計的には正規分布とは認めがたい。

二、ではI・Qの分布構造如何? ここで分布の中心からの偏差によつて正負の方向別に分布を検定すると、何れも非均等分布となり、二つの母集団の複合が考えられる。

三、特殊なサンプルに限定して見ると、貧困児童群の

I・Q分布は正方向で、偶然分布をとり、負方向で偏差分布に近づく傾向があり、資質・環境ともに恵まれた児童群では逆の傾向がみられる。これはI・Qが一定方向に偏差を示す個人が含まれているためと考えられる。

四、では同一個人のI・Qはそのような変動を許すだろうか。一年間隔の再テストによるI・Qの変動量の分布は偶然分布に従い、ある意味でI・Qの恒常性を支持しているが、再テストの期間が長くなると偶然分布は棄却される。従ってI・Qのいわゆる恒常性も長期間のうちにはI・Qの増減、増減を期待しうる程度の変動を許すものと考えられる。

五、とすればある集団のI・Q分布の構造が一定方向への偏差を示すということは、資質と環境との諸条件のなかで個人のI・Qが変動し増減あるいは減減するといふ事実を示唆するものでアイオワ大学における実験研究(スキールス他)と相通するものがある。従ってI・Qの分布構造から、集団の知能に関する特性を推測することもまた可能であろうと思う。

(81) ウェクスラー改訂法とロール

シャツハテストにおける共通

Factors の分析

名古屋大学 村上英治
名古屋大学 星野命

テストの理論的根拠の妥当性に関連して、ウェクスラーテスト改訂版とロールシャツハテストとが夫々共通の理論的根拠をもつことに着目し、そのFactors間の相関を検討してみた。

被験者は名古屋大学医学部附属病院精神科入院患者三五名であり、実験的操作は年齢段階、知能の程度、疾病の種類によつて区分されることなく、包括的に分析

された。

ウェクスラー改訂版の各サブテストのスコアとロールシャツハ・プロトコールとの間に予期された三三個の仮説が立てられ、相関分析によつて検証された。

初めの予測とくらべて結果は決して満足しうるものとはいえないが、第一にこれらのFactors間の共通な理論的根拠は identical なものというより similar なものであつて、そのためには得られた相関係数は有意水準をこえて、理解可能な程の低さをもつものであることが要求されること。第二に、この実験の被験者の力動的な心理過程を同一人ならばかわりがないとみたのであるが、実際精神病患者においては、この事態の違いによる条件が必ずしも同一でないこと。第三にプロトコールによつては診断的意義をあまり強くもたないものがあつて、それらの相関が低く出たことなどの諸点から再反省してみると、なお今後の検討を必要とするように思われる。

(82) 記憶力と一般知能に関する

一考察

東京教育大学 青木孝頼

目的 一般知能検査の各問の成績に及ぼす記憶力の度合いを検出する方法を見出し、知能の分析的研究に役立たせることを目的とする。これは予備実験の結果である。

方法 中学三年生七七名の一般知能検査成績(二八年

度山梨県高校進学検査)と記憶力検査成績(AS式団体記憶力検査)とを資料として、一、記憶得点と知能検査各問得点との相関によつて、二、知能検査の因子分析の結果によつて、三、記憶と知能との相関図表により四グループを作り、グループごとの成績比較によつて夫々記憶と一般知能との関係をみた。一般知能検査の問題構成

は次の如くである。

S₁—空間関係 S₂—命題分類 S₃—採酒
S₄—文章理解 S₅—図式読取 S₆—語彙
S₇—命令検査 S₈—数分比較

結果 記憶得点と各知能検査問題得点との相関係数によつて得た結果はS₆が最も記憶力の影響が大であり、S₄S₅が最も少ないと考えられ、その他は同程度となつた。

因子分析の結果は、第二因子が記憶力と推定されるがその負荷量はS₆S₅S₄S₃S₂の順となり、S₆S₅S₄S₃の大きなことが、その推定に疑問を抱かせる。

次に、相関図表によつて、一般知能得点(S_T)と記憶得点(M_T)とが共に高い群(G群)、共に低い群(P群)、S_Tが高くM_Tが低い群(S群)、S_Tが低く、M_Tが高い群(M群)の四群に分けて、群ごとの比較を行ない、各知能検査問題ごとに、G—Pに対するG—S、M—P、S—Mの百分率を求めて得た結果においてはS₆(採酒)とS₅(線分比較)とが記憶力の影響を最も多く受け、S₄(文章理解)と、S₆(語彙)とが記憶力の影響を最も受けていないことが明らかにされた。

(83) 作業能の数理解析的研究

北海道学芸大学 坂東義教

本研究は作業能の履歴効果の定性的研究及び作業能の週期性に関する研究の二つの部分より成つてゐる。

実験方法は、被験者(中学高校生)に、クレペリン式数字配列による行数一五〇、列数三〇の作業用紙を与え、連続比較作業(数列間を代数の不等号で結合していかく)或は、加算作業を各行一〇秒毎に区切つてなさいめ、かく作業を行なわしめて得られた作業能数列を原数列とよぶ。

実験結果を考察して次の結論を得た。(1)上述の連続比較作業により得られた原数列に顕著な履歴効果がみられる。連続加算作業においても同様に定性的に見られた。(2)連続比較作業と連続加算作業では、比較すると後者よりも前者において、履歴効果は著しい。(3)性格の異常者においては、履歴効果は全く認められない。

週期性に関する結論としては、(1)上述の如くして得られた連続比較作業の原数列は、偶然的な週期性と一致して現われる。(2)移動平均法によつて原数列を大まかな動揺性に替えて考察してみると約二〇〇秒位の波長で動揺がみられる。(3)しかし練習段階の発達するにつれて、動揺の週期は長くなり振幅も大きくなる傾向がみられる。(4)原数列を平均平滑法によつて平滑化すれば動揺が顕著になるが、第一の動揺の谷は作業開始後五〇秒から一〇〇秒において現われる。併し、検定によれば有意な減衰は認められない。(5)一五〇〇秒の連続比較作業の中、四〇〇秒か五〇〇秒の辺が最も減衰を来たすが、検定によれば有意の減衰が五%以下の危険率でみられた。(6)この減衰の傾向はクレペリン作業の平均曲線のうち最も減衰の見られる六行目附近と大体一致している。知能の低いもの及び性格が異常な傾向にあるものは、連続比較作業の曲線の振幅が、正常なものに比べて大きい。

学 習

第一日 第五室 午後の部

(84) 学習材料の量と学習時間との関係

金沢大学 薄 田 司

学習材料の量と学習時間との関係については、既に学

習時間は学習材料の量の二乗に比例するという Foucault の法則があるが、これは妥当性が少ないことが明らかになっている。これに対し私は、学習材料の量が二倍になれば学習時間は三倍になる—視的提示の場合—関係があることを指摘したが、ここに報告するのは、この関係について更に詳しく検討した結果である。(1)先ず学習材料の量(L)が二倍になれば学習時間(T)が三倍になるという関係を式であらわせば

$$t = kL^{\lambda} \quad (\text{但し } k = \text{定数}, \lambda = \frac{\log t}{\log L} = 1.58)$$

となる。これを石原の数字記憶の結果に適用すれば、 $k=0.082$ が得られるので、次に1とkの値からtの値を計算してそれから実際のtの脱逸度を求めれば、極めて小さいことが解る。このことは Schultze により研究された Ruckle の数字記憶(分習法と全習法の二つの場合)にも明らかである。(1)しかし前述のkの値は、練習の程度に依存することが Ruckle の場合に見られる。即ち G. E. Müller によつて研究された場合(一九〇六)には $k=0.153$ 、その後の一九一二年には $k=0.11$ で、前述の $k=0.082$ は一九一四年の結果である。しかし、kの値が練習の程度によつて異なるにしても、 $t = kL^{1.58}$ の公式は成立する。(3)kの値が記憶材料の質によつても異なることは、石原に於て認められる。即ち、姓名系列の場合、 $k=1.04$ 無意味字系列の場合は $k=0.95$ である。しかし $t = kL^{1.58}$ はそのまま妥当する。

以上の結果から、tは1と練習の程度及び学習材料の質の函数であることが明らかであるが、同時に、 $t = kL^{1.58}$ が基本的法則として成立することを認めなければならぬ。私はこれを Foucault の法則に代えて、薄田の法則として主張するものである。

尚、この結果が単に異常記憶者に於てのみ成り立つと見るべきでなく、異常記憶者に於てのみ見出される純粋な関係と見做すべきことを附加しておきたい。

(85) 学習行動の実験的研究

(第四報告)

大阪学芸大学 岸 本 未 彦
大阪学芸大学 今 井 欣 悦
大阪学芸大学 ○中 西 重 美

困惑箱に於ける猫の行動の Stereotype は、刺戟としての pole の位置が変化せよ、その Situation に応じて適当なる反応形態を示すことを認めたのである(第二報告)。本研究は第二報告と同様な装置、及び手続で実験実施し、刺戟を呈示してから刺戟として pole に接触するまでの行動形態が Conditioning の移行によつて、どのように変容するかを考察すると共に、あわせて、刺戟としての pole に接触してから Food-Box に至るまでの時間をも考察せんとするものである。その結果

- 一、Conditioning の移行にもない。猫の行動形態は安定化(一定化)される。
- 二、行動形態は試行七〇回—八五回で安定化する。
- 三、行動が安定化されると共に、Food に対する誘意性が無くなる。
- 四、行動形態と時間(pole に接触後、Food-Box に到る時間)には系統的な関連がないように思われる。

(86) 再生における欲求の影響について

名古屋大学 蛭 川 栄

記憶保持それにとまらざる再生と欲求の強さの度合についての観点からして、記憶過程の先行条件として、一八の項目を与え夫々について主観的な欲求の強さの度合を

三段階に評価せしめた。その場合、そこに示された項目を意図的に被験者が記録することをコントロールする様に心掛け、被験者は欲求の評価自体に専念した。

一日後、五日後、三カ月後に夫々被験者のグループを異にして先に評価させた項目中現在記憶保持されているものを再生せしめたところ、一八項目を通じての主観的評価の三段階、三・二・一の夫々についての頻数と再生された頻数の合計との百分率を求めた処、一日後、五日後、三カ月後と時間的経過につれて再生率は減少するけれども、一日後、五日後、三カ月後のいずれに於ても三と評価したものの再生率が一番高く、二、一と次第に減少して行くのがみられ、欲求の度合の強いものがより多く再生されることを示した。

次に一八の各項目を通じて主観的欲求評価の三、二、一を通じての再生された頻数のトータルと三、二、一の夫々の再生頻数との百分率を求めてみると欲求度合の強いと思われる三に於て一日後、五日後、三カ月後と次第に増加し、二に於ては次第に減少して行き、時間的経過にともなつて欲求度合の強いものの率が顕著になつて来ることが示された。

更に厳密な検討を要する点はあるけれども、以上の様な結果を得て、記憶再生に於ける欲求の及ぼす影響について吟味してみた。

(87) 時間制限が正確度に及ぼす

影響の一研究

京都学芸大学 四方実一

一、研究目的

テストには時間制限のある場合と、制限のない場合とがある。何れの場合も正答数が結果を測定する単位となつてゐる。然し評価の目的によつては単なる正答数のみ

ならず、正確度(試答数に対する正答数)が問題となる場合がある。この正確度が時間制限の有無で変化することがあるとすれば、時間制限テストは真に正確度を測定し得ないことになる。本研究は算数計算問題における時間制限テストの正確度に及ぼす影響を見ようとしたものである。

二、研究方法

(1) 問題 本研究は第一、第二テストからなり、第二テストには時間制限がある。問題は加、減、乗、除の四種からなり、第一テスト、第二テストは同程度の問題である。即ち小学校三、四年の加法は $\frac{26}{157}$ 減法 $\frac{52}{34}$ 小五、六年、中一、二、三年は加法 $\frac{68}{157}$ 減法 $\frac{172}{96}$ 乗法 $\frac{74}{3}$ 除法 $\frac{4345}{1}$ の程度で、第一テストは各一〇題、第二テストは各二〇題である。

(2) 実施方法 第一テストは十分な時間を与え、第二テストは一分四分の間の制限をおく。第一テスト終了後直ちに第二テストを実施する。被験者は小学校、二校各学年約七〇名、中学校二校、各学年約一二〇名である調査は昭和二八年五月上旬である。

三、結果

結果は正確指数 $(Pa = \frac{\text{正答数}}{\text{試答数}} \times 100)$ を両テストについて算出。その差を求めた表は省略する。この結果

- (1) 時間制限テストは一般的に正確度を減じる。
- (2) 両テストに差が認められない場合は第一テストの正確度が低い場合である。
- (3) 時間制限テストは高学年ほど正確度を減じることが認められた。

(88) Motivation の一研究

白ネズミの迷路学習に

及ぼす群構成の影響について

愛知学芸大学 市川典義

一、本研究の目的は白ネズミの集団の内部的力による学習効果の研究であり集団構造と学習との関係を明らかにしようとするものである。ネズミを対照群と実験群とに分け前者には単独学習、後者には集団学習を行わせ、集団の大きさとそれを構成する条件群とを質的に変化し、それらの何れが学習効果に影響するかを調べた。

二、装置はT字型迷路を用い、群の大きさは一匹(対照群I)二、三、四匹(実験群)の四種であり、各群中の一匹を被験ネズミとし、これらは飽食状態にする。1、条件群が飢及び渴衝動として動機づけられている場合(II)。

2、条件群が飽食状態におかれている場合(III)。この結果、1、反応潜時は(III)群が最も長く、次に(I)群であり、(II)群は短い。何れも開始後三(四)日目最大であった。2、所要時間、誤数共反応潜時とほぼ同様な関係が見出されるが、誤数は(II)群は次第に減少するのに比して(I)、(III)群では増加している。この結果より、条件群が空腹の場合には、誘因を有しないネズミに於ても学習効果は著しく高められる事が明らかである。故に此の効果は一応集団構造に帰因するものと考えられる。

三、次に実験Iに於ける学習効果を調べるために同一の被験ネズミをすべて飢、渴動因により、五回連続、単独で走行させた。その結果、一、反応潜時は(I)群が著しく長く(II)、(III)群は極めて短い。両者間には顕著な差がある。二、所要時間、走行時間、誤数共一と同一関係にあり何れも初回と終回では急に減少している。これらの結果は、単独学習による訓練づけより、集団の場合の

方が後の学習に於て有利であることを示す。三、更に集團構成要素の点についての結果を見ると、条件群が動因を有する時、所要時間、誤数は三匹の群が最も成績が良く、この群が飽食状態にあると逆の関係が成立する。四、以上の諸結果から集團の構成が学習の完成に促進的或は抑制的作用を持つ事、及び集團がある一定の大きさの行動単位をもつ時その効果が最大に發揮されることは一応明らかである。

(89) 白ネズミの frustration の

経験と迷路学習との関係

福島大学 工藤 正悟

目的 (1)、未成熟の白ネズミに frustration 場面を経験させ、成熟後の迷路学習に如何なる影響を与えるかをみる。(2)、frustration の痕跡が学習経験によつて如何なる影響をうけるかを検べる。材料 生後一〜二月のもの、 ϕ 一五、 ϕ 一三、出発箱と餌箱とを長さ五〇厘米幅八厘米の廊下でつなぎ、中間に長さ二〇厘米の grid を置く。shock は D.C. 50〜1,200V。迷路は高架式 T 型を五箇用いた。方法 (a) 二〇〜二四時間の hunger drive をかけ実験箱に入れる。non-shock の場合に餌箱に入つたら三分間与餌。shock の場合は餌箱のガラス戸を閉め D.C. 600V を grid に通す。一日一回四試行。一日おきに五日間行う。GI (5.5, 9.5) 一回四試行中 1 shock。GII (5.4, 9.4) 一回四試行中 3 shock。GIII (5.4, 9.6) 一回四試行 non-shock。b) 二ヶ月飼育した後 (a) の non-shock の場合と同じ手続で一試行。餌箱迄の時間により、(a) の痕跡を測定。(c) (b) の直後より迷路学習を行う。drive は一日定量の半の餌量による hunger drive を一日三試行。(d) 学習後、(b) と同様手続で (a) の結果を検討する。

結果 (a) shock group の frustration の事實は回を重ねるにつれて増加。(b) 目標に到達するまでの時間は各 group の条件で差がある。(c) 一日毎の一試行当り誤数の A.V. については三日間は各 group 間に若干の差を認める。これは S. Rosenzweig の frustration tolerance の概念で説明されると思う。(a) 餌箱迄の所要時間の A.V. は各 group 間に差はない。学習前の所要時間を個々のネズミにつき比較すると一般に時間の短縮が見られた。

結論 (1) 未成熟時の frustration 経験は、迷路学習の初めに影響を及ぼす。学習の成績は frustration の経験の最も多かつたものが最も悪く、未経験の場合がこれに次ぎ、時折経験したものが一番良い。(2) 十分な動機づけと、成功に近い学習経験は frustration の痕跡を消失せしめる。

(90) ある失語症患者の抽象過程について
信州大学 中川 大倫

患者 N は六四歳、元小学校長。昭和二六年一〇月発病、信大病院入院。主因は脳軟化症。呼称、計算、記憶著しく低下。書字の判読困難。二週後退院。昭和二七年一月筆者初対面。簡単な会話可能。幼児絵本の文字は読むが書字と呼称とが違ふ時がある。二八年五月再面接。会話良好。記憶相当に回復。意味の短文が作れる。実験第一回二七年三月の図形の関係の抽象に関するもの。課題は \bigcirc Δ \square 並びに点の相互関係を中心にして九項目三系列及び系列完成テスト四項目。第一系列は刺激と同一カードを揃える。第二系列は同一図形にして関係の異つた場合。第三系列はゆがんだ形の場合。刺激カードを指しながら同じと思うカードを枠の凸部に入れさせる。結果は同一図形の同一関係構造の場合には選択可能。図形の関

係が異り、形が変ると選択困難。二八年五月第二実験の結果は同様な傾向。幼児の場合には空間知覚が十分分化していないが、全体構造を認知して選択している。第二・三系列でも構造が簡単であれば解決をし、複雑になると選択が困難になる。八歳四カ月の児童で関係の抽象化が見られた。大学生では円滑な操作、抽象化の傾向がよく見られた。第二回の実験には色と形の抽象問題を扱う。方法は前大会に報告したものをを用う。N は途中迄色に反応し、のち形に反応した。分節化反応は困難で固執傾向が見られた。N の脳組織に関する所見は精密にはわからない。しかし強固な計算障害や仮名の脱落或は系列完成の不能は記号の意味付の障害によるのではないだろうか。N の抽象過程障害の点では Goldstein, Head や Wierkom の場合に該当するようと思われる。

(91) 幼児の記憶に就て (第二報告)

静岡大学 田中 敬二

目的 前回に続き知能検査の内容のなかより今回は第七項より九項迄(果物、遊び道具、楽器)の報告を行う。方法 幼稚園児において面接法による各項目に就き知っている限りの解答を求め、被験者は市街地、郊外、農村の年少児(六四名)および年長児(一二六名)を類別使用。結果 果物に就いては地域的差が現われ、その順位は市街地、郊外、農村の順である。さらにこれは年齢別にもその差が現われ年長児が特に多く発表している。性別については市街地、郊外の幼児の中で男子がやや優位を示した。しかし農村に於いては差は認められない。表現される果物の名称はその地域に著しく影響され、特にその季節と密接な関係をもっている。遊び道具に就いてはその名称の種類の数に地域別、年齢別、性別の差は殆んど認められない。遊び道具の質的变化は地域別、年齢

別、性別が時に顕著にみられる。地域別に就ては市街地幼児は機械的な、高価な物にその方向が向けられ、農村幼児に於ては自然的かつ原始的な安価なものにその方向が向けられ、郊外地の者はその中間に位する。年齢別に於ても同様な傾向が見られる。又性別に於てはその差異が明瞭に見られ、特に年長児に於てその差が著しい。楽器に就いては楽器の名称と地域別との差は明瞭に現われている。市街地の者は特に多い。年齢別に見てもその差が著しいが地域別の程ではない。性別はまだはつきりしない。楽器の質的变化に於ては、幼稚園そのものの施設に負う所が多い。そして日本の楽器の現れ方が少ない点に筆者は淋しさを感じている。

(92) 記憶保持に於ける態度の影響

日本女子大学 金子孝彬
日本女子大学 小松澄子

一、問題 記憶保持は色々の条件によつて支配され多くの研究がある。何故忘れるかを分析することによつて能率的学習法を設計することが出来ると思われ。こうした目的から、学習に対する態度が再生時にどんな結果を及ぼすかを調べてみた。色々な態度は次の実験条件によつて与えた。

二、方法 被験者は中学一年三九名(実験一) 小学六年三〇名(実験二)。実験材料はボール紙迷路を用いた。実験条件は実験一に於て group を四つに分け

- (1)「二日後どれだけ覚えてるか試して頂きます」という Instruction を与えない。(2)学習後「明日どれだけ覚えてるか試して頂きます」と云い明日になったら「都合により止めます」と云つて置く。(3)学習後、二日後再生の Inst. を与える。(4)学習前 Inst. を与える。各 Group 共二日後再生させる。実験二では(1) Inst. を与えない。

(2)学習後 Inst. を与える。(3)学習前 Inst. を与える。の三つの group に分け再生は学習後十分(雑談)とする。

三、結果とその解釈 実験一からは覚え様とする態度で学習した group が最もよく保持され、次が完全学習後に Inst. があり、その時から忘れぬ様にしようという態度を持った group、次が一日後に再生させられるという Inst. がありその日になつたら取り消された group、最も保持率の悪いのは Inst. を全く与えない group となつている。この実験では再生迄二日ある故、その間反覆練習するかも知れない。そこで反覆練習出来ない様に完全学習後再生迄の時間を一〇分としてその間雑談をさせた。それが実験二で始めから覚え様とする態度で学習した group が最もよく保持され、次が覚え様という態度を持った group、完全学習後に忘れぬ様にしようという態度を与えられた group は混乱するためか最も保持率が悪い。

従つて此の実験結果から覚え様とする態度で学習した場合が最もよく保持され、完全学習後に忘れない様にしよふという態度を与えられても効果がないと云うことが云える。

教育Ⅱ

第二日 第一室

(93) 教室に於ける色彩調節の効果

(第二報)

茨城大学 木村俊夫

- (1) 環境や事物の色彩を合理的に調節して好ましい反応を期待する事を色彩調節と云う。即ち、望ましい反応を惹起させるために環境や事物の色彩を其の三属性に於て調節すること、 $R=f(S)$ 、 $S=f(H, V, C)$ 、 $H=色$

相、 $V=明るさ$ 、 $C=彩度$ に依り操作する事である。詳しくは「心理学講座」一回配本参照。(2)次に紹介する研究は私の彩色設計になる二つの学校に学ぶ生徒に現われる変化を、統制群法によつて調査測定したものである。建築雑誌(Vol. 68, No. 796)照明学会雑誌(Vol. 36, No. 7)拙稿参照され度し。(3)学童の視力に及ぼす効果。一年間の始めと終りに於ける視力変化は三組の同年児童の内、最も好ましい実験結果(+0.18, +0.14, +0.09, 傍線が実験群)を示している。(4)情緒安定性に及ぼす効果。牛島式情緒性検査に依れば実験群が最も安定して来ている。(5)学力に及ぼす効果。同一問題で始と終の二回施行。検査結果の差では国語は-0.11, +2.11, -1.88, 算数は+0.21, +0.23-1.88, で実験群が必ずしも優位を示さない。(6)彩色教室入室当初の疲労促進。未だ彩色教室で授業を受けない女子高校生二組各一〇名を実験的に操作して午前午後のフリッカー値の差を見ると、疲労が促進されるのが分る。色名呼称法に依るも同様。(7)彩色教室の長期使用に依る疲労軽減。彩色教室を既に長く使用している組では疲労が軽減されている事が分る。なお点数法をも試みたが傾向を掴めなかつた。

☆☆☆☆

☆☆☆☆

☆☆☆☆

(94) 地域的に見た生徒の社会的態度について

日本大学 尾河直太郎

(1) 目的 人間性格の形成は素質的なものと環境的なものとの二要因を持ち、これらは互に影響し合つて存在する。素質の力は要求と云う形で活動を始め、環境の影響を受け乍らゴールに達し緊張は解除する。この環境的影響は潜在的経験となり性格の型になる。この為一定の社会的環境は個人的差異と共に一定の類型を与える。個人の性格は中核的性格、周辺の性格を合して研究すべきである。本調査はかかる関係を明かにする為に試みた。

(2) 方法 (a)一九五〇年度東京都農・工・商業センセンスにより各区で職業に特色のある地域の学校を選定した。(b)生徒に題名「私の将来」を空想、自由作文させ結果をリントンの要求分類により分析する。リントンによれば人間の行動は要求の基本的要素の組合せである。而して人間類型は欲求の類型に於て一つの特徴を持つ。(c)社会的態度についての質問表、新聞の見出し語とその反応語を用意しその解答を集め特色を見た。

(3) 結果 (a)分析結果。要求類型に大差なく共通特色を持つ。安定と社会的認知への要求が大であり、愛情要求が低い。将来の予想は都心と周辺ではややその内容に差がある。都心の者は現実に可能である高い社会的理想を持ち周辺は現実に即し過ぎた態度か(知能の低い者に於て)空想的な理想を持つ傾向がある。(b)質問表分析結果。「母子心中」の見出しに、都心では温情的、周辺では絶望的な態度を示し、「スラム街追放」の見出しでは都心は独立的、周辺は依存的態度を示す。他の項目は共通な特色を示す。

(4) 結語 以上から、生徒の欲求類型が何故この様な

型をとるか、又その特色は青年期一般的なものか、社会的条件に依るものか、生徒の社会的態度及び要求対象の差異の具体的内容は何か、が今後の問題となる。恐らく要求類型に於て地域的差は見出されないがその表現と対象に於て差が見られ、地域差は経済的条件に左右される事が大きく、経済的に低い地域は現実に密着した生活態度が生れ、又社会的認識も自由主義的でない傾向が見られるであろう。

(95) 日米両国に於ける職業指導

の「課題」について

神戸大学 増田幸一

問題の設定と方法 職業指導の領域では現在どんな課題がどんなに研究されているかを日米両国に於ける最近の発表論文を基として考察し様とした。資料として利用したのは「全米職業指導協会」の機関誌「Occupations」と日本職業指導協会雑誌「職業指導」の一九五〇—一九五一年度及び一九五二—一九五三年度誌上に表われた論文及び報告である。論文、報告は次の一に区分して整理した。(1)職業指導の原理、方法。(2)職業指導運動。(3)職業指導の組織、運営、施設。(4)職業指導計画。(6)指示。(6)職業体験、職業訓練、職業実習。(7)テスト、個性調査。(8)助言、助言者の養成。(9)進学、選職指導、就職斡旋。(10)補導職業界、教育界。(14)職業再教育、成人指導。数量的結果とその考察 日米の論文、報告を發表された件数に基いて見ると両年度に於て問題領域に依り可成りの差異が見られる。それら課題の重心の年次の移動を示すものである。然し私はむしろ日米に於ける両年度の件数を合計した数を比較し、各問題領域の重みが両国間でどの様に違うかを考察する事に重点を置く。それに依ると差異の著しいのは「インフォメーション」「職業

指導計画」「職業指導運動」「組織、運営」である。その反面、差異の少ない物もあるが、それは「助言」及び「進学、選職」である。

考察の帰結 この結果は今後の我が国に於ける職業指導の研究方向に対し重要な示唆を与える。(1)助言は日本でも米国と同様重視している問題領域である事はよいが、これは我が国に於ける「職業指導計画」がなお単なる年間行事計画の立案にとどまつてゐる為である。(3)「職業指導運動」は米国に較べて日本では非常に重要な問題になつてゐる。これは我が国の職業指導がまだその趣旨の普及や啓発の活動を必要とする段階にある事を語るものである。(4)その他「テスト」及び「原理」も我が国ではもつと研究が深く進められなければならない領域である。

(96) 高校運動選手の生活態度に

関する調査

東京教育大学 金原 勇
体育学部

(一) 研究目的 体育の目的として身体的発達、行動の発達、情緒的発達、社会的発達の四つがある。第一にスポーツに依り社会的発達が促進されるか、阻害されるかを研究した。もし体育が社会的発達を促すなら、高校の一流選手についてその生活態度を調査し、これを一般高校生と比較すればそこに有意の差が認められよう。更に運動種目に依りその場の性質が可成相違するので各種の運動独自の影響を選手に与えている。各種目の選手にも生活態度に差が認められる。第二に以上の如き差が認められた場合、それが如何なる原因に基づくかを分析して見た。この報告では第一の問題についてその一部を取り

上げた。(4) 研究方法 (4) 被調査者、一九五二年の八月全日本インターハイに出場した陸上競技と籠球選手、及び一般高校生一、八四二名。(5) 調査用紙、(1)と(2)との二部からなり、この報告では(1)の三、スポーツへの動機(スポーツ生活に対する態度)と四、生活態度とを取り上げた。生活態度の調査事項は青木氏、桂氏の用いた調査であり、両者は六つの生活態度から一つだけ選ばせているが、私にはかかる方法では有意な差が見られる可能性は少ないと思つたので、各態度毎に一つずつ判断させ、自分にあてはまる程度に応じて○×を付けさせた。運動の動機の調査では人間の基本的要求が運動に於てどんな形が満されるかを考察し、二〇の動機をあげ生活態度の場合と同じ方法で調査した。(6) 整理法、一般高校生、陸上選手、籠球選手の三グループを更に男女別にし、各態度毎にその頻数の%を算出しグループ間の%の差を検定した。

(97) 学級に於ける交友構造の

発達について

岡山大学 末 利 博

(1) 目的 学級間での友人の撰択、拒否の関係を学年、性別に分析しその要因を明かにする。(2) 方法 (a) 資料、昭和二八年一月岡山県に於ける五三名(高校五名、中学一六名、小学三二名)の教師に依頼して担任の児童生徒を中心し、交友関係の調査をさせた。(b) 調査方法、(4) 質

問紙法、面接法で各自の級中最も仲の良い者と悪い者を一名ずつ挙げさせる。(5) 撰択、拒否要因のリストに○印をつけさせて要因を明かにする。(6) 資料整理、(4) 相互撰択、相互拒否、被撰択拒否の頻数の χ^2 (χ^2 被験者数、 χ^2 頻数)を年齢別、性別に集計。(7) 各個人の被撰択拒否の人数を○人、一人、二人、三—五人、六人以上の六段階に分け、各段階に於ける頻数の χ^2 を年齢別、性別に集計。(8) 被撰択拒否人数の分配の範囲、標準偏差、脱逸度を年齢別、性別に算出。(9) 異性の撰択拒否の頻数の χ^2 を年齢別、性別に算出。(10) 撰択拒否要因中の○印を年齢別に分類す。(11) 結果 (4) 相互撰択の比率 χ^2 は三〇%前後であるが中三年以後増大し女兒は一年この傾向が早い。相互拒否、被撰択拒否の比率は一〇%前後で、一般に成熟と共に減少。(5) 被撰択、被拒否の集中度、級友の誰からも撰択されぬ者の比率は高校時代に急激な減少を示し、一—二人の友人に撰択される者の比が中三年から増大。三—五人の友人に撰択される者の比率は成熟と共に減少し性差はない。拒否については年齢別、性別の差は少ないが二—五人の友人に拒否される者の比率は成熟と共にやや増大。(6) 各個人の被撰択拒否人数の平均と偏差については、平均人数は被撰択、被拒否では大体一人前後で、年齢、性による目立つた変化なし。偏差は被撰択、被拒否、共相当の動揺があり、成熟と共に相対的脱逸度は減少を示し、特に被拒否に於てこの傾向が大。性的には女の子が撰択拒否両者に於て偏差が大。(7) 異性撰択は中三年迄減少し、拒否は男子は中三年迄漸減、女子は漸増。(8) 友人撰択の要因。下降型：身体的要因、知的要因、対他の行動、対物的行動要因である。上昇型：情緒的要因。不変型：地理的要因、対自的行動要因。(9) 反省 交友構造は非常に力動的で学級の個々の特性が全体の構造に微妙に影響し、発達の同一様な型は見出せない様に思われる。

(98) P.G.R.法に依る映画構成の

分析

—映画「長崎の子」を用いて—

東京工業大学 ○宇留野藤雄
東京都世田谷 山田 広 造
東大原小学校

I 実験目的

映画製作の意図が如何に観衆に伝わるかを見、また逆に映画構成上基礎資料とすることは、重要である。この種の研究は一、鑑賞時、二、鑑賞直後と一定期間後に二分される。前者は呼吸、脈膊、私語等の自発的生理反応を手掛りにする。後者は面接に依る問答、作文テスト、絵画、等を通じて行われるが、何れがよりよいか分らない。特に後者は操作が易しいが観衆の表現能力差が結果を左右する。又幼児、精神遅退者は表現能力を持たないと考え得る。操作は複雑であるが前者の方法の中最もヴィヴィドな反応を示すP.G.R法を採用した。これに依る研究を一九三二年 Rucknick が報じているが、反射を手掛りとした為否定的結果を得た。従つて先ずP.G.Rの如何なる示標を手掛りとすれば映画構成の分析に本法を採用出来るかと云う事を出発点とした。

II 実験方法

小学児童六年生のIQ上の各層から、ランダム抽出に依り男女二五名ずつ計五〇名を選び、それに「長崎の子」と「メトロノーム数唱」を夫々一〇分宛提示。提示の順序は各児童に交互に行つた。結果整理の主な示標は(1)三〇秒毎の抵抗値、(2)シナリオの山に対する最大反射量。(3)山に対する反射回数等で、(1)(2)の結果はlogで表わす。

III 結果

(1) 中性刺激として選んだ「メトロノーム数唱」と「長崎の子」との間に一%レベルで有意の差があり、これは映画により誘発された反応と考へる。(2) 「メト

ロノーム数唱」に於て時間的経過に伴い三〇秒間の皮膚抵抗値は漸増するが映画の場合徐々に減少し特に提示後五分を界にして急に減少を示す。(3)反射量。回数に依りヤマを分析すると、特に反射回数に於ては「原爆投下後近親の死」提示後五分一〇分にかけて全反射回数の八五・六%が集中している。(4)各被験者を性格、I・Q別に層化抽出したのに個人間に有意な差を見る事が出来なかつた。以上の結果から what stone bridge 回路の測定装置から得られる抵抗水準の推移(三〇秒毎)反射量反射回数等を示標とすれば「長崎の子」の構成を分析する事が可能である。然しここで示される映画に対する反応は児童の知的測面に対応するものではないらしい。

(99) 医大入試に現われた心理学の問題傾向

日本大学 木村 禎 司

昭和二六年度と二七年度とに行われた全国医大又は医学部の入学試験の問題を各学校に照会しそのうち心理学に関する部分を集計した。二六年度には一六校、二七年度には三一校の回答を得た。問題の形式は論文式と定義式に分けた。大部分は論文式又は一部論文、一部定義の組合せであり純粋なテスト式は一校しかなかった。従つて形式の上から見ると論文唯一題を課するものから二〇〜三〇の項目を含むテスト式まで種々雑多である。中には両者の組合せもある。論文式だけのものでは二題とか三題が多く論文と定義の両者の組合せでは論文一題と定義四〜五題との組合せが多い。この小項目の数を多くしてテスト式(多肢撰択)(真偽法)等にしたものも少数あつた。問題の内容は論文式問題の項目は六八、定義式項目は一五一(定義式の中には心理学者の名前につきその立場または業績を述べさせるもの三一項を含む)。

合せて一九八項目である。それ等の項目について出題回数を調査した。論文式で出題回数の比較的多い項目は条件反応(6)ジェームズラング説(5)知覚(5)恒常現象(4)環境(4)試行錯誤と洞察(4)身体と感情との関係(4)大脳機能と精神との関係(4)仮現運動(3)ウェーベルの法則、ミュラー・リエル錯視(3)心身の関係(相制、平行、同型説を含む)(2)作業曲線(2)知能(2)葛藤の力動的構造(2)内向性と外向性(2)等が二回以上出されている。定義式とテスト式問題を一括してその出題の回数を調べその頻数の多いものは論文式のそれと共通のものが多し。先ず知能指数(8)恒常現象(7)ジェームズ・ラング説(7)仮現運動(6)洞察(6)要求水準(6)直観像(5)知覚(5)条件反応(5)共感覚(5)地と図(4)試行錯誤(1)内向外向(4)再認(4)簡素化(3)刺激閾(3)適及抑制(3)葛藤(3)動機(3)飽和(2)ウェーベルの法則、ウェーベル、フェヒネル、弁別閾、記憶、把住、作業曲線、自己中心性、視丘(2)等が主である。人名は二回以上の出題が多い。なほ一回しか出ない項目で心理学の対象や方法に関する問題も多く項目の点から見れば心理学の全領域にわたつて出題されている。また新旧の事項にわたつてそこに心理学の複雑性が解る。

職業指導Ⅱ

第二日 第二室

(100) 国鉄における応用心理学的問題について

国鉄労働科学研究室 鶴田 正一

国鉄における心理学の応用は次のとおりである。

一、職員採用時適性検査 知能、性格、特殊機能、学科、技術、面接等の問題で、昭和二三年より全面的に実

施され、職員の素質は知能成績について約三〇%の向上を示した。

二、運転考査 現運転関係従事員に対して、事故防止の立場から行う一種の適性検査で、昭和二五年度より始められた。これにより責任運転事故は、この考査実施前の二五年度に比し、二六年度は一三%、二七年度は四六%の減少を示し国鉄資料中の最低時よりも更に下廻るに至つた。

三、職員採用後の適性配分と教育訓練 イ、工場技工職種別適性配分法。ロ、投炭作業の訓練法。ハ、電信送受信の訓練法。以上は実施の研究に移れるまでになつてゐる。ニ、幹部及び職場訓練は四種類の方式が一応出来て実施に移つてゐる。

四、勤務様式の適正化 一日二四時間各時刻帯における心身機能の消長推移の研究を基盤にして、これと各種勤務様式におけるそれとを比較対照し、事故防止の立場から、労働時間、休憩、休息、昼間と夜間労働の等価時間の研究を進めてゐる。

五、事故、災害(責任運転事故、傷害事故) イ、事故の原因の分析とその除去。この原因分析に際しては、その分析にあたり、一事故一原因の単式統計を廃し、一事故数原因の複式統計に改めたことにより、いままでかくれていた原因因子が判明するに至つた。ロ、責任事故者の調査とその判定。この調査では紛糾した事故についてP・G・R等の活用で二〇件中一八件の解決を見てゐる。ハ、事故災害頻発傾性者の発見法。Dingerの知覚の速さと運動の速さとの対照及び内田クレペリン検査とを綜合することにより著しく高い発見率を得てゐる。

六、人事考課 職場指導、転任、昇進等に活用しようとの目的で研究を進めてゐるが、職務分析、職務評価、勤務評定、試験方法等について、方法論上の検討を試みている。

七、人間関係 イ、労働意欲、職別、勤務年数別にその差異の原因分析が行われつつある。ロ、職場倫理。ハ、公共奉仕等の問題にも着手中。

八、職別労働適応年齢 暦年齢ではなく、運転考査の成績に基づいて、心理及び生理的機能による年齢を研究しつつある。その他、色彩調節の問題は目下調査の範囲を出していない。なお鉄道教習所の教科目に心理学及びこれを主にした保安科学、労働科学を設けた。

(101)

疲労の知的作業におよぼす影響

日本大学 高嶋 正士

一、問題 本研究は疲労が知的作業にどの程度影響を与えるかを実験的に考察し疲労時、非疲労時とで作業におよぼす影響を比較した。

二、方法 小学校被験者男女二〇名をA・Bのグループに分けた。Aグループとは比較的成績優秀なもの男女各五名、Bグループとは反対に成績の悪いもの男女各五名とし、クレペリンによる加算作業を非疲労時および疲労時の二つに分けて実施させた。非疲労時においては、始業第一限をえらんだ。すなわち朝のすみきつた時をえらんで実施、練習効果を除去するため一日おき一〇回実施した。各個人の最高点まで到達する段階まで練習させた。次に一回以降は疲労時として作業前に種々の作業を課した直後に前回と同様に加算させ前回の量的質的差異を比較した。

中学生被験者一〇名について内村による点かぞえ法を用い、同様な方法で男女別各二回ずつ分けて実施させ、最後に知的作業にあらわれた疲労の影響を更に検証するため、生理的变化をみた。これには簡単な実験法である「唾液反応混合試験紙法」を用い、加算作業実施直後男

女一〇名についてその変化をみたのである。

三、結果 加算作業においては非疲労時よりはるかに作業量が減少し男女ともに誤数が増した。特にBグループにおいて著しい下降を示した。これは疲労のあるFactorが作業に影響をあたえたものと思われる。つきに点かぞえ法においても同様な結果が得られた。すなわち非疲労時においては代数和が⊕値をとっているが、疲労時にあつては男女とも⊖値に変わり、かつ絶対値数の総和がいちじるしく増加した。これは実施直前に抹消検査をかなり多く課したためにこのような影響を与えたものと思われる。これらの裏づけとなる唾液反応検査においては、前作業結果のごとき優位的差異は疲労時にはみられなかつた。しかし非疲労時より〇・二〇・六ほど値が低下している。この結果から多少疲労は知的作業ばかりでなく、生理的にも何等かの影響をあたえているということである。そして女子より男子のPH値が低いことになつた。この点今後更に検討すべき問題である。

(102)

労働年齢の問題 III

—最適年齢の統計的研究(続報)—

大阪大学	橘	覚勝
大阪大学	太城	藤吉
大阪大学	石若	嘉甫

本報告は広島に於ける第一七回日本心理学会大会(本年五月)と、大阪に於ける第五二回関西心理学会(同六月)とに発表したものの続報である。前者に於ては、主として選定集約された一九項目の作業特質のうちで如何なる特質を必要とする(普通以上に)職務が多いかを男女別に明らかにして、最適年齢を考へる場合の特質の重点の所在と示し、さらに特質項目毎に年齢毎最適職務数%を計量図示した。また後者の場合に於ては、特質毎の

最適年齢の上限(高年齢)及び下限(低年齢)そしてその年齢的範囲を中心として発表した。

今回は年齢毎の最適職務数分布が、特質項目によつて相異なるか否かをみるために、 χ^2 検定による両者の関連性如何という問題をとした。本検定の結果、少数の場合を除き(これは常識的にも想定できるが)最適年齢の分布は特質項目によつて相異し、これらの特質に規定されている所以を知ることができた。いいかえれば、特質能力の相対的な消長、すなわち低年齢に適するとみられる特質、中年期のそれ、さらに高年齢のそれを男女に於て一応明かにすることができた。

なほ本研究の具体的な内容は、何らかの形で近いうちに詳述発表するつもりである。

(103)

職務分析の職務概念について

労働省 松本 洋

職務分析における於ける職務の概念は次のとおりである。

- 一、職務分析を立派に実施するためには
- (1) 職務の実体を完全に正確に把握する事。
- (2) 職務の内容たる事項を完全に見つ正確に記述する事。
- (3) その職務に於て一人前の従業者たるに必要な要件がすべて指摘される事。

という三原則を守り、実現するために各分析者は(1)何を如何に、(2)何故に、(3)何故に、(4)熟練性の四方式に従がわねばならぬとされているが、いかにこれらの三原則、四方式に従うとも根源の職務の概念を取違えていたのではその結果はよくなく(又分析が非常にやり難いのである)。各事業所ではその事業を経済的に営む為めに所要人員の人を雇用して適当に役割を進めて働かせているのであつ

て、これこれの職務をやらせるといふ目的を最初から立てて雇用しているのはまれである。現実には、雇用されている人々が一人ずつその事業所の事業を遂行するために仕事をやりそれぞれに果せられた責任を果しているということである。即ち雇用されている人は地位をためているということは確実である。職務分析において地位とは一人一人に課せられている責務と責任との全体をいうのである。

二、職務分析における職務とは沢山ある地位の中、その主要責務と責任とが同様であると職務分析者が認め、それら同様と認められた地位を一捨して分析の対象としたものである。

三、以上の如く職務分析において、現実のあるがままの姿で実体を完全正確に把握し記述するためには、職務の概念をこのように研究し、規定せざるを得ないのであつて、このように職務を定義づけることによつて職務から職業、職業から職業族（相互に関連する職業の一部を職業族とよんでいる）へと職業分類が組立てられ、又これに基づいた職業適性検査並びに判定基準を設定しうるのである。

(104)

所要精神的身体的特質による職務分類について

労働省 佐柳 武

職務分析の資料に基づき、多くの職業をその所要性能から分類体系を明かにするためには次の二過程を経る。

- (1) 職務の仕事 (Task) に基づき性能評定をする。
 - (2) 評定性能の種類と程度により職務分類を作る。
- (1)については、昭和二三年から三年間、職務分析の実施と同時に、T票として身体的、精神的特質四八項目の評定を行つていたが、評定に信頼性がおけないので昭和

二五年度を最後として中止していた。本年度（二八年）敢えてこれを行うことは、この利用上の必要性と、さらには、従来の評定上の欠陥を改善して評定の信頼度に見透しを得たからである。

達成の方法 (1) 評定資料に当該が過去六年度間に蒐集した資料九、〇〇〇の内代表職務四、〇〇〇の仕事の分析記述に重点をおく。(2) 評定は心理専攻で職務分析技術を修得した当課の職員（六名）が担当する。(3) 対象性能は基礎的心理学的研究で確実視されたもの、又は職業紹介上不可欠と考えられる一七性能とする。(4) 対象は従業員でなく職務である。(5) 性能評定段階を明確に規定する。

職務で成功するために必要な性能の種類と程度は最大又は最小でなく所要平均を取出す。(6) 性能の定義を規定し、評定の統一を図る。(7) 職務評定の見本としての職務性能基準表を作成して評定はこれに準拠する。(8) 所要性能のうち時に仕事の遂行に重要なものには（ ）をつけ且つ評定を裏付ける仕事の記述が加えられる。(9) ある評定性能の種類と程度により職務分類を作成し、現行職業適性検査或いは第二検査と直接的関連を持つ職務群を再編成する。

(105)

身体障害者の職業能力について

労働省 岩崎 一郎

公共職業安定所員が昭和二九年五月、六月に六四七事業所を訪問の上、事業所員に身体障害者および一般従業員について勤務状況、定着状況、労働災害、作業成績について調査した結果次のことが明にされた。

調査結果概要
調査の結果身体障害者の職業能力は、一般従業員三八四、九四六人の比較において、その出勤状態において

も、定着状況においても、その作業成績を量と質の両面から検討するも一般従業員に対して勝るとも決して劣らぬ成績を揚げていることが明らかにされたが、特にその作業成績について見ると、その作業量は一〇〇・六〇質においては一〇〇・八七の成績であつて、非現業部門における評価の困難性はあつたが、この成績は身体障害者が一般作業者に互して同一作業に従事しても何らの遜色のないことを示している。即ちこれを障害部位を異にした障害者について見ると、聴力障害のある者、言語機能に障害のある者、上肢切断乃至上肢機能に障害のある者及び下肢機能に障害のある者などは一般従業員に互して同等又はそれ以上の成績であり、視力障害、下肢切断者、体力不自由者、中枢神経機能障害者等は若干その成績が落ちてはいるが、下肢切断者の作業成績は、殆んど一般従業員と伯仲しており、その他の障害者の成績も九〇％にこれを職業との関連において見ると、一般的には身体障害者が事務販売の職業、監督的職業、機械操作の職業、機械監視の職業等に従業した場合一般健全従業員と同等又はそれ以上勝れた成績を示しており、手作業等の職業、検査選別の職業等も殆ど伯仲しているが運搬、守衛、清掃等の職業では若干劣等である、勿論これらには雇用者側による勤務上、作業上の理解ある保護乃至援助の大きな事もあるが、なお労働災害の発生状況については調査上の欠陥が明らかになつたので除外した。

(106)

第二作業中の CFF

日本女子大学 金子 秀 彬

CFF値に關与する変動要因を分析するために、CFFの測定中にある種の作業を附加して、その測定値の変化を考察した。被験者の態度はCFFの一つの重要な変

動要因と考えられる。この実験ではCFFの測定中に視覚を用いない他の作業を同時に行い、被験者の態度を変える或は附加された作業によつて精神的緊張を高める条件をつくり、その際のCFFの変化を考察した。附加作業(第二作業)として①暗算、②打叩音の聴取計数、③見ないで〇・九の数字を連続的に書く作業、④短文を聴取して直ちに反唱する作業等を用いた。此等の作業は被験者がCFFの検査に従事しているときに課せられ、尙中断しないように答が出されたら直ちに次の問題を課すとか数字を書く場合では休まずに書くように命じ打叩音計数では、実験が終るまで連続して算える。被験者は此等の作業を行いながら尙フリッカー視標を注視し、フリッカーの消失、出現を合図する。

結果 打叩音計数を除いて、第二作業が附加されたときの方がCFFは高くなる。しかしこの際、第二作業にも従うことから頻度が漸増する Flicker 刺激に対して単に反応が時間的におくれるということから第二作業附加時にCFFが高くなるのではないかの疑が生れる。第二作業に注意しているため Flicker 刺激に対する答がひきずられておくれるためかとも考えられる。被験者も内省的に答がおくれるような気がすると報告した。これを確かめるために頻度が漸増する系列と融合からちらつきに向う系列とについて実験結果を求めたが、第二作業附加時には両系列に於て共にCFFは高くなつた。従つて第二作業による単なる反応のおくれによつてCFFが変化するのでないことは確かめられたわけである。

この事実は興奮性が高められる或は緊張状態ではCFFが高くなると説明され得るかも知れない。その何れが適切かについては結論できないがCFFには物理的条件と共に心理的条件(疲労外の)が変動要因として重要である。

(107) 職業観に関する一調査

新潟大学 畔上久雄

一、問題

「一ばんよいと思う職業一つ」「一ばんすきな職業一つ」「卒業後つきたいと思う職業一つ」職業観に関する諸調査中から、これらの三問をとり出して、男女差、学年差及び場面による差異を考察した。

二、方法

被験者は、小学四年男女二〇九、小学六年男女一九五、中学一年男女二二二、中学三年男女二七一、高校一年男女二一五、高校三年男女二〇三、大学男女七五計一、二八〇である。昭和二八年三月質問紙法により実施する。

三、結果の考察

(a) 男女差 理想、好き、希望職業の三者が一致している度合及びその中の二者が一致している度合を、個人別に調べて集計して見ると、何れも女子が高くなつていゝる。三者一致では男二五・八%、女二六・六%二者一致では男三七・六%、女四九・八%となつていゝる。これに反し三者及び二者の不一致は、男が高く、二三・〇%で女は一五・八%に過かた。($2 \times k \chi^2 = 24.12, 01 > P > \text{有意 } C = 19$)

(b) 学年差 男子に於て、これを認めることが出来るが、女子に於ては認めることが出来ない。(U) $U = k \chi^2 = 37.74, 01 > P < .23$ $k \chi^2 = 11.76, 90 > P > .80$)
そして、男子は学年の進むにつれて一致する度合が低くなる。

(c) 三つの場合の一致度 好きだから希望するというのが、もつとも一致している。男一七・一%、女二五・七%。よいから好きだが次位で、男二三・三%、女一六・一%。よいから希望するのは、男七・二%、女八・二%で

最下位である。($n \times k \chi^2 = 6.10, 05 > P, 02 C = 102$)

有意) 比較的良好(理想) 職業とは知的方面、すきな職業とは情的方面、希望職業は意的方面であるとすれば、その意志的実行と結びつき易いのは、むしろ感情的方面であつて、知的方面ではない。しかし、知的方面と情的方面は案外結びつきやすく、中間に位する。

(d) 要約 女子と低学年に於ける三者或は二者の一致度が比較的高いことになる。男子と高学年がこれに反する。後者は未分化の状態に近いことになる。男子殊に高学年に進むにつれて分化して来る。よい職業を必ずしも好まず、又希望しないことになる。知情意の分化により、おかれた立場によつて考え又実行する。女子の職業観の特異性は心的未発達による外、現下の女子職業の現状に依存するでもあろう。

検査

第二日 第三室

(108) 教研式学年別知能検査について

東京教育大学 平沼良

従来多くの知能検査は、小学校・高校まで一つの検査を使用するようになっていゝる。これは全知能の発達するには必要かも知れないが、個人の知能を評価するには不適当である。低学年では検査の最初の部分しか手をつけず終の方の問題の解答は要求されない。高学年では初めの問題は機械的に解答するが、終の問題をする頃には時間が足りなくなつてしまふ。始に無駄な時間を費し、終の僅かな問題で知能が評価されることになる。この欠点を除くには、学年別の知能検査とし、知能の発達に応じて

各学年に相当した問題を選定作成することが必要である。これが教研式学年別知能検査のねらいである。又従来の検査は同一種類の問題は難易にかかわらず同ウェイトで評価されるという不合理があつた。この欠点を除くために、学年別とし、同一問題中、難易の差が大きくならぬよう配列した。成就指数を計算する際に学年別に作成されている学力検査の成績に対しては、学年別の知能検査の成績を比較して指数を出すのが合理的である。「本問題の構成」小学校一、二年にはB式検査だけを行い、三年以上はA、B式各四問ずつ併用した。B式知能検査は、具体的、直観的能力の測定に適している。しかしB式のみでは完全と考えられない。本検査は、A、B別々に成績がでるようにした。また別書の如く各学年には数箇の同一問題がずれて組合せてあるので発達のにも見られる。「診断用検査」本検査は各学年とも八問題の下位検査からなり、各種目にはそれぞれ特殊な知能要因が含まれている。だから個人個人の合計点は等しくとも、知能的要因における差は必ずしも同一とはいえない。そこに各要因の分析を試みる必要がある。そこでこれらの各種目の成績を別々に出し、これを診断的プロフィールに描けるように構成した。

(109)

現行教師作製客観テストの
類型とその分析

愛知学芸大学 相川 高雄

研究の目的 教師作製客観テストと解釈のための基準を持つ標準検査とを区別し現在の小・中学校で行われている教師作製客観テストは、どんな作製傾向を持つかをその類型および測定目標の点から明らかにし、併せて高等学校進学学力テスト作製傾向と比較考察によりテストの特徴を分析しようとする。

調査方法 小・中学校の教師が単元の学習指導評価に用いた客観テスト(テスト時間一時間、五題)一〇題。測定目標(附記)を単元評価計画とともに提出した資料から国語、社会、算数数学、理科の四教科三三名の分を客観テスト型式と、測定目標から、無選択肢問(1)自由解答法、(2)単純再生法、(3)完成法―選択肢を伴わない)と有選択肢問(3)完成法―選択肢を伴う、(4)二者択一法、(5)分類法、(6)多肢選択法、(7)組合法、(8)排列法、(9)作文法、(10)訂正法、(11)其他)とに分類し、昭和二五年高校進学学力テスト、田崎仁氏との比較検討をするという方法に依つた。

結果 以上の調査の結果次のことが示唆された。小・中学校とも単純再生法が多く作製され、教科別に見れば小学校では、数・理・社・国の順に、また中学校では、数・国・理・社の順で、単純再生法が用いられている。次いで、小・中学校の間にはやや相違があるが多肢選択法、完成法(選択肢無)組合法の順で用いられ、総じて小学校では無選択肢問、中学校では有選択肢問が多く用いられている。以上の結果を高校進学学力検査の傾向と比較すると、高校進学学力検査では有選択肢問、特に多肢選択肢問が小・中学のそれより遙かに多い。更に小・中学校の客観テストの目標は知識理解に重点がおかれ、所謂問題解決能力を測定するものが少い。前者は理・社において八五%をこえている。以上の結果は客観テスト形式と測定目標とに比較・分類・分析の手續を加えた結果得たものであるが、形式の規定方法や測定目標の把握方法には困難な点があつた。今後この点を明確にすると共に、テスト作製時間、およびテスト結果の活用状況等についても検討を加えたいと思つている。

☆ ☆ ☆ ☆

☆ ☆ ☆ ☆

(110)

基礎読書力診断テストの構成と結果

東京学芸大学 阪本 一郎
東京学芸大学〇斎 藤 義 夫

一、テストの目的と構成 小学一年から三年にかけて発達する基礎的読書能力を診断的に検査するのが目的。テストの結果は(読書力偏差値・或は読書年齢と読書指数)で表わし、又、小テスト別発達程度はプロフィールで示される。小テストは、(1)語の認知(語彙を認知する能力) (2)文の理解(文章を理解する能力) (3)節の理解(節の意味を理解する能力) (4)漢字の読みや意味の習得度の四種で構成されている。

二、学年別の得点上昇 本テストの尺度によれば総合的読書能力は小学一―二年において急上昇し学年が進むにつれて上昇率が緩慢になつていく。最も著しいのは「文の理解」で「語の認知」がこれに次いでいる。「節の理解」は学年による変化が少い。これは或程度知的発達が進まなければできないことを示している。「漢字の読み」は常に同じ上昇率を示す。これは全学年に互つて大体同じで習得量が進んで行くことを示す。

三、学年別の標準点と標準偏差 学年・学期別の平均点を標準点とし、その標準偏差をみると、四年中期を頂点とし減少している。本来ならば個人差の増大とともにS・Dも増加する筈であるが、本テストが四年以後は「頭打」となり、個人差が表われてこないためと思われる。四、小テスト相互間および総得点と小テスト間の相関 総得点と各テスト間の相関は極めて高く〇・九以上である。小テストにおいては「文の理解」と「語の認知」が高く、「節の理解」がこれにつき、「漢字の読み」はやや低く〇・七である。

五、読書能力の発達に及ぼす図書館教育の影響 厳密には、図書館教育によるものか、地域性、文化性等の影響なのかは断定し難いが、これについては次のように考察される。一般に低学年では大きな差はないが、三年以後は顕著な差がみられる。特に「文の理解」において著しく、「節の理解」と「漢字の読み」がこれに次いでいる。すなわち図書館教育は速効的ではないが、長い間に徐々に教育効果をあげて行くものと考えられる。

(111) 客観テストの解答変更について

山口大学光分校 久芳 忠 俊

I 問題 客観テストの問題に対して解答に自信のない生徒はしばしば教師に「第一印象によつて解答した答を訂正変更した方がよいかどうか」を質問する。こんな場合、最初の解答を訂正した方が有利であるか否かを調査するのが本研究の目的である。

II 調査方法 附属中学校教師によつて作製された各教科目の問題一三〇問を高校新入生一二四名に施行した。解答時間は二時間。

III 処理方法 訂正されたものは、(1)正しい解答から誤った解答に訂正される場合〔正→誤〕(2)誤った解答から正しい解答に訂正される場合〔誤→正〕(3)誤った解答から誤った解答へ〔誤→誤〕の三つに分類される。〔誤→誤〕の場合は得点に含めない。

IV 結果の解釈 ①一般的傾向としては男女共に解答に訂正を加えた方が得点に有利な結果を表わし、特殊な形式のテストは例外として、総合成績検査のような場合には、再考の後に解答に訂正を加えた方が有利ではないかと考えられる。②全体の生徒の七・八が訂正を加え、その中男子は六・九であり、女子は九・〇であるから、

男子よりも女子の方が、訂正数が多いことが分る。③問題のあり場所による訂正への影響としては、問題の終の方は訂正数が少いこと、これは問題が段々容易となつたか、疲労したか、注意散漫になつたかに原因すると考えられる。④得点から見た訂正数。成績の段階を、A・B・C・D・Eの五段階に区分して見ると、成績の悪いE級の方が〔正→誤〕への訂正数がA級より多いこと、又それと逆に〔誤→正〕への訂正数はA級の方がE級よりも多いことが見出され、〔誤→誤〕の訂正数はE級に多く見られる。

V 結び 一般的に女子の方が男子よりも訂正数が多いが得点は却つて増加している。E級はA級に比べて〔正→誤〕〔誤→正〕の型が多い。この結果によれば第一印象によつて解答するよりも、再考に再考を重ね訂正変更を行つた方が有利であることが分る。

(112) 色感テストについての予備報告

日本色彩研究所 関 秀 光
日本色彩研究所 紺 野 尚 志
日本色彩研究所 橋 本 仁 司

日本色彩研究所製による色感テストを諸見地から検討し、改訂を行うための予備的資料を得る目的で、色感テストA篇を小学校児童約二〇〇名に施行した。その結果は、得点分布が大体正規型であり、知能との相関もある程度認められることが明らかになった。

またこの問題の難易度、および共感覚における周辺部位の検討をするために、四〇個の配色を用いて上と同じ被験者(小学校児童)に回答を求めた。以上の検査によつて、今後の問題改訂の予備的資料を得ることができた。

(113) 学習態度測定を試み

田中教育研究所 鈴木 清
田中教育研究所 間 宮 武
田中教育研究所 品川 不二郎
田中教育研究所 辰 見 敏 夫

目的 学習態度の良好さを診断することによつて、児童の学習方法を改良しようとする目的のもとに、学習興味診断テストを作成した。第一部は学科における興味診断、第二部が本検査である。

方法 問題作成は、アメリカにおける学習態度のテストの内容を検討し、田中教育研究所の所員、ならびに都内の小中教員一〇名によつて学習態度として問題となる点を列挙した。予備検査において Lausge の Dバリエーション・四以下のアイテムはこれを捨て、現在の問題を作成した。したがつて、各アイテムの妥当性は十分である。

さらに二、〇〇〇名に田中B式と算数・国語の標準学力検査を施行し、知能偏差値四三―五五のもののうちから、成就値が平均より一シグマ上のもの七名、下のもの五八名を選んで、その差を検討したところ、5%で有意の差があることが分つた。したがつて全体としての妥当性も十分である。

信頼度は一カ月の間隔で二度くり返したものの相関を調べたが相関係数〇・八七でこれも満足すべきものである。

☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆
☆☆☆☆☆

(114) 面接による人物評定の試み

日本大学 安藤公平

一人の被験者を相手に数人の面接者が同時に面接した場合、人物評定がどの程度に一致するかを検討した結果の一報告である。

1、方法 (1)被験者、大学生を一六名、学内における特待生試験の受験者。(2)面接者、大学教師六名。(3)面接方法、一人の学生を六人の面接者で同時に面接する。学園生活、校外生活、読書、趣味、社会問題に対する意見などを自由に語らせる中に、被験者の応答振りを観察し別に定めに評定様式にもとづいて評価する。面接時間一五分。(4)評定項目と評定尺度、特待生としての望ましい人格像を次の一〇から評定する。①音言語、②容姿、③機敏性、④発表力、⑤判断、⑥情緒安定性、⑦自信、⑧協調性、⑨統率力、⑩総合判定、各項目は五段階の図式評定尺度になっている。(5)結果の処理法、各項目の評定を一五点とし面接者別に各被験者の一〇項目の評定の合計点を出す。(人物評点—満点五〇)

2、結果 (1)人物評定の分配状況、前述の方法による人物評点は、平均三二・八標準偏差五・〇となる。その分配はやや右に偏る傾向があり両極が少いことも一特徴(2)面接者による評定基準の個人差、六人(A-F)の面接者が一六の被験者に対して与えた評定の平均はA(三〇・三) B(三〇・四) C(三五・四) D(三八・八) E(三一・九) F(三四・〇)で、その個人差の最大は五・二であり、明かに統計的に有意の差が認められる。(3)面接者間の評定の一致度、六人の面接者が与えた評点によつて順位をつけ、その順位による相関係数で面接者間の人物評定の一致度を見ると、〇・七二—〇・九一(平均〇・八一)という高い相関がある。(4)面接評定の

妥当性、同時に実施した他の検査との相関をみると、学力と〇・八五、進適と〇・三三といずれも十の相関を示した。(5)評定項目別の比較、各項目別の評定分布、平均得点及び平均偏差をみると、評定項目による差はあまりないが、機敏性、発表力に比し、情緒安定性、自信などでは、評定がやや一致をみない傾向がある。

(115) 高校進学アチーブメント・テスト問題(昭二八)の分析と批判

横浜国立大学 〇橋本重治
横浜国立大学 金井達蔵

一、問題及び方法

高校進学アチーブメント・テストがそれぞれの科目の指導目標とされるところを如何に広く蔽うような問題を出しているか、又その目標と捉える為になんかテスト用具(技術)を用いているか、その用い方は妥当であるかの主点を明らかにする目的で、社会理科・図工の三科目について分析を試みた。

二、結果

例えば、社会科では知識の理解を知識・理解の形でテストする傾向が強く、問題解能力中の知識・原理の適用能力のテストの形でテストする工夫が一層認められる。その為にはもつと問題場面テストの如き用具の研究と活用が認められる。

態度をテストしようとする努力は見られるが、その出題率も少く、又用具も貧弱である。然しこれはペーパーテストの持つ限界で大きな制限を受けているのであろう。理科は社会科の場合以上に、問題解能力の諸形式で問題が出題されており、それに相応して、テスト用具も一層多量に各種の問題場面テストが活用されている。但し

理科では、態度とか技能とかの分野が限定されており、用具的にも又制限をうけている。

図・工方面は、技能・鑑賞などに反省点があるにもかかわらず、ペーパーテストの性質上それがうまく測定され得ないで、その知識や観念の形で捕えられてしまう。アチーブメント・テストに附すべく、大きな限界を持つ学科である。

(116) ろう児に試みたるクレペリ

ンテストについて

東京教育大学 尾島碩心

方法

被験者 東京教育大学附属ろう学校小学部二年—高等部専攻科の児童生徒一五八名、これらの被験者を一〇名以内の小集団に分け、クレペリ検査を施行した。以上の中から作業不能のもの五名、計算違による判定不能者八名を除外し、小学部五四名、中学部四名、高等部(専攻科を含む)四八名、計一四六名について結果の分析を行った。

結果 判定型の分布を一般成人一、二五〇名の結果と比較した。量的段階に関しては、小学の場合には有意の差が認められるが、中学・高校部においては有意の差は見られない。曲線型について考えると、小学・中学・高等部のいずれにおいても一般成人と比べて定型が著しく少く、疑問型・異常型が著しく多く、この差はいずれの場合も有意である。

次に小学・中学・高等部について各々平均曲線を作り休効率・誤謬率の平均を求めた。小学部の平均年齢は一・二歳九月で普通の学校では中学一年生の年齢に相当するが、量的段階から見れば小学校三年生の平均に匹敵し、その後れは三歳九月である。休効率も一・〇九で小学校三・四年生に相当する。中学部の平均年齢は、一六歳七

月で普通の高校二年生に相当するが、量的段階は小学校六年生に匹敵し、その後には四歳七月である。休効率は一・一四で小学校五年生に相当する。高等部は平均年齢一九歳七カ月であるが量的には中学二年生に匹敵し、その後は五歳七月である。休効率は一・一三で小学校五年生に相当し、誤謬率はいずれの場合も著しく多い。平均曲線の型についてみると、著しいことは初頭努力(殊に後半)を欠くことであり、小学校低学年生の型によく似ている。要するにこのテストから知り得る限りでは、ろう児の作業曲線は、同年の聴児に比しより未発達段階にあり、その後にはこのテストの範囲では三歳九月と五歳七月であり、又曲線型は一般成人に比して、疑問型が著しく多くなつていといえよう。

(117)

盲児の読書能力の発達に関する研究

東京教育大学 尾島 碩心
東京教育大学 ○佐藤 義正

本研究は盲児に読書検査を施行した結果を種々の角度から考察したものである。しかし本研究は基本的問題においては、盲以外の特殊児はもとより、正常児の読書発達にも関連が深い。この意味で本研究は①盲児、②特殊児、③正常児の読書発達の考察とも考えられる。

1 研究方法 盲児用読書検査を作成し、関東東北地区の五盲学校の児童(小学四年、中三年、全盲一、二、六、準盲二、六、弱視二、八、点字を視読した弱視一、五名)に施行し、また同内容の検査を正常児四八名に行つた。テストの読材料は小学四年程度のもので一問(約一〇〇字)で合計三〇題から成り各問題の後部に選択肢法の質問がある。検査時間一五分。結果の採点処理は読書を正確度すなわち $\frac{\text{正答数}}{\text{試行数}} \times 100$ で示した。

2 結論

①盲児の読書発達に最も関係の深いのは点字学習期間で、知能、学年段階がこれに次ぐ。②読書発達を点字学習開始の年月別にみると、学習開始後四年までの発達は著しく四、五年で中休みし、五、六年は再び進歩する。六、八年は一時停滞し、八、九年で著く進歩する。③学年発達の進歩には、小学四、六に非常に発達し、その後、中二まで停滞し、中二、中三に急激に進歩する。読書正確度は小四、六年と漸次進歩しその後変化しなくなる。④視力欠損別にみると全盲、準盲、弱視で、弱視がもつとも悪い。弱視も点字学習期間が長くなるにつれ、他に追いつく。⑤性別の差はない。⑥眼疾別では白内障・視神経萎縮で小角膜は読書力が低い。⑦失明年齢別に見ると後天盲には著しい差はないが、先天盲には個人差が多い。⑧家庭の職業別にみると、会社員・労働者・商業・農業の順になつていいる。⑨点字学習を開始した時の生活年齢は影響しない。⑩読書力の低いものの分析では弱視が目立つた。⑪点字を指で読むのと目で読むものとは差がない。⑫正常人の読速度は盲人の二倍以上である。読みの正確度は両者の間に差はない。

(118)

盲学校用団体知能検査(点字版)の試作

東京教育大学 榊原 清
新潟大学 ○吉田 尊吉

本研究は盲人用団体知能検査作成を目的としたもので正眼者と盲人を公平に検査し得る問題構成・検査手続を考慮しつつ作成した。予備研究として、(1)盲人知能検査の概要、(2)ハーパー推理解検査による正眼者との比較、(3)読みの速さの比較、(4)書き方の速さの比較等の研究を経て(5)新型A式知能検査を作つた。この検査は六種の下

位検査から成り、その中四検査は文字使用のもので、他の二検査は口問口答式であり、これは正眼者と同条件である。前記の四下位検査は点訳された。以上の検査を各都道府県一校宛の盲学校生徒(小学校六年以上)七四六名に実施し、それに基つき標準化をした。

結果 (1)盲人の標準と正眼者の標準とを比較することによつて盲生徒の知能程度を客観的に知り得る。正眼者と直接比較できることは盲生徒理解に役立つと思われる。

(2)盲生徒の成績は年齢の増加に伴い、毎年一〇カ月累加的遅滞の傾向を示し、総合的には三カ月の遅滞が見られる。(3)正眼者のIQ平均一〇〇に対し盲生徒のIQ代表値は八二、八九である。(4)盲生徒中適齢就学児は一般に遂年得点上昇が見られるが、遅延入学者は明瞭な得点上昇は認められない。この点から就学遅延者の学習不適応の問題が考えられる。(5)下位検査得点から見ると盲生徒は「推理検査」と「規則発見検査」に優れ、「同義語検査」「類比語検査」「記憶検査」は劣つていいる。(6)全盲と半盲との間には殆んど成績の差が認められなかつたが都会と田舎との間には優位の差が認められた。(7)点字版の検査時間は正眼者の三倍にしたことは全体的に見て不当とは思われないが、点字触読時間の個人差が大であるので、点字学習効果が、検査成績にかなり影響している。従つて今後の検査方法としては点字による出題数を制限するように工夫するのがよいと思われる。又全体として検査時間を短縮する必要があると考えられる。

☆

☆

(119) 日本映画の分析 (1)

— 分析の方法 —

社会心理研究所 南 博
社会心理研究所 ○森 永和彦
社会心理研究所 斎藤 良子

日本映画を日本におけるマスコミュニケーションの一つとして以下にのべる方法で分析する。

1、マスコミュニケーション一般の分析法により(イ)送り手としての映画会社、(ロ)送り内容としての作品、(ハ)受け手としての観客を分析する。

2、作品毎に着想が具体化し、映画として定成し、スクリーンを通じて観客の心理に影響を与え、それが社会的な影響としてひろがる過程を各段階毎に相互に関連させながら一貫して分析する。

3、作品別の分析を蓄積し、送り手、送り内容、受け手についての基礎資料を確立し時間的な変化の傾向をとらえる。

(120) 日本映画の分析 (2)

— 内容分析 —

社会心理研究所 ○鈴木 初美
社会心理研究所 中村 朗

一九五二年一月から二月までの一年間の、日本映画製作会社、五社の作品内容分析を通して、日本映画の内容の特徴を述べる。

対象作品は、長篇劇映画二二一本で、シスター映画(短篇)を除く。各作品は、便宜上、各製作会社から出している宣伝用プレス・シートを使用する。

分析の方法は、各作品の一、扱っている時代。二、物語が主に展開する場所。三、登場人物の社会層。四、そのパースナリティや特徴。五、その人間関係の五つの角度からする。

日本映画の特徴は、教訓的な要素を多く持つている。それは日本の理想の女性、男性を作つていく。又「時代もの」でも「現代もの」でも本質的には何ら変りがない。このことが日本社会の停滞性をそのまま表わしている。この様なものがうけるといふこと、そしてそれ故にこのような映画が、続々作られていくといふこと、つまりこの悪循環が日本映画の悲劇である。

(121) 日本映画の分析 (3)

— 観客の分析 —

社会心理研究所 ○小山 泰江
社会心理研究所 高野 光子

一九五二年五月—五三年五月の一年間に研究所が行つて来た観客調査の結果から、日本映画観客の特徴をみてゆく方法としては、主に観察法と質問法とを用いた。

(A)観客層について。①観客構成—性別では男性が多く、年齢別では若い層が圧倒的に多い。しかしこれは、地域別(浅草と渋谷)曜日別(平日と休日)で変化がある。一定の作品内容には一定の観客構成がある。強力な作品を二週連続した場合、一週目と二週目の観客構成は変化する。②興行形態の変化による観客の動向、二本立を好む者の率は、料金の割に沢山観られると云う理由で非常に高くなつてゐる。同じ作品を二度観に来る者は極めて少く、又二度観に来る者の多くが男性である。

(B)一つのケースとして、戦争ものといわれる映画を考察する。(一九五二年一〇月から五三年六月までに封切られた邦画六本を対象として)観客構成の性別は圧倒的に男性が多い。年齢別では若い層の多いものと、中年層の多いものの二通りにはつきり分けられる。観客の六割が六本の映画のどれかを観ており、しかもえらび方に一定の組合せがある。動機は「戦争ものだから」が最も多く、感想は「戦争はいやだ」が多い。映画は、ぼくぜんとしたイメージを持つ者に一定のはつきりした型を持たせ、また全くなかつたものにもイメージを作り出す。

しかしそのイメージは、各々の観客の受けとる立場で変化している。映画の社会的影響は、映画以外の他のマスコミュニケーション全般との相互関係として、有機的に理解せねばならない。

(122)

マスコミュニケーション内容
分析方法を応用したTAT
分析の一研究

早稲田大学 江川 允通

現在進められているTAT日本化の課題の一つとして、日本の文化型相に應ずる分析法と、その前提となる人格・行動理論とを立てることがあろう。これに対して同じく想像生活の問題を扱うマス・コミュニケーション(特に娯乐的なそれ)の内容分析法(特に力動的なそれ)の知見は貢献する所が多いであろう。この見地より米、独、仏の劇と映画の内容分析の、既往のクロス・カルチュラルな研究成果を考察するとき、サージェント等のTATのニード・スレット(またはプレス)分析は、アメリカ文化に局限された、自我と外界との対立を前提とする行動理論に基づくもので、行動に関する唯一の普遍的法則ではありえない。そこで、このようなクロス・カル

テニラルな資料と、日本映画の分析資料特に発表者の試みた母もの映画及びメロドラマ物の分析より、観照的ともいべき行動型相、並にこれに従う筋骨構造が抽出される。それは、無欲求、対象と自我の融合、手段の目標以上の強調、非現実等の諸特性のコンステレイションであり、コミュニケーション分析によつて得られた内的構造連関と、これを支えている、マートンに指摘されたアノミーの社会構造や、ミードの説く相酬的人間関係等によつて説明されるものである。さて、このような想像生活の型は、当然、同一の水準にあるTAT反応にも期待されるべきものであり、現に、大学生より得られた早稲田版TATに対する反応の再検討において、約一二、三人の反応のなかに顕著な観照型の例が見出され、これらは、通常のニード・スレット公式に基づく分類法によつて分析される前に、まず、この公式に妥当しないものが、目標行動に非ざる観照行動として分類され、観照行動の構造に従つて分析されるべきであらう。そして、このような構造は、前述のように、日本文化のコンフィグレーションの内理解されるものであらう。

(123) 知覚学の応用 (I)

——テレビ画面の知覚——

東京教育大学 小保内 虎夫

知覚に関する知識は、いろいろな方向に利用されている。今回は、テレビジョンに関することを述べる。テレビジョンは、画面あるいは光景を微小な絵素 (Picture element) に分解し、絵素の光の強弱を電流の強弱に直し、これを電波で送り、受像側では、それを光の強弱に変え、像として再生するものである。この場合、映画の場合と同様、視覚の残感という性質が利用される。ただしテレビでは、映画を微小部分に分ち、それらをつぎつ

ぎに呈示し、しかもそれを同時的畫面として知覚させるようにしている。映画の場合よりも条件が一層複雑となる。それにしても、残感という点では映画と同一である。

このような撮像を行うために複雑な電気回路が使用され、そのため各種の電氣的妨害を受ける。それがテレビ画面の像を歪めたり、像を見憎いものにしたたりする。たとえばラヂオのハムに当るものは、画面に現われる雲のようなもの、画面が波打つたり、部分的に縮まつまりする現象である。またこの画面の伸縮は、電子ビームに加える電圧が規則的に行われないことからおこることもある。ともかく、いろいろな原因から画面が崩れる。こういうものは、装置の改良によつて救われるであろうが、しかしそれには限度があり、また仮にそれが理論的には可能であるにしても経済的事情から、それができない場合もある。また画面が完全でなくても知覚としては差支ない場合もある。すると知覚として許容される限度を知り、それに基づいて機械設計をするということが必要になる。ここに心理学からの応援が要望される。いづれにしても画面の知覚を適正ならしめるように設計することがつねに必要であり、知覚の性質を難れてはテレビ画面というものは考えられない。今日、テレビ技術者にとり感覚生理や知覚心理の知識が必要的とされているのは、以上のような理由によるのである。

(124) 実験催眠学の誕生について

東京教育大学 成瀬 悟 策

実験催眠学という語はここで初めて使われるのであるが、これは従来のいわゆる「催眠術」から脱皮した最近の研究傾向を特徴づけるために用いたもので、臨床的観察を主としたあいまいな方法を改めると共に、単に機械

的実験場面だけを偏重するやり方をも修正して、催眠を出来る限り科学的に理解しようとする実験的研究の体系を意味している。本報告では、かような実験催眠学がどんなにして誕生するに至つたか、および現在ではどんな研究が行われているかについて概括する。

Mesmer が作り出した汚名は Janet, Prince, Bramwell などの注意深い観察によつてようやく払拭されたが、Freud の批判に耐えるにはあまりに臨床的にすぎたため一時おとろえてしまった。Elli は心理学的実験方法を巧妙に駆使して緻密な研究を行い、催眠研究に新しい希望を与えた。彼はこれによつて従来の誤つた多くの事実を修正を加えたが、同時に、機械的な実験導入と、催眠状態の無差別な適用により、催眠特有な現象の安易は否定を結果し、催眠概念に関する多くの混乱をもたらした。第二次大戦中にもたらされた催眠診断法と催眠療法の発達は同時に催眠の性質に関する真摯な反省をうながし、ようやく新しい研究が初められるに至つた。この傾向を象徴し、助長するものは英国および米国に設立された専門医学者および心理学者による国際的な学会と、その機関誌とである。Le Cron の編集した Experimental Hypnosis (一九五二) は催眠研究の世界的諸権威の執筆になる最初の科学的労作であり、この書によつて実験催眠学の誕生と見なしてもよいであらう。それは世界各地に各会員の科学的研究への意志と努力との成果の象徴であるからである。我が国でも英米両国学会からいろいろ研究上の補助を受けつつある。ここにおいては各地から送られた研究資料をもとにして、最近の斯字の方向を概括し、従来と異なる傾向を主として報告した。

催眠幻覚状態における心像の分解と融合(4)

—正常残像と催眠幻覚残像との比較—

東京教育大学 小保内 虎夫
東京教育大学 ○須 田 陽

従来、正常時の残像現象については、内外の心理学者生理学者によつて、数多くの研究がなされ、ある程度の結論を得る所まで到達しているが、催眠という異常な状態でのそれは、まだきわめて研究者もすくなく、未解決の問題として残されている。本実験はこの点についてならぬ手がかりをつかむためにおこなつたものである。本実験で被験者として使用したのは、一〇歳—二歳の残像に関する知識を持たない小学生九名(八、九一)である。刺激としては灰色カードの中央に貼付された青、赤、黄、緑のそれぞれ純色色紙を使用し、凝視時間四、五秒の後灰色カードに残像を投射せしめた。その結果、正常時では補色系統の色としてあらわれたもの七二・七%、同色系統としてあらわれたもの一八・二%であり、催眠時では補色系統七一・四%、同色系統二〇・〇%であつて、割合の上での差は殆どないものと見られる。また潜伏時間、持続時間を正常、催眠の両状態について比較してみると、いずれも催眠時の方が若干長いという結果があらわれたが、その差はきわめて僅少であつて、決定的なものとはいえない。さらに催眠暗示によつて灰色カード上に色を幻覚化させ、その色についての残像を見ると、補色系統のもの一七・六%、同色系統のもの六四・八%と同色系統の色が絶対多数をしめしている。これは被験者の年齢から見て、直観像現象と考えられないでもないが、むしろここでは催眠暗示の効果が、刺激カード除去後もそのまま残つていたための現象と解

かしたい。

つぎに具体的な色を刺激として与えておきそれが他のちがつた色であると暗示した場合その刺激色は暗示によつてあきらかに変容した。そしてそれは刺激色と暗示色のいずれかの要素が優勢であるにせよ、混色する傾向が一般に見られた。しかもその場合、暗示色の方が優勢であつた。変容した色についての残像は、補色系統三三・三%、同色系統四一・七%であつた。この場合、変容の暗示が完全に奏効していれば、幻覚色についての残像実験と同じか、あるいはそれに近い結果になるはずであるが、このように同色系が減少して補色系が増加したというのは、刺激色の作用によるものと思われる。

欲求の機能と構造

愛知学芸大学 西 島 義 雄

I 実験(予備実験)

イ、目的

反応過程の律動としてあらわれる傾性を精神電流現象で把握し、欲求の一面について考察しようとする。

ロ、手続

(実験手続Ⅰ) 暗算中の精神電流現象。

(実験手続Ⅱ) クレペリン加算テスト中の精神電流現象。

象。

以上Ⅰ、Ⅱによりそれぞれ変化率を算出。

ハ、結果および考察

- 1、精神電流現象の Oscillation には法則性が存在するもののように考えられる。
- 2、この法則性は個人差が大きい、性格による変容形態には特徴が見られるように思われる。
- 3、欲求としての傾性は、常に他の諸傾性と相互に交差し合い、複雑な複合体の変容発展過程と考へなければ

ならない。

II 全般的考察

- 1、縦および横座標にそれぞれ欲求傾性の現象の持つ価値の強さと、標準目標に対する価値の強さを記入することによつて得られるカーブは、欲求の強さを量的に示すといわれているが、傾性の複合体を欲求と見るとき問題がある。
- 2、欲求には常に制止現象がはたらくのとも考えられる。このことから傾性の律動性の説明がなされる。
- 3、欲求測定に関する諸問題は、他の科学にも見られる問題と同一性格のものであることが多い。

社会 II

第二日 第五室

遊びの場に於ける先輩と後輩

慶応義塾大学 斎藤 幸 一 郎

数名の児童である遊びをする場合、その遊びに関しての先輩の占める率の多少により、この遊びの経過が異なる。本研究は、この点を実験的に究明する目的で行われた。

一周約一〇米の軌道を持つ模型電気機関車のセットを作り、全行程を四区間にわけ、各区間に一駅ずつを設け毎回の実験で被験者を各区間に一人宛配置し、かれらには、自己の分担区間に限り停車、発車を自由に行える停車スイッチを一つ宛与え、なおこの中の一人の被験者の位置には、単独でも軌道の電源を切れる妨害スイッチと、共用のブザーを鳴らせるブザースイッチとを附設した。これら各スイッチの操作の状況を分速五種の記録紙上に自動的に記録した。

男女生徒三〇名を一、二、三群にわけ、各群毎に四名を四五分宛三回訓練して先輩に仕立て、これら先輩三名対後輩一名、先輩二名対後輩二名、先輩一名対後輩三名の四人宛の組を各群毎に作り、合計九組につき各四五分宛観察比較した。妨害・ブザースイッチ付設置位置には、先輩中の一人を配置した。

停車スイッチの操作回数は、先輩が減じ後輩が増すに従い増大した。これは先輩にも後輩にも見られ、先輩が多い場面では、各児童の行動は不活発、不自由であり、先輩が少いほど、行動が活発、自由になることを意味する。又停車スイッチの操作は先輩・後輩各二名の時は稀であり、先輩・後輩の力の関係が不均衡である時（先輩三名対後輩一名、或いは先輩一対後輩三名）は多く使用された。

ブザースイッチの操作回数は第二・三群では、先輩一対後輩三の時の方が一番大であり、第一群では、かかる傾向はなく、先輩二対後輩二の時が最大であった。

(128) 遊戯集団における morale に

ついて

奈良女子大学 ○浅井 浅一
名古屋大学 大西 誠一郎

集団内で、そのスタンダードに合致するものは迎合され、合致しない者は集団から拒否される。いま、等質遊戯集団に異質の成員を関係させ、集団の新しい成員をいかに受容し、拒否するか、その交渉過程を観察し、遊戯集団のモラルの性質を究明してみた。

一〇名ずつの等質集団小学四年女子 A・B 二群を作り他の学級より異質成員二名 P₁、P₂ を選ぶ。まず成員の興味を調査し、縄跳び遊戯をさせた。ただし A 群は遊戯開始後一〇分で P₂ を入れた。P₁ に、または P が話しかけ手を

かけ指示する頻数、および積極性、受身性を二〇分ずつ観察した。

A 群内の交渉関係は前半一〇分（四〇％）よりも後半一〇分（六〇％）が多いが、行動の変化は両群とも同じで、P は集団構造と無関係に受身行動が多い。P は指示されることが減じ、手をかけられることが多くなる。一般に交渉は身体接触が言語に先行する。集団側から眺めれば

(1) 異質成員の受容は見かけ上であり、機能的ではない。
(2) また集団は異質成員に同一化を要求し成員もそれに従う。

(3) 異質を秩序においてうけいれる。異質成員の占める集団内の位置は、他の成員によつて決定され自分でこれを変更することはできない。

(129) 児童の交友関係に関する

一研究 (その一)

— 学級における結合と

分離の要因について —

東京教育大学 ○横山 雅臣
東京教育大学 横山 映子

従来の交友関係についての研究を、次の二つに大別し得る。すなわち、①児童青年の交友関係の構造、その離合の理由、およびそれらの発達的あるいは性的差異についての研究、②それらの時間的推移の過程についての研究である。

本研究は、ほぼ前者の立場に立つものであり Moreno の社会測定法に従い、小学校児童を対象として学級における結合と分離の要因について発達的に考察したものである。「被験者」小学校一年から六年までの男女児童計

六三六名。

方法 Austin, Thompson の研究による（筆答法）但し、一、二年は面接法による。

結果 友人結合の前提として、学級の内外において、たびたび接触する機会を持つことが考えられると同時に興味、要求の類似をあげることが出来る。しかし、これらは必要な条件ではあるが、充分な条件でなく、性格的行動的要素がその主因であるといえる。更に低学年にあつては児童の心的構造が未分化であるため単純な外部的要因によつて全面的な結合と分離が生ずるが、学年の上昇にしたがい、種々なる結合が構成され、関係は内面的になるといえる。

(130) 児童の交友関係に関する

一研究 (その二)

— 交友得点・交友類型および

異性との交友について —

東京教育大学 ○横山 映子
東京教育大学 横山 雅臣

「児童の交友関係に関する研究(その一) — 結合、分離の要因について」の続報にあたるもので①学級における児童の社会的地位（交友得点）および②学級内におけるグループ（交友類型）の二問題に検討を加えたものである。

研究方法は「その一」に準ずるもので Austin, Thompson の方法による質問紙を小学校児童六三六名に課した。

性別・発達的に上述の問題点を考察すると次の如くなる。

① 交友得点の分布には、全体的に男子と女子と反対の傾向がある。すなわち、平均得点は女子が比較的高く

男子は低い。而して両性とも、三年、四年に中心化の傾向がみられる。

② 交友得点を四段階(A・B・C・D)にわけると男女共にB段階に属する者が最も多く、三年だけはCに属する者が多い。

③ 学年別に見ると、男子は四年以後、女子は三年以後に規則性があり、低学年は全くirregularである。

④ 学級におけるグループを見るに、全体と相互的結合が最も多く、その百分率は学年の進むにつれて増加している。

⑤ 全体的に、男子の学級内社会構造は、女子のそれに比して安定していると考えられる。

⑥ Moreno の調査の「三年以後の中心児童の出現」の傾向は全く見られない。

⑦ 孤立児童は比較的男子に多く、四年以後は男女共に減じている。

⑧ 結合・分離の状況を性別に見ると、男女共学年の進むにつれて、仲好対象を同性に、仲悪対象を男子とすることが多くなる。

⑨ 四学年において、学級内社会構造の転換的位相が見られる。

(131)

ソシオメトリーによる学級

変動の影響の測定(その一)

慶応義塾大学 ○ 関本 晶 秀

精神医学研究所 佐野 勝 男

従来の社会計測法は選択人数を数人に制限するため、選択はスターに集中し、集団の上位に位する人々に就いてはその地位を明かに表せた。しかしその集団の中及び下位に位置する成員の地位や Mutual の関係は明確に表せなかつた。かかる弊害に除くため選択数の制限を除去し、この個人の出す選択数は、被選択数と同様一つの心

理的意味を持ち、包括的にはあるが個人の性格的差異を表すのに役立つ。更に選択の強度を表すため、無制限にあげた人の中から特に好きな人に○を記させる方法と級の誰が自分を選んでくれるかの予想の質問に対する解答からその選択強度を測つた。これで①学級変動の交友関係に及ぼす影響、②学級変動が個人の地位に及ぼす影響の二側面を見た。今回は後者に就き、特に Star の地位の変動を考察した。

対象は東京の某高校生で「遊び」「勉強」「親友」の三つにつき、組替え前、一カ月(一学年)、後二カ月(第二学年)以上二回は全組及びその九カ月後(この回はA・H組のみ)の三回調査した。

結果 三回とも調査したA・H組についての変動を見る(ただし「遊び」の criterion に基き考察する)と、

① 学級変動の影響を受けて地位が変動し易い不安定 Star と地位が安定している安定 Star との二種類とが見分けられる。

② 両スターの選択数には明らかでない。即ち不安定な所謂人気スターは自らも他の多くの者を、選択する傾向を示し、積極的に他に働きかけることによつて、どうやら自分の地位を保つていようと思われる。

③ 生徒のあげた理由を所謂堅実型のスターの持つ特性とそうでないものと分けて見ると、両スターの選ばれた理由には明らかに差異がみられる。尚、両スターの人格差異をより深く探究する事例的研究、及び学級活動に於ける両スターの役割に対する考察は、今後の研究に俟ちたいと思う。

(132)

社会認識の発達

東京学芸大学 辰見 敏 夫

社会認識の問題で従来体験的認識と知識としての認識

の違いにつき、その分化状態が不明であつたため多くの誤解を生じた。

本調査は道徳的情操、理解力、判断力の立場からこの二つの社会認識の立場を明かにするために行つた。

『こんだ電車内で四つぐらいの男子が外を見るため母親が抱くときに「外が見えない、だつこして」と求めたので母がそれに応じたところ連れの四〇過ぎの女が、母親に「あんた、だめよ、一生けんめい一人で子供を育てているんだから、今からそんな、わがままを、させると大きくなつてあんたのことを捨てちまうよ降しなさい」と言つた。母親は「たん子供をおろしたが子供にせがまれて困惑したが思い切つたような態度で「捨てられてもいいわ」とつぶやきながら子供のいうなりになつた。』

この文について、正、不正を判断させ、それから次の点を幼稚園、小、中、高、大学、各一〇〇名以上につき調べたが、①母の愛情につき、いかなる理解力を示すか。②子供の立場を「子供だから」という立場から、見れるのは、いつ頃か。③連れの小母さんの言葉に対する批判がどう変わるか、を調べた

結果は①母親の愛情については、中学一、二年の間と小学四、五年の間とに著しい態度の変化がある。中学二年で、大人としての立場から母親の愛情を認識し得るわけ、中一、小五、六ではこの認識がまだ不十分である。小四では自分のしつけられた道徳的判断が主で愛情の問題は理解できず、単なる知識のようである。②中二頃から子供を子供として見ることができ、それ以前は、ただいわれた通りに判断しうるだけで、まだ認識していない。③連れの婦人についての理解は一番問題が困難で中二でやつと「捨てる」ことに対する反省が生れていく。従つて、中一以下では、婦人の立場をよいとする者が多い。

☆☆☆☆

(133) 言語の心理 ①

— 場面による他称呼行動の差 —

東京教育大学 村石昭三

日本語の一特質として考えられる他称呼行動の場面による相違をとりあげ、言語の心理の一考察とした。本報告はその中の母親称呼行動につき男女幼稚園、小、中、高校生計八七〇名を対象とし、次の場面について無記名または面接調査したものである。

母親のことを日記、作文、友人あての手紙、母親あての手紙に書く時、学校の教師に、学校の友人に話す時および家で母親と話す時において、どう呼ぶかということ調査した。

その結果 ①家庭内での母親称呼では、△おかあちゃん▽称呼が小学校一年まで優位性を保つが小二以後は△おかあさん▽称呼がこれにかわる。幼児語的称呼行動が高学年にまで継続されるのは家庭内という閉鎖的場面にあるためと思われる。②場面による△は▽称呼では作文場面が最高で、友人場面が最も低い。母親の客観的称呼行動としての△は▽称呼は小五から行われ、社会性の発達を示すものと思われる。③場面による△おふくろ▽称呼では、友人場面が優位性を保ち、中二の男子から行われ、母親からの心理的離乳としての称呼行動を示すものと思われる。④場面による△おかあさん▽称呼への転化では、教師場面が最も早期で、小三から圧倒的な転化が見られる。⑤母親称呼の転化系列では、例えば△は▽△おふくろ▽称呼には前段階の称呼行動として△かあさん▽△おかあさん▽称呼が必要となり、一般的に転化系列の規則性が見られる。

本報告は調査方法、場面考察になお問題の余地を残すが、最後に、他称呼行動は場面により種々な相違があり

発達の児童青年の精神発達と密接に関係するという結論を出すことができる。

(134) 特殊教育に於ける社会年齢の進歩

浦和市立常盤小学校 荒井富之
浦和市立常盤小学校 福島吉郎

一、課題の動因

- 1、鑑別に於ける社会的基準
 - 2、特殊学級に見られる現実
 - 3、特殊学級教育の基本的指標
 - 4、特殊学級教育の評価
- 二、社会的成熟

- 1、特殊学級環境の影響
 - 2、指導によつての進歩
- 三、社会年齢の評定尺度

1、ドル博士の鑑別六項目

○歳から二五歳まで一一七項目

2、私案評定尺度

a 移動の範囲

b 作業(掃除)能力

c グループ遊び

各項目を五段階に分類

(a) 2 + 一二歳以上 (b) 1 + 一〇歳 → 一二歳

(c) 0・五歳 → 一〇歳 (d) 1 - 三歳 → 五歳

(e) 2 - 三歳以下

各段階に年齢を評定する具体的事項を配列する。

四、福島学級児童の評定

五、推論されるもの

- 1、特殊教育の目標の是正
- 2、特殊教育に於ける評価の是正

3、教育一般への貢献
六、今後の仕事

日本の社会年齢評定尺度の確立
社会的成熟指数(S・Q)

(135) 親友形成の条件

山口大学 亀井定雄

中・高・大学生計七二七名を対象とし、親友形式の条件を調査した。その要領は Runner, J. R. により、①友人関係を親密度即ち「社会的距離」により、信友、親友仲好し、知り合い、積極的な仲間、消極的な仲間、見知りの七段階に分け、信友と親友との人数を記入せしめた。②何時から信(親)友になつたか、③信(親)友の年齢、④どうして信(親)友になつたか(動機)、⑤いかなる点が好きか(好感)、⑥いかなる点が似ているか(類似点)、⑦いかなる点が異っているか(相違点)等につき記入せしめた。

結果 ①信(親)友の人数一二・三歳頃が多く、その動揺度も大である。これはこの時期には、彼等は未だ信

(親)友の真義を解し得ぬことを表すか、未だ真の信

(親)友はできていないことを表すのであろうか。②は

これを裏づけていると考えられる。②は男女共一六歳頃

から信(親)友になつた時の年齢が変動しなくなる。い

いかえると信(親)友が固定してくる。この頃は高校一

二年時代に当り、所謂無二の親友のできる頃であらう。

③相手の年齢については、何れの段階でも本人と同年齢

の相手を選ぶ傾向が強い。(約七・八〇%)、④動機、⑤

好感、⑥類似点、⑦相違点について概観すれば、先ず動

機では、住居、通学路、組等の相互的接近、趣味、興味

勉強等の近似、思想、感情、性格等の共鳴や尊敬等があ

り、そのうち大学生に趣味や興味等の近似性が高い外著

しい傾向は見られない。しかし、好感、類似点、相違点は何れも中・高・大学生共性格的特質が最大要因で、学業成績、知能、体格等の要因は僅少である。これを見るに親(信)友形式の条件は相互接近、趣味、興味、勉学、学業成績、知能、体格等の類似性を動機(契機)として乍ら選択理由は性格的要因が支配的であることが分る。この傾向は中・高・大学と進むに従い益々顕著になるようである。又相違点では男女共自己に欠けた相手の長所を指摘する傾向が強く、信(親)友相互に相手から学ぼうとする態度が見られる。信(親)友が全然ない者は約9%でその多くは内向的な者か自我意識の強い者のようである。

(136) 小集団体制化過程の研究

名古屋大学 大橋 正夫

① 当初体制化されていない小集団に適当な集団作業を与え、適当に動機づけると相互作用の時間の増大と共に体制化の程度を増すであろう。②この場合、全体の相互作用の数に比して自己要求に方向づけられた相互作用の数は減少するであろう。この二仮説検証のため実験を行った。体制化されていない集団は分化した役割がないが、集団活動を続けるうちに次第に役割を分化させ、それが成員によつて容認されて行く過程が体制化の過程である。上記仮説はかかる意味の体制化が時間の経過に伴つて進行することを意味する。勿論体制化は時間以外の多くの要因規定を受けるが、その手始めに物理的時間を体制化の函数の独立変数にとつた。中学一年男子につき予の行つた acquaintance ratings により互に知合つていくことの最少と思われる五人を一組とし、一八群作成し地勢模型を作らせた(作業時間正味四〇分)。大別して三群から成り、A群は二〇分、B群は三〇分で中断しC群

は四〇分の作業終了後、役割投票(指導者、追従者、不熱心者)をさせた(無記名)。その結果指導者についてのみC群が他群より有意な差でよりよく一致した投票をしその他は有意な差なし。従つて①の仮説は部分的にのみ検証された。自己要求に方向づけられた相互作用(S)とは役割のために役割を求めたり、緊張解消、攻撃など集団目標に消極的意味しか持たぬものであり、(T)とは積極的意味を持つものである。その最小の意味するままとまりを一回の相互作用として二人の観察者が各成員の所与の五分間に行つたS及びTの数を数えた。二名の観察者の scores の相関係数は平均〇・八五で十分信頼しうる。観察の結果②の仮説は略検証された。

本実験で被験者の人格を統制しなかつたのは主として実際的問題からであるが、この点その他実験操作を改善することにより、検証されえなかつた所も検証されうると期待される。

(137) 集団社会の戒律の過剩飽和と内輪飽和

奈良学芸大学 阿部 孫四郎

閉じた制限領域としての集団はその成員がn人である時には、飛鳥 $In = \frac{1}{2}n(n-1)$ (n-2)箇を内を含む Jordan 曲線で現わされる。此時各個人はこの領域中の動点で、領域は人間関係として動点の運動可能性の範囲であり、飛鳥は運動禁止としての戒律に当る。飛鳥が動点の立入禁止区域だというのは、もしもそこに動点が押入つた場合を考えれば、飛鳥の減少を意味する故、集団成員の数の減少をきたすために外ならない。飛鳥即ち戒律をもつという事は集団の特性であり個人および二人の集りには現れない故、個人性に対する社会性の特質として取るべきものであり、従つて戒律を調べるならば集団の

社会性を明かにすることになり、戒律の数は元來その集団の成員数と緊密に結びついている等である。ここに二つの問題がある。①個人が動点として一人前の力をもたない場合、成人の社会ではその成人のこぶとして、その自立性を無現した人数の抹消の形で、いわば内輪に見積られた人数をもつとしてその社会の戒律が進められる。これは子供に限らない。子供が主の社会ではその人数がその社会の戒律では生きた制約をもつであろう。②飛鳥の質は領域の質によつて決まるから戒律の質は社会の質により定まるが、個人はそれら分化した下位領域の間を縫つて運動できるから、同じ飛鳥が分化下位領域の色々な質により幾重にも規定され、互に矛盾した戒律が同じ飛鳥をいどる。そこで一方の下位領域の規定する戒律が他方の下位領域に対し本質的足場をもたないことになり、一方の個人が他方の飛鳥規定、戒律を否定する事態が発生し、實際上飛鳥の数よりも戒律の数が増加する結果となる。これは領域の分化による戒律の過剩飽和である。社会的緊張は予の説では互に矛盾した戒律を含む戒律数の過剩飽和の状態に外ならない。戒律の内輪飽和の典型的状態は封建社会にある。又戒律の過剩飽和の状態は資本主義社会に典型的なものがある。

(138) 集団の成層構造に関する一考察

実践女子大学 ○斎藤美智子
実践女子大学 小谷 和子
実践女子大学 小林 さえ子

課題の構造が集団の指導追従成層をいかに規定するかをみるため成員四名からなる小学五年男子集団二つ、同女子集団二つにつき考察した。ただし成員四名中一名はクラスで成績上位の独裁的指導者であり、他の三名は成

績中位で同クラスにおける周辺者である。四名の間柄は、特に仲がよくも悪くもない。この新たに組織した四名の集団に積木の共同作業をさせ、一名の独裁者と三名の追従者の関係を確かめた後実験に移行する。課題は塗り絵作業。大型画用紙に墨で下図をかき、各自に一箱のクレヨンを与え色を塗らせる。本実験では課題構造の変化は図形構造の変化により操作する。実験系列Aで用いた図形は実線で図柄が四等分され、各領域細部の模様は同じ。B図柄四領域に実線で等分。但し細部の模様は各々異なる。Cは四等分の実線はないが同じ模様の空間的排列に四分節がある。Dは異なる模様でその排列に四分節あるもの。Eは単一の統一模様。Fは再び四分節の同じ模様の図型。Gは統一的且つ四分節の図形。H統一図形。I白紙。Jは統一的三分節図形。以上の中A、B、C、D、Fを便宜上「四分節図形」とよび、他の五系列を統一図形と呼ぶ。全系列につき四人できれいに色を塗って下さいと教示。机の中央に図形をおき四辺に座した成員が色を塗る。集団作業中の有意味的社会的言動の一切を記録する。

結果 社会的言動を、優位的(上から下への傾斜を示す関係)、服従的(優位性と逆)客観的(対等)の三類型とし、各系列四被験集団の社会的言動をそれによつて分類した。すると、(1)四分節図形では一般に客観的言動が多く優位的、服従的言動少い。しかし統一図形ではその逆の傾向。(2)特定指導者の他成員に対する言動は、四分節図形では客観的言動多く優位的言動が少いが統一図形では逆。(3)成員の指導者に対する言動は統一図形の方が一層服従的。(4)成員間の言動の型は、(1)と同傾向。(5)下位集図形成の数は統一図形で指導者と成員間に特に多い。以上の資料の示す如く、四分節図形では集団成層化は不明瞭で他の課題事態には成立した独裁者も目立たない。然るに統一図形が与えられると集団は成層化し特定指導

者は集団の中心層に出て優勢に言動し、他の成員は周辺にあつて独裁者に追従した。

(139)

方言としての発音による
わざわい

福島大学 田口孝之

本学で実施した本年度入試国語問題中に、第一に文を示し、その大意を把え「記憶」の項を説明したものと答え、第二にそのうち仮名で示された五カ所を想起、再認、機能、知覚、内包と書くことが要求されていた。これに対し知覚、想知、知能、機能と書いた者が四五名延べ五一名あつた。この中にも合格者が九名いる(合格者数六〇〇名)。無相関検定の結果は方言使用の有無が試験の合否に大きく響くことを示している。これについての結果を要約すると①小林好日氏の「東北の方言」にはキをチの如く発音する傾向が東北全般にみられるとあるが、両者の何れへも流れる完全な混同であると思える。②発音の混同は書字の場合にも滲透している。福島市以南には殆んどこれはない。それより北に県内では一〇名、宮城県に二七名、岩手県南部に二名、それに会津方面に六名あり、ほぼ旧伊達藩領内に含まれている。新潟、山形、秋田の裏日本にはこの誤はない(以上すべて今回の受験生の場合)。③この点につき関係大学又は教育委員会事務局に紹介して得た結果にも符号していた。

次にこの種の混同を小・中学について見る。但しここでは書取でなく漢字の読を課した。対象は福島市及び会津方面の代表として坂下町に小中校各一校をとり、五年から中学三年までにつき実施した。その結果①読の時も同じくキとチとの完全な混同である。②この混同は福島市には全くない。③会津では平均して五年六三・六%、中学三年で約四〇%の者に見られた。④会津では担任教

官に生徒児童を学業成績により上中下三段階に分けてもらい、方言による誤答出現率をみたが、学年に従い成績良好者程早く減少していた。⑤誤答出現率は文字により相違するが、局、究、直、腸が著しい。以上はキとチとの混同のみについての調査であるが、方言研究は国立国語研究所年報にもある如く語イに関するものより発音即ち音韻についてのそれが実は重大と考えられる。